令和5年度

第38号

教育実践研究論文集

公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部



「教育実践研究論文集 | 第38号の発刊に寄せて

公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部 支 部 長 大 竹 誠 司

教職員の皆様には、日頃より(公財)日本教育公務員弘済会千葉支部(千葉教弘)の諸事業に深いご理解 とご支援をいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。また、多くの方に日教弘の趣旨にご賛 同いただき、「教弘保険」にご加入いただくことで教育振興事業をはじめとする当支部の諸事業が実施で きておりますこと、重ねて御礼を申し上げます。

さて、当支部の「教育実践研究論文」募集は1976年(昭和51年)度にスタートし、本年度で47回目を迎えました。

「教育実践研究論文」募集事業は、当支部の教育振興事業の大きな柱の一つであり、その目的は、児童生徒の教育・人としての成長に寄り添い、努力と研鑽を惜しまない教職員の教育実践と研究意欲を奨励することにあります。そして、その中で健やかに成長していく子どもたちの姿は、「最終受益者は子どもたち」という私たち日教弘・千葉教弘の理念の具現化にもつながっているものと考えております。

令和2年の年明け早々から長く新型コロナウイルスの影響を受けましたが、感染者がいなくなったわけではないものの、多くの場面で日常を取り戻したように感じます。この間学校では、これまで経験したことのない状況への対応に多忙を極めたと思いますが、困難な状況の中でも児童生徒に寄り添い、できることはないかと知恵を絞った教職員のチャレンジから、多くのすばらしい実践が生まれたのではないかと思います。教弘の教育実践研究論文は、子どもたちや学校、地域の実態に即し、求める児童生徒・学校・教職員の姿に迫ろうとする実践の中から生まれた知見であることに大きな価値があると信じています。

今年も、日々の教育実践をまとめていただき、学校部門18本、個人・グループ部門23本、合計41本の応募をいただきました。校種では、幼稚園・こども園1本、小学校27本、中学校8本、高等学校3本、特別支援学校2本となっており、すべての校種から応募がありました。

厳正な審査の結果、今回入賞された方々は別掲の通りです。入賞された皆様には心よりお祝いを申し上げます。また、今回入賞されなかった皆様におかれましても、引き続き研究を深められ、その成果を日々の実践に活かしていただきたいと思います。

21世紀を生き抜く子どもたちを育むことは教育に関わる者すべての使命だと思います。県内の先生 方が、本冊子に掲載された実践研究の成果を日々の教育に役立てていただければ、この事業は大きな成 果を上げることになり、当支部としてこれに勝る喜びはありません。

千葉教弘は、今後も事業の充実を図り、児童生徒の学びやすい環境づくりや学校教育の支援など、「最終受益者は子どもたち」という日教弘の理念のもと、教育振興事業の充実に尽力してまいります。今後も、多くの教職員の皆様に「教弘会員」になっていただき、引き続きご支援をいただきますようお願い申し上げます。

末筆ながら、この間、審査委員長としてご指導をいただいた千葉県総合教育センター所長鉄井修一様をはじめ各審査委員の先生方、さらには論文をお寄せいただいたすべての方に感謝を申し上げまして、 巻頭の挨拶とさせていただきます。



持続可能な社会の創り手の育成と ウェルビーイングの実現に向けて

審査委員長 千葉県総合教育センター 所長 鉄 井 修 一

今年は、明治6年に印旛県と木更津県とが合併し、千葉県が誕生してから150年という節目の年を迎えています。千葉県のこれまでの歩みを振り返り、子供たちにも歴史や地域の魅力を知ってもらい、将来の千葉県の姿を思い描いてほしいということで、教育現場においては様々な教育活動が展開され、県内各地で記念行事も開催されています。首都圏に位置し、自然環境にも恵まれたこの千葉県で、ふるさとへの愛着を深め、のびやかにたくましく、子供たち一人一人が生きる力を育んでいけるよう、学校、家庭、地域が力を合わせて、これまで以上に協働して取り組んでいくことは大人の使命です。

一方、3年にわたる新型コロナウイルス感染症への対応にあたり各学校では、保護者の理解や協力を得ながら、感染拡大防止と学びの継続の両立に努めています。1人1台端末の活用やオンラインによる学習等は、時代の求める取組として、さらなる推進が必要だと考えます。子供たちを取り巻く世界は、将来の予測が困難な時代をむかえ、これからさらに多様化・複雑化していきます。2030年までの世界の行動指針であるSDGsの17項目の一つに「Good Health and Well-Being(すべての人に健康と福祉を)」が掲げられ、文部科学省は新しい時代に相応しい学校づくりのあり方として、"教員・子供双方が幸せに感じる"ウェルビーイングな学校施設を創造すると提唱しています。

こうした新たな時代の要請と予測困難な状況がある中,今年度は,学校部門に18点,個人・グループ部門に23点,研究実践論文の応募がありました。厳しい現状の中でも,子供たちの学びのロールモデルとなる姿を目指し,計画的,継続的に取組を実践し,論文としてまとめ,応募いただいた学校や先生方の熱意に,あらためて感謝申し上げます。

今年度の論文の中には、昨年度から今年度にかけて改訂・策定された千葉県・千葉市教員等育成指標の新たな柱となる「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」や「ICTや情報・教育データの利活用等」に関わる取組が多数見られました。また、SDGsや道徳教育等の現代的な課題やニーズに積極的に取り組んだ研究、地域や学校の実情・特色・課題等を見つめ直し、人的・物的体制を確保しながら、カリキュラムマネジメントを充実させていく研究など、「私の学校で、どのように教育効果を高めるのか」ということを読者に具体的に考えさせる実践が数多くありました。学校部門・個人部門ともに、日常の実践を基盤とし、「学び続ける教師集団」とはどんなものなのかを示唆していただいたことに、深く感銘を受けた次第です。成果を広く共有していくことは、最終的に子供たちの成長につながる意義ある試みです。今後とも各学校や先生方には、「教職員や子供たちのために」という視点から、機会を捉え実践に根差した素晴らしい研究を応募していただくことを期待いたします。

結びに、教育実践論文を募集されました公益財団法人日本教育公務員弘済会千葉支部様の長きにわたる 取組に敬意を表するとともに、これらの論文の普及により、多くの学校や先生方が論文集を手に取り、 実践していくことが、教員・子供双方が幸せに感じるウェルビーイングにつながることを祈念して あいさつ(講評)とさせていただきます。

審査委員

審査部門

審査委員長	千葉県総合教育センター	所長	鉄 井	修一	学校部門
審查委員	千葉県総合教育センター	カリキュラム開発部部長	鈴 木	賢一	個人部門
審查委員	千葉県高等学校長協会	会長	横瀬	正史	個人部門
審查委員	千葉県特別支援学校長会	会長	松 田	厚	個人部門
審查委員	千葉県小学校長会	会長	酒 井	昌 史	学校部門
審查委員	千葉県中学校長会	会長	日根野	達也	学校部門
審查委員	株式会社千葉教弘	代表取締役	渡邉	均	学校部門

(敬称略)



— 目 次 —

あいさつ・	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	1
公益財団法人	日本教育公務員弘済会千事	葉支部 支部長	大竹 誠	司		
審查委員長	千葉県総合教育センター	所長	鉄井 修	_		
審查委員・	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	3
// 	n					
《最優秀賞	>					
学校部門	HAN A OFFI	. 1. 64				
	目指した3観点への15の		光祖の##			
~指導刀	向上と働き方改革及びIC			~ 5長 小林 幸-		7
		仏尸用 五面	小子 权 42	(区 // 小小 宇		1
個人・グループ	プ立尺月日					
	ノ메リ ある生徒への教科学習の充	を宝に向けため:	如 /	の取り組み		
	める生徒への教科子首の元 育(気象分野)における教師			の取り組み		
至什么		対話的で深い学		受業づくり~		
	千葉県立東葛	あの森特別支援学 権	交 主幹教諭	〕 井上 みどり		12
《優秀賞	>					
学校部門	//					
	的に学び合い、達成感を味	たわえる校内研	修の在り方			
	を活用した授業改善に向け					
	1	季取市立小見川中	一 央小学校 杉	だ長 島石 耕治	à	17
ICT及びā	教育データの利活用から始	合める学校づく	Ŋ			
~教職員	の働き方改革とともに進め	った「いじめ認	[´] 知システム	」の効果的運用	 ~	
		山武市立	日向小学校	校長 大木 圭	<u> </u>	22
個人・グループ	プ部門					
肢体不自由	児の体育指導における「主	三体的・対話的	で深い学び	」を目指した授	受業改善	
~「準ず	る教育課程」の車いすラク	デビーの授業実	践を通して	~		
	千葉県	県立船橋夏見特別	支援学校 教	対論 上野 光作	Ē	27
全校児童と	交流をした知的障害特別支	で援学級による	川上小郵便	局活動		
~コロナ	禍の子ども達を元気にする					
		八街市立	川上小学校	教諭 上代 繁	ξ	32

《優良賞》

学校部門

学校教育目標の実現に向けたカリキュラム・マネジメント

~総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・デザインとその評価~

野田市立柳沢小学校 校長 遠藤 恵美子 …… 37

対話型OITの機能を生かした校内研修体制の在り方

~道徳科デザインシート、短時間研修の定例化等を通して~

旭市立干潟小学校 校長 加藤 由美子 … 42

進んで学習する子どもの育成をめざして

~子どもに学習力を! 教師に授業力を!「館小モデル」での取組~

館山市立館山小学校 校長 神作 正孝 …… 47

学校教育活動全体でおこなう「自ら考える人権教育」

~ 「多様性を認め合える穏やかな教育環境づくり」を目指して~

市川市立第四中学校 校長 新部 操 …… 52

「考え、議論する道徳」の実現に向けた道徳科の研究

~生徒が主体的に取り組もうとする授業の充実を目指して~

御宿町立御宿中学校 校長 吉田 誠 …… 57

個人・グループ部門

自他を認め、共に生きる社会をめざして

~多様な性について、教職員や生徒の理解を深めるための手立てを考える~

東金市立北中学校 養護教諭 片岡 明子 …… 62

教 論 大友紀彦・萩原詩穂・青木菜摘 岡 泰三・中川正一・村井裕子

滝口和也・松井康朗

栄養教諭 佐々木朋子

一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援の推進と体制づくり

~通常の学級における、学びにくさが原因の計算につまずきがある児童に対し、つまずきの原因を把握し、個の ニーズに合った学び直しを通してつまずきを解消するとともに状況に応じて適切な就学指導に結び付ける取組~

印西市立本埜小学校 教諭 鳥海 睦美 …… 67

生成AIを利用した情報モラル・情報リテラシー教育

千葉県立一宮商業高等学校 教諭 小城 翔平 … 72

学校に愛着と誇りをもつ児童を育てる

~150周年記念すごろくの作成を通して~

柏市立手賀東小学校 教諭 戸沢 日奈絵 …… 77

《奨 励 賞》

学校部	目	Е
子似即	ı	

福祉教育を核とした地域連携と教育の平常化へ向けての実践
~主体的に取り組み、思考し表現しようとする児童の育成を目指して~
旭市立中和小学校 校長 朝倉 真由美 83
学力向上プラン「松ケ尊塾」の推進
心豊かで意欲的に学び、心身ともにたくましい生徒の育成を目指して~
千葉市立松ケ丘中学校 校長 伊藤 芳仁 ・・・・・・ 88
個人・グループ部門
地域のよさや課題に気づき、よりよい未来を創り出していける児童の育成
~ 「市民が楽しめる鎌ケ谷スタジアム」を計画・提案する実践を通して~
鎌ケ谷市立北部小学校 教諭 本宮 淳平 93
「主体的に学ぶ自立した学習者」を育てる理科教育へのアプローチ ~リスキリングを通して教師自身も「アクティブ・ラーナー」へ~
千葉市理科教育「アルテミスの会」代表千葉市立川戸小学校校長三橋勉・・・・・・98千葉市立大森小学校教諭鷲山克彦 千葉市立小谷小学校教諭平田泰之 千葉市立緑町小学校教諭民部田 悟
中学校での自閉症・情緒障害特別支援学級における「褒める」「認める」ことの有用性 ~「日本一褒めちぎる特別支援学級」を目指して~
柏市立田中中学校 教諭 池永 周平103
(浦安市立入船中学校の) 生徒が自ら学び、自己肯定感・自己有用感を高める実践 ~自尊感情が深まる指導の在り方~
浦安市立北部小学校 校長 西澤 健二108
《佳 作》
《佳 作》 ···································

最 優 秀 賞

学力向上を目指した3観点への15の方策

~指導力向上と働き方改革及びICT活用と家庭学習の推進~

松戸市立高木小学校 校長 小 林 幸 一

1 主題設定の理由

本校は 1900 年に当時の4つの小学校が合併して 誕生した学校であり、創立 123 周年を迎えた。当時 の学区からは現在に至るまで 19 の小学校が誕生し、 古くから地域との大きな関わりを持った小学校であ り、祖父の代まで卒業生が多数住んでいる地域であ る。昭和 50 年に 1500 人を超えた児童数も平成 16 年に 300 人を割ってからは徐々に人数を減らし、現 在159名と市内45校で2番目に少ない学校となって いる。

古くから続く家庭が多いためか、児童は穏やかである。学校では異学年交流に力を入れ、優しい心が育っている。楽しく過ごしている児童は多いが反面、競争力に乏しく、学習に対しても意欲が低調であり、学力テストの結果でも平均点にあと少しという状況である。この傾向は長く続いており10年前より算数を研究教科として取り組んできたが最近は大きな成果が見られていない。

そこで、今回はまずは教員の指導力向上を第一と し、長く続いた算数研究の成果とGIGA スクール構想 のタブレット活用、基礎・基本の定着を狙った問題 分析の活用、そして、家庭学習の充実や働き方改革 なども考慮しながら長い間の課題であった学力向上 に3つの観点へ15の方策をもって児童に働きかけ 学力向上に取り組むこととした。

2 研究の概要

i 研究目標

算数において学習結果の分析を活用した指導と ICT 教材の活用、さらに意欲を高めるための手立 てを工夫することで児童の学力が向上することを 実践を通して明らかにする。

ii 研究仮説

学習結果を分析し、児童の定着度と不得意分野を明らかにし、ICT活用を図りながら指導方法を工夫することで、児童の学力が向上するだろう。

iii 研究の内容

ここでは3観点 (1 知識・理解、2 思考力・ 判断力・表現力、3 学びに向かう力) に向けた 15 の方策を述べる。この 15 の方策を実践することで学 力向上を目指す。

(1) 観点1 知識·理解への方策①②③

: 児童の学力分析とその事後指導及び校内研究で の活用

・ 学力分析は学期毎に行われる学期のまとめテス トで行う。全国学テの分析は国でも県でも市でも 行われている。当然各学校も自校の分析をして公 表している。年に一度行われる各学年の学力テス トもまた同じである。ただこれでは期間が長すぎ て、基礎・基本の定着やその学期の学習内容理解 度がすぐにわからず、データとして出てきたとき にはもうすでに記憶の外にある場合が多いのであ る。そこで本校では学期ごとのまとめテストの誤 答分析をし(担任ではなくいわゆる 7 学年が行 う。)、それを活用した事後指導と事後テストを2 か月後に行い、定着度を考察する。さらに、不得 意分野については次年度の指導でも参考にすると ともに、校内研究でも可能であれば焦点授業の単 元として選び、指導方法を検討する。学校全体で 児童の苦手分野として共通理解することも大きな 目的であり、教員の教材研究の一助にもなる。

(2) 観点1 知識・理解への方策④

:ICT 教材の活用

・ ICT 教材として松戸市が推奨している e ライブラリを使用する。これは4教科の学習ドリルと確認テストがメインで自分で答え合わせができる。また、問題の解説も丁寧に書かれてあるので、間違えた問題の確認や、予習学習にも活用ができる。学校でまたは家庭で、自分で進められる構成になっている。特に算数は問題量が豊富で教科書の単元構成にも準拠している。この教材は①学校で毎週一回朝の15分タイムに全校で行う。②月に一度

土日に自由宿題として全校一斉に出す。③その他 自由学習でも選択できるようにすぐできる環境を 準備しておく。以上3点を学校共通で行い、月の 使用頻度や土日宿題の実施率はデータとして毎回 担任に配付し、指導に役立てる。

(3) 観点1 知識·理解への方策(5)

- : 働き方改革を意識した学級担任に負担をかけない工夫
- ・ 今回検証する ICT 教材を活用した学力向上策は 家庭学習も大きな役割を担う。学校では教科書を 使って授業を進めていくが、新しい学習内容には、 まず既習事項の確認が必要である。通常の授業で あれば教科書の扱いもそうだが、復習の場面から 入る。この復習がわかっていないとすでにここで つまづいて新しい単元の内容には入っていけない のである。特に本校は基礎・基本の弱い児童が多 いため、この時間をどのように短い時間で確認で きるかが1つの問題でもある。この既習事項の定 着を図るための ICT 教材の活用であり、家庭学習 が充実することで既習事項の定着を図ることがで きれば、新しい学習内容で、既習事項の確認に時 間をかけるところの部分を短縮することができる。 つまり、担任の負担を増やしてプリントを作って 既習事項の定着を目指すのではなく、ICT 教材の 活用がその役割を担うことになるのである。

さらにテスト分析や各種学習教室など時間を要する作業についても担任に負担はかけずに7学年が中心で行っている。学習教室であれば声掛け程度、テスト分析については結果を児童に指導することは担任の役割となる。

(4) 観点1と2 知識・理解及び思考力・判断力・表現力への方策⑥

: 県や市のサポートの活用

・ 本校が恵まれているところの1つに算数スタッフ等の県や市のサポート教員の存在がある。スタッフやまなび助っ人(松戸市)、県の学習サポーターは授業や学習会で児童にサポートもできる。また、県のSSSは児童の指導には入れないが、教材作成や丸付けなど担任の仕事の軽減には大きな存在である。これらの人材が多数いることで、授業中に低位の子どもたちにも個別に支援を入れやすくなり、教師の負担軽減と児童の基礎・基本の定着につながっている。

(5) 観点2 思考力・判断力・表現力への方策⑦

: 教員の授業力の向上

・ 本校は算数を校内研究の教科に取りあげて 10 年になる。ただ、職員は毎年少しずつ変わるのでその引き継ぎが問題となる。毎年年に3回の授業研会を行い、講師の先生に指導をいただいているがその都度先行研究として過去の指導案等を見直している。それ以外にも最近は配信研究会が盛んで昨年度本校は3つの他校の配信研修に参加した。配信であれば全員が参加できる。さらに対面研究会も行われるようになり、夏の算数講座も合わせれば、昨年度は6回の対外研究会に参加をした。様々な授業を見たり、分科会に参加したりすることで教師が教材分析力や授業力を高め、子どもが自ら考える授業が展開できるようになる。

(6) 観点3 学びに向かう力への方策8900

:家庭学習との連携・学習カード・HP活用

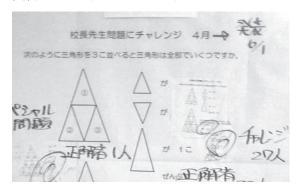
・ 家庭学習でICT教材の効果的な活用を図るためには、手立てが必要である。まずはその教材の使用方法に慣れ、児童が自分一人でできるようになること。そして、自分から進んで取り組めるような工夫をすること、もう一つは保護者の協力を得ることである。これらのためには学校での日々の取り組み、学習カードの工夫、保護者へのホームページでの啓蒙を図った。

(7) 観点3 学びに向かう力への方策①203

: 学習意欲の向上

・ 意欲の向上については3つ考えた。本校は算数を研究しているので算数に興味を持てるように、全校朝会を使って2か月に一度どの学年の児童も考えられるような算数問題を提示した。また、算数の考え方を使ってできるゲームを伝え、学期に一度ゲーム大会を行った。3つ目はeライブラリをがんばった児童に賞状を渡し、達成感を与えた。

資料1 全校朝会校長問題掲示コーナー



資料2 ゲーム大会用算数玩具4種(ハノイの塔、 九九サイコロ、ジャマイカ、NIM ゲーム)



(8) 観点1と3 知識・理解及び学びに向かう力への 方策(3/15)

: 放課後算数教室、夏季 e ライブラリ学習会

放課後算数教室は平日の学習終了後に行う。各 学年とも週に一度30分である。担当は方策③の職 員が中心である。担任は自分の学年が実施してい るときに励ましに行く程度である。1学期は本校 159 名中38 名が参加した。夏季 e ライブラリ学習 会は夏季休暇に入って担任が個人面談をしている 時間帯に先ほどの職員や管理職、7 学年が担当と なる。1~3年、4~6年と分けて、1回50分であ る。内容はeライブラリなので基本的には児童の ペースで進んでいるので、こちらは大きな指導の 必要はない。ただ、悩んでいたり、集中力が切れ てしまった子への指導が中心となる。e ライブラ リは夏季休暇中の全校の宿題にもなっていて、学 習カードもあるので児童も励みになり、意欲的で ある。こちらは4日間で延べ140名の参加があっ た。

資料3 夏季eライブラリ学習会



3 研究の実際

i 研究仮説に対する基本的な理論研修

(1) 千葉県の学力向上プランから

令和2年度から第3期千葉県教育振興基本計画 「次世代へ光り輝く『教育立県ちば』プラン」の 実現を目指し、令和元年までのちばっ子「学力向 上」総合プラン(ファイブアクション)に変わり、 ちばっ子学力向上総合プラン(学びの未来づくり ダブル・アクション+ONE)の実施となった。ここ では Action2:子供と社会の変化を捉え自律的に学 ぶ姿勢を持ち授業を工夫する教員の中で学力学習 状況調査分析・活用事業があり、全国学力・学習 状況調査の結果分析の促進が述べられている。ま た、令和4年度からの千葉県学力向上通信 「COMPASS」にその活用方法が丁寧に記されて いる。特に全国学テの問題は思考力・表現力・判 断力に特化した問題構成になっている。昨年度は 県下の先生方の授業改善が進んだこともあって、 全国平均を上回る結果になったということだが、 この研究では、その観点については検証が難しく、 その内容に沿って校内研究や学習指導は行うが、 対象は全学年で行われる学力テストにおいて分 析・検証することで学力向上を目指す。観点で考 えると知識・理解が中心となる。

(2) 小学校学習指導要領から

総則第3教育課程の実施と学習評価1主体的・ 対話的で深い学びの実現に向けた授業改善(6) では、

児童が自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなど、児童の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習が促されるように工夫すること。

とある。このことは自主的・自発的な活動ができるように手立てを工夫することと、児童が学習課題を選択できるようにすることが必要である。

これについてはテストの分析結果を児童に知らせることで、児童に自分にとって必要な学習単元を考えさせ、自ら選択してできるようにする。そのためにはそれぞれのテストを見直し、自分の不十分な個所を確認、そして、それに関する問題に取り組むことでできるようになると考える。ここの部分でICT 教材を効果的に利用する。

(3) ICT 教材の活用

・ ICT 教材は「ラインズe ライブラリアドバンス」 を使用した。児童生徒の「学力の定着と向上」と 「主体的な学び」を、多くのコンテンツでサポートしている。一番の利点は無料であることだ。松戸市はこれを家庭への連絡メールとともに導入し、この学習コンテンツも大きく推奨している。ネット環境があれば、どこでも簡単に学習ができるのである。また、個人の学習ログが蓄積され、学校で集計を出すことと、自らも自分の学習の軌跡を知ることができる。基礎・基本の定着と主体的な学び、個別最適な学びを考える上で大きな手助けとなる教材である。

ii 学期ごとのまとめテストの分析とその活用

・ 学期ごとのまとめテストはいわゆる業者の単元 テストを使用した。まずは1学期であれば7月上旬 ごろに行うのだが、担任は自分の計画通りにテスト を行い、普通に採点し、児童に返却するのだが、そ の返却前にコピーを取り、7学年に提出をする。あ とは少しでも7学年で早めに誤答分析等をし、結果 を担任に届ける。担任はその結果をもとにクラスで 不十分な点や誤答について再指導する。そして、休 みに入るが、学習カードがあるので、自分の不十分 な個所が学習できるように指導をする。休みが明け た9月上旬に再度同じ問題に挑戦させる。これも採 点・分析を7学年が行い、結果を担任に渡し、再指 導をしてもらう。担任はなぜこの誤答が多いのか、 なぜできていた問題ができなくなるのかなどを知 り、自分の教材研究の一助とする。

資料4 まとめテスト集計の一部

```
2学期学期末まとめテスト 集計 3年
                                  1月
   12月
         1月
                 全体正答率
                         12月
                                       注意度
      8 → 2
11(1)
                      70.4
                                  96.6
         → 9
                                  69.0 △
                       66.7
      0 \rightarrow
21
                     100
                                  96.6
        \rightarrow
                       88.9
                                  96.6
 2
3(1)
      0 \rightarrow 2
                     100
                                  96.6
                       96.3 →
 (2)
        → 4
                                 86.2
                       96.3 →100
 (3)
        → 0
47
      0 -> 0
                     100
                              \rightarrow 1 0 0
                       85.2 → 96.6
      4
                           6
                       92.
                                 96.
```

資料5 まとめテストコメントと誤答

- * 既習内容がよく定着しています。 $12月と比べてほぼ同じ数値です。大きく改善したのは国① (8人<math>\rightarrow$ 2人) ですが②は変化なし。逆は回④ $(1人\rightarrow$ 8人) で、0の処理を忘れた (3人)たした (2人) です。500 では現状維持ですが、正解してほしい問題です。計算練習を。
- ※ 文章題では立式より答えに間違いが多いのは計算ミスが原因です。
- ※ 間違いの多い問題 団① 2400000 (4人) 24

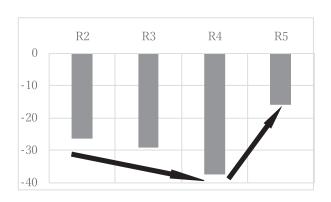
1① 2400000 (4 人) 24000000 (2 人)

② 6. 0 (3人) ④ 5. 0 (3人) 11. 8 (2人)

文章題②式 290 + 4 (3 人)

iii 仮説の検証をする。

資料6 算数学力テスト学校合計と全国との比較



仮説の検証はまず本校で毎年5月に行っている学 カテストの過去4年間の結果を見る。

資料6を見ると、ここ2年全国と比べてマイナスが大きくなっていたが、今年度は平均で20点以上プラスになったことがわかる。ただ、毎年の合計となると4学年は同じメンバーだが、2年と6年の2学年は毎年変わっているため正確な数値ではない。

そこで共通している4つの学年のみで年度ごと に比べた数値を以下に示す。(**資料7**)

- ・ 令和 2 年度 2~5 年生→令和 3 年度 3~6 年生 全国比の計 −20 → −22.5 で − 2.5P
- · 令和 3 年度 2~5 年生→令和 4 年度 3~6 年生
- 同上 $-26.3 \rightarrow -36.8$ で -10.5P・令和4年度2~5年生→令和5年度3~6年生
- 同上 -19.5 → -14.6 で + 4.9P

ここでも下線の数値が示すように過去2年間マイナスの結果であったものが今年度はプラスに転じたのである。

これは学校全体ではないが、共通児童による得点であり、その児童の年度の変化がわかる。ここからも昨年度から今年度にかけての学力の向上が見られたことがわかる。

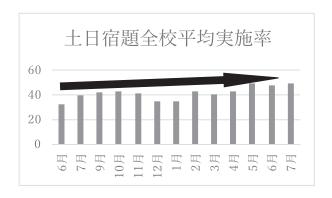
さらに全国比を学年別に見ると(資料8)

学年	昨年度	今年度 比
2 年生	データなし→	-1.3 なし
3年生	$+0.6 \rightarrow$	-2 -2.6
4 年生	$-4.7 \rightarrow$	-4.6 +0.1
5 年生	$-12.0 \rightarrow$	-7.2 +4.8
6年生	$-3.4 \rightarrow$	-0.8 +2.6

- ※ 比とは昨年度の全国平均点との比較
- ※ 1年生は学力テスト5月実施のため未実施
- ※ 2年生は1年時末実施のため昨年度のデータなし ここからはほとんどの学年の数値が向上している が、現3年生は低下していることがわかる。

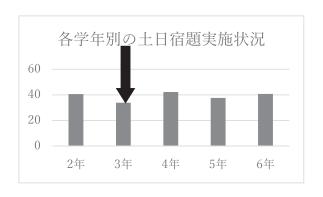
ここでもう一つのデータを取り上げる。それは今回の学力向上の取り組みに欠かせないICT 教材を使用した学習に関するデータである。

資料9



まずは昨年の6月からデータを取った土日の家庭 学習の実施率である。約1年間を通して6割を越し たことがないのは残念だが、それが本校の実態なの で仕方のないことである。しかし、全体的に見ると、 右上がりの緩やかなカーブを描いていないだろうか。 前述したとおり、強制の宿題ではなく、「できればや ってこよう。」という宿題から始まっているので、児 童の中には「ぜったいではないからやらなくてもい いんだ。」と親に話す児童もいる。これを子どもたち の意欲と考えるとわずかながら上昇と見て取れる。

次のデータは約1年間のデータを学年別にまとめたものである。(資料 10)



このデータからは2,4,6年生が40%を超え、 特に3年生の数値が低くなっていることがわかる。 これは先ほど示した資料8で3年生のみプラスに転 じなかった理由の1つと考える。児童が積極的に ICT 教材に取り組むことで、基礎・基本の定着が進むと考えるならば、このデータを見る限り、実施状況が一番良くなかった3年生の学力の向上があまり見られなかった説明にもなる。ただ、このデータは土日の宿題の実施率限定である。

4 成果と課題

今回の実践は 15 の方策を取ることで3観点に働きかけ、トータルで学力向上を狙っている。ただ検証においては、一般的な判断基準が必要なため2年間の2回の学力テストをもとに行っている。これは知識・理解の領域を中心とした学力向上の検証となっている。そして、その結果の分析にICT 教材の活用実績を加え、それを意欲の1つとして考察している。

結論としては、毎学期のまとめテストの学力 分析に応じた指導をした上で、意欲をもって ICT 教材に取り組めば児童の学力は向上する。

気をつけなければならないのは、ただ平然と ICT 教材に取り組ませていればよいわけではない。しっかりと学習分析をし、それに応じた教師側の指導が必須である。また、教師個人の授業力や興味・関心を持たせるためのいろいろな仕掛けも必要となってくる。その15の方策全ての効果までは検証できていない。その点は今後考えていく必要があり、課題である。例えば校長問題やゲーム大会に積極的に参加している子ども、放課後学習教室や夏季 e ライブラリ学習会に参加している子ども、県や市のサポートが多く入っている学年とそうでない学年。また、意欲についても、楽しい授業から生まれたり、ゲームなどが入口だったり、賞状など褒美がきっかけだったりと、きりがないのである。

今回は約1年間かけて集めた子どもたちの ICT 教材 に関わる資料と毎学期ごとのテストの分析とその事後 テストの集計と分析、そして、2年分の学力テストの 結果から検証を行った。

最後になるが、学級担任に負担のかかる取り組みでは、学力が向上しても今の時流(働き方改革)には合わない。担任の授業力向上はもちろん必須条件だが、それは日々の授業や研修で磨くとして、担任に負担をかけなくても基礎・基本の定着が進むような手立てを全職員で考え、全職員で実行しなければならない。今回の15の方策はそれに向けての提案である。

知的障害のある生徒への教科学習の充実に向けた外部人材活用の取り組み

~理科教育(気象分野)における教師の専門性向上と主体的・対話的で深い学びのある授業づくり~

千葉県立東葛の森特別支援学校 主幹教諭 井 上 みどり

I はじめに

本校は、令和4年4月に千葉県第2次県立特別支援 学校整備計画に基づき、千葉県立柏特別支援学校高等 部を分離・移転し、高等部単独の特別支援学校(知的 障害)として、在籍生徒数72名(令和5年度84名)で開 校した。学校教育目標は、「自立と社会参加のために、 生徒一人一人が持てる力を最大限に発揮し、自らの夢 や希望を実現しようとする生徒の育成」とし、学校教 育最後の高等部3年間の学びが、「生きる力」につな がるように教職員一丸となって、家庭・地域等と連携 を図りながら学校づくりを進めている。

開校の年は、特別支援学校高等部学習指導要領の全面実施の年度であり、本校の実践や授業づくりの取り組みは、これからの新しい知的障害高等部教育の方向性や充実に向けたスタートでもあった。教育課程は、学習指導要領改訂のポイントである、〇社会に開かれた教育課程の実現、育成を目指す資質・能力、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立、〇障害のある子供たちの学びの場の柔軟な選択を踏まえ、小・中・高等学校の教育課程との連続性、〇障害の重度・重複化、多様化への対応と卒業後の自立と社会参加に向けた充実、をより意識した編成に努めた。

Ⅱ 研究の背景

今回の学習指導要領の改訂では、知的障害の教科指導の改善・充実が求められている。「学びの連続性」の確保と同時に、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う、特別支援学校の各教科において育成を目指す資質・能力は、小学校等と基本的に同様であるとし、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で示された。各教科でどのような力を育むのかを明確にして、各教科に示された目標・内容等と関連付けて、生徒がどのような段階にあるのかを見定め、より的確な指導目標や指導内容の設定をすることが必要である。

知的障害教育の教科の中でも、理科については、各

教科等を合わせた指導の中で取り扱うことが多く、教 科別の指導として、理科が位置づけられることは非常 に少なかった。その理由は、①生徒の心身の発達に応 じ、授業時数との関連で他の重視する教科・領域に授 業時数を振っていた。②知的障害の障害特性(学習に よって得た知識や技能が断片的になりやすく、 実際 の生活の場で応用されにくいこと) を理由に、各教科 等を合わせた指導の教育効果が高いと考えていた。③ 理科の教員免許を有する教師が少なく、生徒の実態に 応じた授業展開をすることが難しかった。 ④理科室・ 実験道具・教材教具等がないなどがあげられる。ま た、各教科等を合わせた指導で理科の授業展開をする 課題として、教科としての目標・内容を関連付けた指 導及び目標設定、学習評価の在り方が曖昧になりがち であることがあげられる。それは、生徒にとって1時 間の学習のめあてがわかりにくい場面が生じ、学習が 深まらない側面があったと言える。

Ⅲ 研究の概要

1 主題設定の理由

このような背景の中、知的障害教育の「教科学習」 においても、これからの予測困難な社会が到来しても、 生徒が生きぬくことができる「資質・能力」を身に付 けるために、主体的・対話的で深い学びのある授業を 展開できる指導力が、私たち教師に求められている。

生徒一人一人の「やったらできた、わかった、もっとしたい、知りたい」などの多くの笑顔のために、社会に開かれた教育課程の実現に近づけられるよう、より専門的知識を持った外部人材を活用しながら、主体的・対話的で深い学び理科の授業づくりと改善を行い本校の教育活動の質の向上を図るために本主題を設定した。

2 目的

理科(気象分野)の外部人材(気象予報士)を活用し、 教師の理科指導の専門性の向上を図りながら、生活に 結び付いた具体的な学習活動を中心に据え、生徒が自 分の意見や考えを持ち、表現し、生活の質が高まるよ うな理科の授業づくりを進める。

IV 令和4年度の実践

1 羅針盤なしに理科の授業を組み立てる

(1) 実践事例のない手探りのスタート

知的障害の教科指導においては、各教科の目標の系統性や内容の関連等を踏まえながら、児童生徒の実態に即した指導内容を選択・組織し、具体的な指導内容を設定することが求められる。しかしながら、特別支援学校の文部科学省検定済教科書や著作教科書がなく、指導内容の選択、指導計画の作成の情報がとても少なく、手探りの状態からのスタートとなった。

学習指導要領に示される各教科の内容や事項の順序は、指導の順序を示すものではなく、その取扱いに適切な工夫を加えることが必要であった。学習指導要領では、小学校第3・4学年理科と知的理科中学部1、2段階の目標や内容のつながりが明記されていたので、小学校理科教科書の活用を考え、計画を立てようとしたが、小学校理科と本校の理科は授業時数、目標や内容に差異があり、全国の特別支援学校の先行事例も少なく、指導内容の設定に試行錯誤が続いた。理科指導の経験がない教師が、各単元の指導内容や教材イメージを持たないまま、おおまかな指導計画を作成し、生徒が日常生活での知識や経験を活かしやすい生命5・地球自然(気象)3・エネルギー2時間の年間10時間の理科の授業を実施することにした。

(2) 理科の苦手意識による困難や指導への不安

その環境下でも、まずは、授業実践を重ねてみることが大切だと考え授業準備を進めた。しかし、教科としての授業の前例と積み重ねがないことから、教師の理科指導の困難や不安は以下のようなものがあった。

○理科指導の知識に対する不安と自信のなさ

- ・限られた時間で、指導内容の精選に悩む
- 教材の工夫など、アイディアを出していくこと
- ・専門性による裏付けがない(理科免許を持っている教師の不在)
- ・資料選定の正否
- ○個々の生徒の実態に合った指導を行うことの困難
- ・実態差が大きく障害の多様化の中、一斉指導にお ける指導内容と指導形態
- ・実態差の大きい集団学習における個々の目標設定 や教材・教具の準備が大変
- ○評価のむずかしさ

- ・観点別評価のあり方
- ・評価規準・評価基準の設定の仕方が難しい ○理科教育の環境がないので、実験や観察が難しい
- ・理科室も実験道具もない
- ・個に応じた教材・教具の作成とその時間の確保

(3) 理科の授業で大切にしたいことを整理する

授業構成を試行錯誤の中、「理科の観察や実験って 楽しい!」という自分自身が子どもの時に感じていた ワクワクする気持ちが思い出された。生活の中の不思 議について「なんでだろう?」「どうしてだろう?」 と思うことが増えて、自分なりに考えて予想して、自 然を愛する心情を養い、興味関心を深めていけるのが 「理科」の時間である。いろいろな観察や実験・経験 をたくさん用意し、宇宙・天文・気象・物理・化学・ 生物・地学等の様々な分野で、生徒たちが「わあ!」 「おー!」「へえ!」「すご~い」「なるほど~」「そうな んだあ」とたくさん思ったり、感じたりできる授業を 準備したいと考えた。

2 外部人材を積極的に活用した授業づくりの挑戦

(1) 教材研究開始から気象予報士との出会いまで

令和4年の6月、後期に実施予定の理科B地球・自然「天気の変化」(気象分野3時間)の内容が、楽しく・わかりやすく、主体的・対話的で深い学びのある授業展開が出来るように教材研究を進めていた。

気象分野は小学校学習指導要領の4年生では、「太陽と気温」5年生では、「天気と雲」「天気の変化」「台風と防災」等を扱っている。3時間の指導内容と活動の計画立案のため、インターネットで映像資料や実験を検索したが、近年、動画サイトには、膨大な理科の実験動画や資料も掲載されており、資料の正確性や教材としての正否の判断がとても難しいと感じた。理科の動画教材では、NHK for school は動画や資料が豊富で、また、NHK「防災・復興あすをまもるナビ」は身近な具体的な気象災害を扱い、とてもわかりやすく伝えていた。

この番組の中で、一般社団法人日本気象予報士会の 有志活動団体サニーエンジェルス(以下「サニエン」 という)が、親子参加型のコンテンツを用意し、わか りやすく気象や防災のことを伝えている活動を知り、 本校生徒も、ここで実施している実験やクイズ等を教 材として活用できれば、楽しく・わかりやすく、主体 的・対話的で深い学びのある授業展開が出来るのでは ないかと考えて「出前授業の実施」を依頼した。 このサニエンに所属する気象予報士の一人から、「団体としての支援は難しいが、特別支援学校の気象分野の授業に興味を持っている。障害の有無に関わらず、自らの命を守るための気象・防災教育は必要と考えているので、個人として支援をしてもよい」という回答をいただき、理科の苦手意識と指導の不安を補完するためにも、外部専門家として授業づくりに参加してもらうことを依頼した。

(2) 気象予報士の専門的知識を活用した授業づくり

① 単元計画作成への支援

授業づくりへの参画と出前授業の依頼にあたり、曖昧であった指導内容をしっかりとした単元計画にする必要が出できた。しかし、理科の授業時間は年間10時間、気象分野には3時間しか充てられないこともあり、授業で扱う内容のすり合わせと精選がとても困難だった。相談の結果、生徒の知的発達とこれまでの学習経験を考慮して、初めは雲や空を見て関心を持つことを目標とし、雲づくり実験を含めた各時間のめあてと学習内容を(表1)のように取り扱うことに決定した。初年度は3学年同一内容での実施とし、最後は気象災害を扱い、防災意識につなげられるように計画した。

(表 1) 令和4年度のめあての概要及び学習内容

日程	めあての概要	学習内容
	○雲が絶えず形を変えて動くことを知る。	○様々な雲の形がある、絶えず動いている
第1回	○雲の量や色が天気と関係があることに	ことを動画等教材を見て知る。
	気が付く。	○天気は雲量と関係することを知る。
あいだ毎日	○雲や天気を観察しようといる意欲を持つ	○クラス毎定点・定時観測 記録シート
	○雲のでき方と種類、特徴を知る。	○ベットボトル雲づくりの実験を行い
第2回	○空や雲に関心を持ち、日常的に観察し	雲の生成過程を知る。
	ようとする。	○雲パズルで雲の種類と特徴を知る。
	○気象災害を知り、自分がどうすれば	○動画教材で気象災害の種類と原因を知る。
第3回	いいか考えることができる。	○対応方法をクイズで学ぶ。
	○日常的に天気や気象情報に興味を持ち	○警報・注意報、防災気象情報の入手法
	日常生活にいかそうとする。	を知る。

② 指導案(授業展開案)作成への支援

気象予報士に、3回の指導案とその授業で使用する 資料スライド・ワークシートの用語確認、知識の整理、 使用する動画等の取捨選択の指導助言を受けた。

指導案は、今後どの教師が主指導を行っても、授業が再現できるよう、さらに、授業を支えるサブティーチャーが評価基準を明確に理解し、授業での役割を意識して、生徒一人一人への具体的支援にあたれるようにした。3観点の評価基準を明記し、できるだけ詳細な資料の出典や専門的な気象に関する知識や指導のポイント等を留意点に記載して作成するようにした。

気象予報士とのやり取りは、メールで行った。どの

授業に対しても、提示した指導案に対し、間違った知識の訂正や気象の理論等のコメントが沢山記載されて返信され、それについて教師が理解した内容を訂正して返信することを繰り返した。多い時には、やり取りは5往復にもなり、何度も修正を行いながら、教師が自信をもって指導するための気象知識をその中で蓄積することができた。

やり取りの例として、第1回授業「天気と雲~天気と雲の関係を知ろう~」を挙げる。この授業では、テレビの気象情報の内容を知る学習活動を行った。指導案の学習活動の欄に、「テレビの天気予報を見る」と表現したのに対して、「予報以外の情報も発信しているため、天気予報ではなく気象情報が正しい」とコメントがあった。また、気象衛星画像で雲が動いている様子を生徒に見せたいと考え、指導上の留意点に、

『天気の移り変わりのある日のあるわかりやすい天気 予報の画像を用意する』と表現した。この表現に対し て、「天気」は場所や時刻により常に変わるため、表 現としてはふさわしくなく、『雲が西から東へ動く様 子がわかりやすい日』の表現にすると良いと助言を受 けた。同じ授業を別の指導者が再現する時に、選定動 画の意図を明確に記載する必要性が理解できた。

③ 授業で使用する資料・スライド作成への支援

授業で提示する資料スライド作りでは、気象現象や 気象災害の資料・動画の選択にもかなりの時間を要し た。インターネット上には資料画像が膨大にあり、例 えば、気象衛星画像だけでも様々な画像があり、同じ ような画像に見えても、意図や視点が違うと資料とし て提示する場面も異なり、生徒が理解するために取り 上げる資料としては適していないことも多くあった。

一通り視聴し選択に苦戦する中、気象予報士として、 学校が選んだ資料画像を専門的な視点で分析し、生徒 のめあてに沿っていて、わかりやすい資料選択がなさ れているかの確認を受けたり、さらに適している別の 資料提示を受けたりすることで、授業資料作りの負担 軽減につながった。

また、授業で生徒に提示するスライドに使う映像、 写真、語句の選択等の確認を受けることで、正しく、 わかりやすい資料提示の準備が可能となった。

授業の導入で、必ず今日の天気を確認して展開する ことにしたので、第1回授業では「晴れ」と「曇り」 を決める基準である天気と雲量の関係を知識として学 んでほしいと考えた。気象予報士から『空全体に対す る雲の面積の割合(雲量)により、雲量が0割から8割の状態を「晴れ」、9割以上の状態を「曇り」という』関係を教わり、生徒にはクイズ形式(図1左)で考えながら学んでほしいことを相談した。

雲量と天気の関係を生徒が視覚的・量的に理解できるイラストにして、アニメーションで雲量を 1 割ずつ増やしながら (図 1 右)、生徒に「晴れ」か「曇り」のカードを選択、挙げて答える活動を実施したいという案に対して、空全体の面積のうち雲が占める割合を定量的に示している点で、概念的に間違っていない、という裏付けをいただき、自信をもって学習活動をすることができた。





(図1) 雲量と天気の関係を考えるスライド

第2回授業スライドの一部には、気象予報士が所属 するサニエンのコンテンツ資料の提供を受けた。これ らは、難しい気象の知識を親子向けに視覚的にわかり やすく解説しており、理科の専門性に乏しい教師にと ってもわかりやすく、教材作りの参考となった。

気象現象を理論的に説明する部分については、本校の生徒にとってわかりやすくするため、学校からの意見を取り入れていただき、改変したものを使用した。 雲が出来るしくみ「凝結過程」を説明する元のスライドでは、水蒸気と水滴を区別せず青い小さい丸で表現していた(図2左)ものを、「水蒸気」「水」「氷」の表現を区別し、スライド全体で統一し、水蒸気が集まって水になる様子をわかるように変更した(図2右)。



(図2) 凝結過程を説明するスライド

第3回授業では、気象災害を説明するスライドの作成にあたっては、「大雨」と「強い風」という現象ごとに災害を整理して説明することでわかりやすくなり、災害の因果関係を明確にすることで災害の対応を考えやすいとの助言を受け、表現を見直した(図3)。



(図3) 気象災害を説明するスライド 左から変更前、変更後

④ワークシートの作成への支援

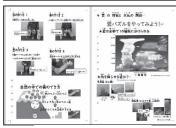
年間指導計画上、気象分野の学びは年間3時間と限られているため、1時間の授業展開で、生徒に伝えられる内容に限界があると当初から危惧されていた。授業は、毎回の授業内容と共に目標を明確にして実施することが大切であると考えていた。授業では、必ず最初に気象予報士と相談して、その時間に「何を学ぶのか」を明確にして授業づくりを進めた。

3回の授業では、いつでも授業を振り返れるように ワークシート(図4)を作成した。ワークシートの表 紙には、毎時間の「今日の勉強」を記載し、生徒が何 を学ぶかを明確にした。指導案に記載された「本時の 目標」を具体的に生徒にわかりやすく提示するととも に、授業をするチーム(理科の指導形態は学年)の教師 一人一人がサブティーチャーとして、3観点の目標を 意識しながら生徒の支援にあたれるようにした。

ワークシートは、授業で使用するスライドそのもの を活用する構成にした。授業を進めながら使用するこ

とも可能ではを視している。 スライドを 大がらり ではを 書く等になる 中で から はいった 大活動が 授 振 正 軍を でいる を 記入 (自 軍不 財 を 記入 (自 軍不 財 を で き で と で を 答 の る る で き なんがけた。





(図4) ワークシート

指導案・教材資料・ワークシート作成の支援を受ける中で、授業を行う際には、日常使用している言葉でも、正確な意味を知らずに使っている気象用語「大雨、集中豪雨・ゲリラ豪雨」等を正確に言い分ける必要があることにも気づかされた。理科の授業準備には、用語の正しい理解と整理が必須だと感じた。

⑤ 授業への専門家としての参加

第2回・第3回の授業に、ゲストティーチャーと して気象予報士に参加してもらう計画をたて、専門的 知識の解説と実験の実演をお願いした。

第2回授業「天気と雲の関係を知ろう~ペットボトルの雲実験~」では、実験そのものの楽しさだけでなく、雲が出来る仕組み「凝結過程」をわかりやすく解説してもらい、生徒たちの知識・理解を深めることが



(図5) 雲づくり学習の様子

できた。生徒たち一人一人 が自分の目の前で雲づくり を行う際にも、ポイントや 失敗しないコツ等をその都 度伝えることができ、個別 で支援する教師も支援しや

すく生徒の成功体験を促すことができた(図5)。

また、この日は『雲パズル』を使用して、おおよそ 雲は10種類に分けられることを学習した。雨を降らせ

る雲が「乱層雲」と「積乱雲」で「乱(らん)」が付くことをサニエン制作の『おそらの雲の歌』を使ってリズムで覚えやすく伝えていただき、生徒の知識の向上につながった。(図6)



(図6) 雲パズル学習の様子

第3回授業 「気を付けよう雨を降らす雲~あぶない!そんな時どうする~」では、『天気の急変のサイン』を説明した後、生徒自身が自分のとる行動を考えて答える活動を用意した。自分からAとBどちらの行動をとるか考え発表した。また、この日は、気象分野まとめの授業であり、気象災害が起きる前に気象情報



(図7) 気象災害の学習の様子

を活用して、避難 行動につなげる指標を、黄色=注意報、 赤色=警報(警戒)、 紫色=危険(危険な場所から避難)と色

で確認するとわかりやすいと解説してもらい、生活で の活用につなげていくことができた(図7)。

V 成果の考察

気象予報士の専門的な知識に裏付けられた助言・支援は、教師の気象に関する知識と指導のポイントの習得につながった。資料・教材作成については、膨大なデータや動画資料の中から、単元目標を達成するための適切な資料選択が可能となった。また、サニエンのプログラムやコンテンツは知的障害高等部生徒の知識・技能の習得の促進につながり学習効果が高まった。それは、教材づくりの参考になり、今後の授業づくりと教材の指標となるものであった。

教師の気象の学びは、教師、生徒双方の気象への関心を高め、日常的な話題にも広がった。自信をもって楽しみながら教師が授業実践をすることは、生徒も関心をもって実験や観察等により主体的に取り組むこと

にもつながった。

VI 課題の考察と令和5年度の取り組み

①体系的な学習の積み重ねを意識した教育課程

前年度は、気象分野の内容を3時間の中に盛り込んだため、1時間当たりの活動内容が多く、生徒がじっくりと考え、深い学びにつなげる時間的余裕がないことが課題となった。また、3年間の理科自然・気象分野の計画的・体系的な学びの組み立てが大切だと考え、気象予報士と相談し、1時間の内容を精選し、小学校3~5年生の気象分野の内容を(表2)のとおり設定し、各学年3~5時間の計画で今年度実施している。

(表2) 令和5年度の気象分野の年間計画

	1 年		2 年		3 年
1	太陽と気温「日光の働き」 1/3	1	雲と天気を知ろう②「空気の力 風」 1/3	1	雲と天気を知ろう③「積乱雲と台風」 1/1
2	太陽と気温「太陽の光を集めよう①」 2/3	2	雲と天気を知ろう②「空気の質量と力」 2/3	2	自然災害を考えよう「気象災害の特徴」 1/4
3	太陽と気温「太陽の光を集めよう②」 3/3	3	雲と天気を知ろう②「天気は変わる」 3/3	3	自然災害を考えよう「危険な場所」 2/4
4	雲と天気を知ろう①「天気・雲量・気温」 1/2			4)	自然災害を考えよう「情報を活用しよう」 3/4
5	雲と天気を知ろう①「雲や雪のでき方」 2/2			(5)	自然災害を考えよう「気象キャスター体験」 4/4

太陽と気温の関係を家庭科の被服の学習に関連付けたり、気象災害の学習から、総合的な探究の時間とリンクさせた防災学習も計画したりしている。

②自信をもって理科指導ができる専門性の向上

外部専門家の助言を受けた授業づくりと改善を進めたが、理科担当の一部の教師にその活用が限定され、指導の不安を抱いたままの教師も多かった。そこで、 夏季休業中に、授業で扱う内容を中心に「実験と実習で楽しく理解 天気のしくみと気象災害」をテーマにした研修を実施した。チームティーチングを有効に機能させられるように、全教師の専門性の向上を図った。

VII まとめにかえて

本研究はまだ道半ばであるが、気象分野に限らず、 理科の学習は日常生活との関わりが深く、観察・実験 を通して探究的に学ぶプロセスは、生きる力に様々な 形で結びついている。さらに、外部人材と計画・準 備・授業まで連携し、外部人材の専門性と特別支援教 育の専門性を掛け合わせ、協働的な授業づくりの推進 していくことは、教育の質の向上につながっていく。

今後も、教員が主体となり外部人材を活用しながら、 より深い学びにつながる、具体的・体験的学習ができ る理科教育の向上に努めたい。さらに、他教科にもこ のカリキュラム・マネジメントの視点を広げ、組織的 かつ計画的に教育活動の質の向上に努めていきたい。

優 秀 賞

教師が主体的に学び合い、達成感を味わえる校内研修の在り方

~ I CTを活用した授業改善に向けた組織的な取組~

香取市立小見川中央小学校 校長 島 石 耕 治

1 はじめに

本校では、学校教育目標の達成に向け、「子供の多様性を認め、一人一人の良さや可能性を引き出すために、みんなで考え、学び続ける教職員」をめざし、日々教育活動に取り組んでいる。

この数年における児童数は約500名、学級数は22学級で、令和5年度には創立150周年を迎える地域の伝統校である。教職員の平均年齢は30歳代後半で若手・中堅層の割合が多い学校であるが、めまぐるしく変わる教育情勢のなか、どの教師も子供と向き合いながら、学級経営や教科指導等を通して、自己の指導力向上のために努力を重ねている。

学力向上やいじめ・不登校等、本校の教育課題は 多く、年々複雑化してきていることをどの教師も認 識している。そして、校内研修等により、自身の指 導力や授業力が向上すれば、結果的に子供の成長・ 変容につながることも自覚している。

国の中央教育審議会における審議のまとめ(2021)では、「新たな教師の学びの姿」として

- ・本来、主体的・自律的に学ぶべきもの
- ・時代の変化を前向きに受けとめ、常に学び続けること
- ・教師―人―人のニーズに応じた学びであるべき もの
- ・学校での協働的な学びが重視されるべきもの などの考えが示されており、教師の成長を促す仕組 みとして、研修の在り方を重要視している。

一方、学校では働き方改革がなかなか進まない現 状があるが、その一因として校内研修を挙げる教師 も多い。また、校内研修の進め方によっては、

- ・やらされているだけで、自分のためになってい ない。
- ・一部の熱意ある教師だけが意欲的で、全員で前 向きに取り組めていない。
- ・ただでさえ忙しいのに、研修をやっている暇なんてない。

などという課題が生じている。

このような状況を踏まえ、学校では教師がより主体的で自律的に取り組める校内研修に改善していくことが求められる。そして、全ての教師が「やってよかった」と思えるような研修を積み重ねていくことが、子供の健やかな成長に向けて互いに学び合う学校文化を醸成していくことにつながると考える。

2 本校がめざす校内研修の姿

本校では、教師自身が「自己の力量を高めるために研修が必要」という意識をもち、一人一人が主体的に取り組める校内研修をめざしている。そして、研修で学んだことを日常の指導に活かし、子供が育つ姿に手応えや喜びを教師自身が感じられるようにしたいと考えている。

そのような校内研修にしていくため、以下の点を 大切にしながら、研修計画を立て実施している。

(1)研修の目的を共有する。【研修の目的】

教師が「何のための校内研修か」「誰のための校 内研修か」という共通認識をもちながら、「子供た ちのよりよい成長のため」に研修を行おうとする 校内の雰囲気をつくる。

(2)必要感のある研修を実施する。【研修の内容】

「やらされている研修」から脱却するため、日常の教育活動に基づく課題や教師のニーズを把握しながら、より具体的で実践的な研修内容を取り入れることで、教師の研修意欲を喚起する。

(3)全ての教師が主体的に参加できる研修を実施する。 【研修の方法】

教職経験年数に関係なく、教師一人一人が、それぞれの持ち味や創造性を発揮しながら、課題解決に向けてアイディアや意見、悩みや失敗等を自由に話せるような、「互いに学び合える研修」「かかわりを深められる研修」にする。

(4)限られた研修時間で、メリハリのある研修を行う。 【働き方改革の視点】

毎週木曜日の放課後を研修の時間に位置付け、内容をしぼり、教師が負担感を抱かないようにする。 教師が「研修で疲れた」でなく「研修をやってよかった」と思えるよう、校内研修にかける時間と内容に十分注意を払う。

3 本校の研修体制(令和3・4年度)

本校は、令和3・4年度に県教育委員会から「ちばっ子の学び変革推進事業」の検証協力校の指定を受け、算数科の実践研究を行った。また、北総地区学力向上交流会では、2年間の研究成果を発表した。一方、同時期には香取市内全校へ一人一台端末が

配付され、教師はICT活用に関心が高まっていた。 そこで、ICT活用を推進するための校内組織と して「デジタル推進委員会」を新たに立ち上げた。 校内の推進リーダーとなる教師を委員のメンバーと し、委員を中心とした研修を年間計画に位置付けた。

また、算数科の研究と並行して、子供の情報活用能力の育成に向けた研究を進めることとした。これは、前年度末に行った次年度の研究に向けた意向調査で、多くの教師から「子供の学力を高めるために、一人一台端末を授業でどのように活用すればよいか学びたい」と回答があったためである。県教委の研究指定に加え、ICT活用の研究を行うことは運用上厳しいことが想定されたが、教師全体の意向があまりにも強く、一人一人が最も「学びたい」と感じている内容を取り上げ組織的な研究を行うことが、教師の主体的な学びや学校のチーム力向上につながると考え、「できる範囲でやってみよう」という気軽なスタンスで研究を進めることとした。

ICT活用の授業研究は2年間であったが、研究を進める過程において、各自がレポートを持ち寄り発表し合う実践報告会や自主公開研究会の実施など様々な取組が、研修主体である教師自身から打ち出されることにつながった。「わからないことをみんなで研究しよう。」「子供の学力を高めるために授業で積極的に活用しよう。」という教師一人一人の意向を大切にしたことは、主体的・自律的に取り組む姿として、校内研修の随所に表れることとなった。

また、校内研修の時間を確保するために、木曜日の日課(6時間授業)を変更し、子供の下校時刻を早めた。保護者の理解を得ながら、年間を通して午後3時20分から研修を実施できる体制を整えた。

更には、「限られた時間内で行える研修内容にする。」「木曜日以外の日に研修を行わない。」「期末などの多忙な時期は研修を行わない。」という校内研修の約束事を実行してきたことも、教師全体が前向きに研修に取り組めた要因となった。

4 研修・研究の実際(令和3・4年度) デジタル推進委員会による校内研修

推進委員会のメンバーはICT活用に関心が高く、 比較的技能にも優れている教師で構成した。若手層・中堅層のメンバーが多いが、子供の発達段階を 踏まえながら、授業づくりに効果的と考えられる機 器の活用法を事前にピックアップし、全ての教師を 集めて、基本的な操作方法や指導方法等を丁寧に伝 えた。そのため、教師一人一人の知識や技能が高ま るとともに、どの学級でも様々な授業でICTを積 極的に活用するようになった。

また、市教委から月1・2回派遣されるICT支援員(業者)にも校内研修に参加してもらい、より詳しい知識や技能を教わったり、国の教育政策を踏まえた今後の展望等について学んだりしている。

本校職員は、若手もベテランも分け隔てなく「みんなで学ぼう」とする職場の雰囲気がある。研修後には授業ですぐ活用したり、研修以外の時間でも「教えて」と気軽に尋ねたりする姿が多く見られるなど、校内研修での教師間の学び合いやかかわり合いが、職場の同僚性を高める機会となった。

<デジタル推進委員会による校内研修の内容>

- ・GIGAスクール構想のねらい(理論)
- ・タブレットの使い方・活用事例(実技)
- ・プログラミングで拡大図や縮図をかく。(実技)
- · 6年理科授業でのICT活用実践(報告)
- ・Microsoft Teams の活用方法(実技)
- ・タブレットの管理、使用時の約束事(協議)
- ・オンライン授業の進め方(実技)
- ・「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの過程での I C T活用事例 (理論・実技)
- ・ICTを活用した情報活用能力の育成(理論)
- ・家庭への端末の持ち帰りについて(協議)など



ICTの効果的な活用に向けた授業研究

- (1)研究の概要(令和3・4年度)
- ①研究主題

教科等横断的な情報活用能力の育成

~問題解決・探究における | C T の効果的な活用~

②主題設定の理由

ア 現代の教育課題から

令和2年度より全面実施となった小学校学習指導要領では、情報活用能力は言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられた。各学校では各教科等の特質に応じて、子供がコンピュータで文字を入力するなどの学習の基盤として必要となる情報手段の基本的な操作を習得するための学習活動を計画的に実施することが明記された。

イ 学校教育目標から

本校の教育目標は、「自分の良さや可能性を実感できる子供の育成」であり、「よく考えてする子供」の育成をめざしている。子供自らが、必要に応じてタブレット端末等のICTを有効に活用し、主体的に学習に取り組む姿をめざしている。

ウ 子供の実態から

本校では、令和3年度に一人一台端末が導入され、主に中学年以上で子供が端末を用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報をわかりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりするなどの活動を行ってきた。これにより、個別学習場面における基本的な操作の習得は進んできたが、発表や話し合い、協働での意見整理など、子供が互いを高め合うためにICTを活用する力はまだ十分ではない。

工 研究目標

子供の教科等横断的な情報活用能力を育成する指導の在り方を、問題解決・探究におけるICTの効果的な活用を重視した授業実践を通し明らかにする。 オ研究仮説

各教科等の問題解決・探究において I C T を効果 的に活用すれば、子供の教科等横断的な情報活用能 力を育成することができるであろう。

力 研究内容

- a 理論研究(情報活用能力の育成、問題解決・探究における情報活用、 I C T の効果的な活用等)
- b 調査研究
- c 実践研究

<令和3年度の実践>

- ・GIGAスクール構想に向けた理論研究(講師招聘)
- ・各教科における育てたい情報活用能力
- ・授業でのICT活用法(他校の実践者来校)
- ・ICTを活用した研究授業(算数:2学級展開) の実施(講師招聘)
- ・研究実践報告会を実施(教師一人一人が1年間の研究実践をレポートにまとめ、ICT機器で発表) <令和4年度の実践>
- ・自主公開研究会の実施(他校等から74名参加)
- ・実践報告会の実施(3年度と同様)
- ・研究のまとめ作成

(2)自主公開研究会の実際

自主公開研究会の概要

- ○期日 令和4年7月7日(木) 午後
- ○参加者 他校等から74名、本校教員33名
- ○授業展開:6学級 45分間

(国語) 5年2組

Microsoft PowerPoint を活用して、収集した情報を整理した。

(社会) 3年3組

消費者の願いを踏まえ、販売者がどのように品物を並べているのかを考え、Microsoft PowerPointの図形を操作しながら、マーケット売り場を作った。

(算数) 4年3組 少人数指導

「広げ深める」過程において、子供が考えた図をタブレットで共有しながら、話し合ったり説明 したりした。

(理科) 6年2組

プレゼンテーション作成アプリケーション (Microsoft Sway) を活用して、実験の結果を整理し、比較検討した。

(生活) 2年2組

タブレットのカメラ機能を活用して、野菜の成 長の様子を記録した。

- (自立活動) 自閉症・情緒障害特別支援学級 行き先を聞き取るために、タブレットでQRコードを読み取り、OneDrive上の動画を再生した。
- ○授業づくりワークショップ 50分間 展開した授業を切り口に、参加型の6つのワークショップごとに、ICTを活用した授業づくりについて意見交換した。

○全体講演会 50分間

- ·講師 山武市立日向小学校長 大木 圭 先生 (前 県教育庁教育振興部学習指導課主幹)
- ・演題 「資質・能力を育成する授業づくりのポイント」

小学校では学習指導要領が全面実施となり3年目を迎え、各学校には一人一台端末を活用した「個別 最適な学び」や「協働的な学び」に向けた授業改善 が求められている。

指導行政のリーダーとしての豊富な実績をもち、 国や県の学力向上策に見識の深い講師を香取地区以 外から招聘し、学習指導要領に基づいた授業づくり のポイントについて御講演いただいた。

自主公開研究会を通した取組

<公開研究会に至るまでの経緯>

当初は公開研究会ではなく、木曜日の校内研修の時間に、香取地区以外から講師や助言者を依頼し、本校職員のみでの授業参観や分科会を計画していたが、「せっかくの機会だから、近隣校にも声をかけてみては」という職員の声があり、自主公開研究会として案内を発送したところ、コロナ禍にも関わらず74名の参加希望があった。想定を大きく超える参加者数であったが、他校でも本校と同様、「一人一台端末が配付されたものの、日頃の授業でどう活用すればよいか。」という学校現場の苦悩が伺えた。

<研究協議等でのICT活用>

本校では、研究授業後の研究協議において、これまでも Microsoft Teams を活用し、参観者一人一人の考えや意見を短時間で吸い上げてきた。そして、公開研究会当日においても、参観者全員にタブレットを配付し、ワークショップが始まるまで(本校職員が下校指導をしている間)に、ICTを活用した授業改善について意見や感想を入力してもらい、ワークショップでの研究協議で活用した。

また、全体講演会でも、全参加者がタブレットを 持ち、講師が Microsoft Teams を活用しながら講演 を行った。研修会の新たな手法として、他校に提案 する機会にもなった。

<参加者が主体的に学べるワークショップの導入> 授業展開後は、6つの分科会に分かれて、参加型 のワークショップ方式の研修を取り入れた。そして、 各分野で先進的な実践を積んでいる学校現場の方 (なるべく香取地区以外から)に助言者を依頼し、 より実践的な内容の研修が進められるようにした。

また、本校の教師(6名)が、各助言者との調整 役を務め、各ワークショップの流れについて事前に 助言者と協議し、助言者の専門性や持ち味を活かし た研修方法を取り入れるようにした。

- 一 ワークショップでの工夫例 一
- ・Microsoft Teams でまとめた参観者の意見等をス クリーンに映し、授業づくりのポイントを自由に 話し合いながら、助言者もアドバイスした。
- ・日常の授業づくりにおける課題や悩みを参加者が 出し合うとともに、助言者が実践例や授業づくり のアイディアを提示した。
- ・参加者がタブレットを持ち、屋外で植物を撮影す るなど、授業で使える I C T の操作法を体験した。

<組織力の高まりと達成感>

自主公開研究会に向け、研究主任がリーダーシップを発揮し、職員が目的を共有しながら、主体的に準備や運営にあたる姿が目立った。授業者だけでなく、様々な教師が研究に関わることで、職員間のつながりが深まり、学校全体の組織力が向上した。

他校等の参加者からも、有意義な研修になった旨の意見を多くいただいた。教職員が力を合わせ、自主的な公開研究会をやり遂げたことは、一人一人の達成感と次への自信になった。

授業展開例:生活科

2年2組 単元名「花ややさいが大きくなるひみつ はっけん|

授業者:2年目教師 児童数:25名

- ○育成する情報活用能力
 - ・情報と情報技術を適切に活用するための知識・技能
 - ・情報技術に関する技能「画像編集・ペイント系ア プリケーションの操作」(ステップ1)
- ○情報活用能力の育成・活用に関する工夫等

野菜の成長の様子を記録する活動で、ペイント機能を活用し、撮影した野菜の写真に変化したことを書き込んだり、印を付けたりすることで、画像を編集する力の育成を目指す。

- ○単元・授業の流れ
- ①野菜の苗を植える。
- ②世話の仕方を本で調べたり、3年生にインタビューしたりする。

③野菜の成長を観察・記録する。(野菜の実や葉など、特に注目したところを大きく撮るよう指導した。)





- ④野菜の成長の過程を振り返る。(継続的な記録画像を見返す。)
- ⑤世話をした過程を伝える。(記録画像を活用し、成 長の様子や世話の仕方をグループで発表し合う。)





- ⑥野菜を収穫する。
- ⑦野菜をどのように食べたのかをまとめ、紹介し合う。

○授業後の成果と課題

- ・絵よりも実物に近い形で記録し、変化を書き込めた ため、野菜の成長の様子を振り返りやすかった。
- ・時系列に沿って記録することができたため、どの子 供も野菜の成長の過程に気付くことができた。
- ・友達の発表を聞かずに、タブレットを触る子供がいた。発表を聞くときの約束を徹底する必要がある。

○参観者のコメント

・世話の様子をタブレットに記録しておくと、自分が してきた世話に気付くことができ、効果的である。

2年間の研究を通した子供の姿

○全国学力・学習状況調査(児童質問紙)の結果から

『5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどの ICT機器を、どの程度使用しましたか。』

一「ほぼ毎日」と回答した6年生の割合一

٠.			
		令和3年度	令和5年度
	本校	10.6%	36.5%(25.9P増)

『学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。』

一「役に立つと思う」と回答した6年生の割合 一 (令和5年度、千葉県・全国との比較)

本校	千葉県	全国
75. 7%	65.9%	67.5%

※県平均より9.8P、全国より8.2P高い。

○6年生を対象とした学校の質問紙調査の結果から 令和4年9月実施:計85名

『ICT (Teams)を使用することで、以前よりも友達と考えを共有していますか。』

- ・当てはまる … 53名 (62.4%)
- ・どちらかといえば当てはまる…27名(31.8%)
- ・どちらかといえば当てはまらない…4名(4.7%)
- ・当てはまらない … 1名 (1. 2%)

研究全体の成果と課題

<成果>

- ・各教科の学習でICT活用を進めてきたことで、全 学年で基本的な端末の操作の習得が進んできた。特 に上学年では、発表や話し合い、協働制作などの学 習場面を中心に活用が広がり、問題解決・探究にI CTが効果的に作用した。
- ・情報活用能力のうち、低学年では画像編集やペイント系アプリケーションの操作等の情報技術に関する技能、中学年では情報収集・整理・分析・発信に関する理解、高学年では必要な情報を収集・整理・分析・表現する力等を中心に育成を図ることができた。
- ・ I C T 実践レポートを作成して活用のねらいと方法 を改善することにより、 I C T の効果的な活用方法 や場面に見通しがもてるようになった。
- ・特別支援教育では、学習のねらいを達成するために ICTが効果的に作用した。

<課題>

- ・操作スキルに個人差が生じるため、情報活用能力を 段階的に高めるような指導法を工夫する必要がある。
- ・ I C T の効果を生かして学習のねらいを達成できる ように、活用方法や場面を広げていく必要がある。

5 おわりに

本研究は、ICTを活用した授業改善が学校に求められ、教職員が協力して校内研修に取り組んだ実践をまとめたものである。研究を進めるなかで、教師一人一人が主体的にかかわり、学び合えたことで達成感を味わえた。そして、子供のために教職員が心を一つにして努力したことが、学校全体の大きな力となった。

校内研修は、人と人とのつながりによって深まるものである。忙しいなかでも、全ての教職員が「やってよかった」と思える校内研修になるよう、みんなで知恵をしぼりながら、これからも取り組んでいきたい。

ICT及び教育データの利活用から始める学校づくり

~教職員の働き方改革とともに進めた「いじめ認知システム」の効果的運用~

山武市立日向小学校 校長 大 木 圭

1 はじめに

「いじめによる子どもの自殺や不登校が繰り返されている。いじめの解釈がゆがめられ、第三者委員会が開かれず、息子が命がけで作った法律が守られない現状が悔しい。」

令和4年10月11日、大津市立中学校2年生の男子生徒が、いじめを苦に自殺してから11年が経ったこの日、男子生徒の父親が記者会見で語った言葉である。ちょうどその当時、50歳代の男性教諭が小学校2年生の男子児童を発達障害と決めつけ、不適切な言動を繰り返したという問題が報じられていたため、「いじめを解決するどころか、自分の行為がいじめだと認識できないレベルの教師が教壇に立っている」と嘆いたこともあわせて報じられた。

平成25年9月に「いじめ防止対策推進法」が施行されて以降、すでに全国のほとんどの学校では、いじめに対する方針を立て、様々な対策が講じられているはずである。実際、たいていの学校が開設するウェブサイト上には、「いじめ防止基本方針」等が掲げられている。にもかかわらず、残念ながら冒頭の父親の言葉に象徴されるような声や報道は、後を絶たない。

一方で、日本の教員の平均労働時間は世界最長であることなど、学校現場の労働環境が過酷であることも報じられることが増えてきた。主な原因として、社会の変化に伴い、教員の業務が増え続けていることや、休職等に対応するための人材の補充もままならない状況に陥っていることが指摘されている。

冒頭のいじめ問題に限らず、子どもを取り巻く教育問題は、山積するばかりである。多くの学校で様々な対策が講じられているが、それと同時に、目を向けるべきは、教職員の業務改善であろう。子どもと接する教職員が疲弊していては、問題を発見すらできない。

本稿は、児童が安心して生活できる学校づくりを、 教職員の業務改善と一体化して進めてきた取組につい て振り返り、省察したことを報告するものである。

2 本校及び実践の概要

(1) 本校の現状

令和3年度4月、創立20年の旧山武西小学校と、明治37年度から約120年の歴史を持つ旧日向小学校が、新・日向小学校として、旧山武南中学校跡地に再配置されて、3年目を迎えた。

山武市の西部に位置し、自然豊かな高台にある本校の敷地面積は小学校としては広く、東京ドーム1.2個分もある。また、8割以上の児童が通学バス(4台)を利用しているほど、学区も広い。

統合の時期と、GIGAスクール構想の時期が重なったこともあり、本校のICT環境は近隣の地域内でも比較的整備が進んでいる学校として知られている。各教室や職員室の前面には、いわゆるチョークを使う黒板ではなく電子黒板が設置してあり、児童に配付されたタブレット端末とも連動したICT機器は、日常的に活用されている。さらに、山武市内の小中学校には、「さくら連絡網」というメール連絡網が配備されており、保護者からの出欠席の連絡等はすべてメールでやり取りできるようになっている。

ただ、統合して2年目の令和4年度に着任した私で さえも、ここに至るまでの苦労は容易に想像できる。

たとえば、引っ越しの荷物の運搬や整理整頓だけでなく、新しい校舎で生活するためのルールづくり一つとっても、両校の児童や保護者、教職員の合意形成を図るのは並大抵のことではなかっただろう。さらに、行事を行うにしても、かつての小規模校の方法等に執着するのではなく、コロナ禍による行動制限等に阻まれるたびに、教職員が知恵を出し合い、乗り越えてきたに違いない。

私が着任した当時、「旧山武西小では…」、「旧日向小では…」といった言葉は、教職員からも、保護者からも事あるごとに耳にした。コロナ禍により実施できなかった行事等も多くあり、軌道に乗ったように見えても定着していない様子がうかがわれた。

(2) 問題の所在と本実践の必要性

①統合初年度末の学校評価結果への違和感

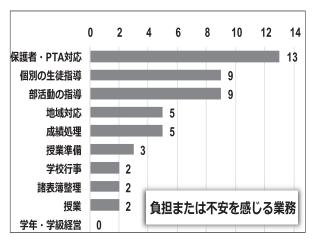
本校に着任する前から、本校のウェブサイト上に掲載されていた学校評価に関する結果やその分析・解釈については、いささかの違和感を抱いていた。

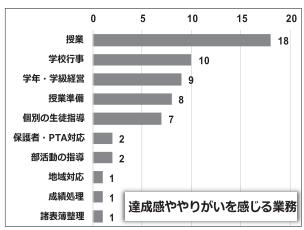
たとえば、学校評価アンケートの設問項目のうち、「いじめをされたり、いじめをしたりしていないと思う」という問いについて肯定的な回答をしたのは、児童の81.5%、保護者の75.3%だったが、教職員はそれらを上回る84.6%が肯定的な回答をしていた。また、「教師は、児童一人一人の個性を大切にして指導している。」(児童には「あなたのことを大切にしておう」)という問いについて肯定的な回答をしたのは、児童の82.5%、保護者の81.7%だったが、これにもはるかに上回る96.2%の教職員が肯定的な回答をしていた。

もちろん、それぞれの母数が異なるため、一概に比較はできない。ただ、こうした設問について、学校として「統合初年度にしては、高い評価だった」とする結果分析には、違和感だけでなく危機感すら覚えた。

②負担感を覚える業務・やりがいを感じる業務

下図は、令和4年度当初に着任早々、教職員を対象 に取ったアンケート結果である。





本アンケートの有効回答数は22であるが、約6割の教職員が「保護者・PTA対応」に負担感や不安を覚えていることが明らかになった。また、「問題行動や不登校等に係る個別の生徒指導」については、どんなに綿密な計画を立てて教育活動に取り組んでいても、想定外の時間と労力が割かれることが多いためか、負担感や不安が多い業務であることが分かった。

同時に、教職員が達成感ややりがいを感じる業務の 多くは、授業をはじめ、児童と直接関わることのでき る業務であり、本来の業務に専念したいという思いも 透けて見える結果となった。

③進む児童数の減少化傾向と外国籍児童の増加

統合初年度の児童数は235名だったが、3年目にして216名と、すでに約8%も減少している。今後もこの傾向はさらに進むことは必至である。統合に伴い特別に教員が増員されている現在は、一学級あたり20~30人程度の児童数で、特別支援学級も含めて13学級を維持できている。しかしながら、近い将来、教員数も減り、学年によっては今以上の児童数の学級を担任する教員も増えてくるといった事態に直面する。

さらに、外国籍児童が急増しており、その対応の負担も重なることで、最もやりがいを感じることのできるはずの授業やその準備に時間をかけることができなくなるおそれがある。同時に、児童一人一人と向き合う時間も確保できなくなり、統合初年度の頃の児童や保護者の満足度にすら達しないことも考えられる。

だからこそ、まだ児童数に対して相応の教職員数がいるうちに、新・日向小学校としての体制を整えていく必要があると考えた。

何よりも児童が、安心して生活し、学ぶことのできる学校をつくるためには、学級担任一人が問題を抱え込むことなく、学年や学校全体でいち早く問題を共有することが当たり前の風土をつくる必要がある。

特に、いじめに係る情報については、日頃から教職 員が感度を高め、小さなうちから共有し、被害児童の 立場や気持ちに寄り添った対応が大切である。当然の ことながら、これを実施しようとすると、教職員の負 担は増えるため、教職員が「当たり前」と思って抱え ている業務を一から見直し、働き方改革も同時に進め る必要がある。

以上の問題意識を踏まえ、本稿では、教職員の働き 方改革と一体的に構築した「いじめ認知システム」の 運用の実際とその効果について述べたい。

3 実践研究の内容

(1) いじめ認知システムの運用にあたって

①いじめ認知システムとは

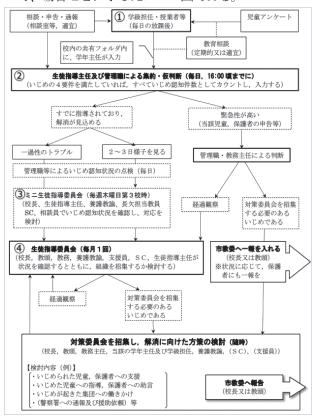
国立教育政策研究所の生徒指導・進路指導センターが発行する生徒指導リーフ『学校の「組織」で行ういじめ「認知」の手順』(Leaf. 19)を参考にして、本校の実情に即した「いじめ認知システム」を構築した。

これは、いじめ防止対策推進法に定めるいじめの定義に基づき、その日あった出来事を担任や専科教員等が「いやな思いをした児童はいなかったか」等を振り返り、原則として毎日入力し、1週間ごとにミニ生徒指導委員会が毎月(または学期ごとに)学校全体で、その情報を共有するものである。

②いじめを認知するための4要件^{i)~iv)}とフロー

- i) 行為をした者(A) も行為の対象となった者(B) も児童であること
- ii) AとBの間に一定の人的関係が存在すること
- iii) Aが Bに対して心理的又は物理的な影響を与える 行為をしたこと
- iv) 当該行為の対象となったBが心身の苦痛を感じて いること

下図は、本校がいじめ認知の入力からその対応について、場合ごとに示したフロー図である。



学級担任や専科教員等は、具体的には、共有サーバ 上のエクセルファイルに示された「日付」「認知者」「被 害児童名」「加害児童名」「いじめの態様」「一言コメント」を入力する。「いじめの態様」については、毎年、文科省や市教委が調査する項目に応じた9種類のいずれか、または複数にチェックを入れる。

③陥りやすい「正常性バイアス」に留意する

入力にあたっては、人間が持つ心のメカニズム、特に「正常性バイアス」を理解しておく必要がある。

私たちの心は、予期せぬ異常や危険に対して、ある程度、鈍感にできている。日常生活において、様々な変化に対して、一つ一つ反応していては疲弊してしまうが故の自己防衛としての心の機能ともいえる。そのため、ある範囲までの異常は、正常の範囲内のものとして処理するようになっている。これを、正常性バイアスと呼び、特に災害時において、身に迫る危険を危険として捉えることを妨げ、危険を回避するタイミングを奪ってしまう原因として指摘されることが多い。

このことについては、「校長室だより(第1号)」に 掲載するとともに、着任して2日目の第1回職員会議 において直接、教職員と共通理解を図った。

〔実際に配信した「校長室だより」の記事〕

★「正常性バイアス」に気をつけよう

→そこにある危機を感じにくい組織になっていないか

正常性バイアスとは、自分にとって都合の悪い情報を無視したり過小評価したりするという認知バイアスの一つです。人間の心は、ある程度鈍感にできていて、正常性バイアスも、予期しない出来事に対して、心が過剰に反応して疲弊しないための必要なはたらきなのですが、災害時などに働くと、避難が遅れて大惨事を招く原因になるとも言われています。

日頃から「子どもたちを大切にして指導している」 と思っていればいるほど、いつの間にか「いじめがあるわけがない」というバイアスにつながりかねないというのが、人の心の自然な働きです。

この正常性バイアスは、誰しもがかかりやすく、また、組織の中では、「周りのみんなも騒いでいないから」といった同調性バイアスなどとも相まって、よほど意識していなければ、いじめなど児童の心身の苦痛を認知しにくくなります。

そのため、<u>いじめ認知の4要件を満たすような事態</u>は、毎日起こるのが当たり前という意識を持ち、「いじめ認知ゼロ」が3日も続くようなら、「自分は、本当に子どもを見ているのか」と自身に問いかけるくらいの構えが必要です。

(2) いじめ認知システムの実際

①加害児童に注意が向く傾向に要注意

当初こそ「毎日、認知したいじめについて入力する」 ことについて戸惑いの色を隠せなかった本校教員も、 すぐにこのシステムに慣れ、およそ同じ時間帯に入力 していることもあり、「今回のようなことも、入力する んだよね」などと声を掛け合う姿が見られた。

続けていくと、これまでの感覚的に捉えて対応して きた加害児童や被害児童の実態について、数値的にも 捉え直すことができるようになってきた。

週一回のミニ生徒指導委員会では、原則として校 長・生徒指導主任・養護教諭・長欠担当教員が、生徒 指導主任等の空き時間を利用して校長室に集まり、必 要に応じて打合せ時等において全体でも共有した。

このミニ生徒指導委員会において、月2回程度勤務 しているスクールカウンセラーから「加害児童への対 応ももちろんだが、被害児童の〇〇さんについては、 その後、大丈夫なのか」といった発言があった。

確かに、被害児童の「先月のいやな思いをしたことについては、もう問題ないのか」といった、声なき声に耳を傾けることこそが大切である。それ以降は、加害児童もさることながら、より一層、被害児童に注目し、意識的に対応策を講じるようになった。

②ベテラン教員のいじめを認知する感度の共有

ある日のいじめ認知入力のコメント欄に、以下のようなものがあった。

係を決める際に、「大事な仕事なので毎日学校に来る子がいい」という話を友達としていた時、「○○さんは、よく休むから」と、○○さんの近くの子に話していた。 悪気は全くない。○○さんの表情は読み取れなかった。

たいていのいじめ認知の入力情報は、本人の訴えに よるものであったり、明らかなけんかであったりして、 誰の目にも見て取れる、いわば典型的な「いじめ」と して認知し、入力されていた。

今回の事案については、本人が訴えてきたものでもなく、また、マスクのために余計に表情を読むのが困難な状況でもある中、ベテラン教員が、前年度、長欠傾向にあった○○さんの状況も踏まえ、「念のため」と入力したものである。

この事案を、いじめとして認知すべきか否かはともかく、こうした児童へのまなざしや見取りが、データ上で、若手教員も含めた全教職員で共有できるというよさも、たびたび垣間見られた。

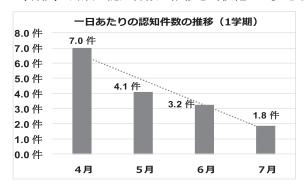
③「入力されない」という情報は、アラート情報

行事が立て込んでくると、数日間または1週間入力されない学級も見られた。実際に、認知するようないじめが起きていないこともあるが、声をかけると「あ、入力を忘れていました、すみません。」という返事が返ってくることもある。「覚えている限りでいいから」と入力を促すが、こうしたやり取りが生まれることも「いじめ認知システム」の効果の一つと捉えている。

これは、「あるクラスの入力が途絶えている」という 情報が入ってきているとも捉えることができるからで ある。すなわち、それほど当該教諭が業務を抱えてい るという表れであるし、また同時に、もしかするとそ れが故に、当該学級の「小さないじめ」が見過ごされ ているかもしれないというアラートが発せられている と認識すべきことである。

こうした場合、相談員や支援員を当該学級に配置したり、管理職自身が休み時間等に教室に入っていって 積極的に声をかけたりする等の対応を講じた。

また、2学期の初めには、下図のようなグラフで、 1学期間の月別の認知件数の推移を可視化した。さら



に、いじめ認知件数が減っていることについて、「実際に、いやな思いをしている児童が減っているということか、それとも見過ごしてしまっているのか」について振り返り、2学期最初の運動会練習等において、いやな思いをしている児童を見過ごすことのないようお互いに声を掛け合う機会を得ることもできた。

このほか、こうした入力作業を重ねるうちに、「いじめではないが、気になる児童がいることについても共有できるとよい」という声が上がり、いじめ認知の入力ファイルのそばに、「気になる児童リスト」ファイルを常置し、気になることがあるたびに管理職に報告するとともに、共有サーバに入力するという副産物もあった。これは、担任が授業をしている最中に、児童相談所等から児童に関する照会があった場合、管理職がワンストップで対応できる貴重なデータとなった。

④「いじめ認知データ」を利活用して未然防止へ

令和4年度1年間のいじめ認知件数は、のべ400件を超えた。これは、統合初年度の3倍の認知件数にあたる。このデータは、令和5年度に引き継がれ、学年別に昨年度の被害児童がいじめ認知件数順に示されることとなった。すなわち、「今日は、どうだった?」と積極的に一声をかけるべき児童として引き継がれている。週1回のミニ生徒指導委員会でも、「昨年度、あれほど被害児童として挙がっていた〇〇さんは、今年は名前を聞かないね」といった話題ができるのも、こうしたデータの蓄積を利活用しているからこそだろう。

(3) 働き方改革の推進→本当に必要な業務に集中

「いじめ認知システム」を機能させるには、教員等による一日の振り返りや入力作業等の時間が必要となる。また、教員にとってのやりがいを感じる業務の時間を確保するために、従前の不要な打合せや会議を簡素化・廃止したり、児童や保護者、教職員へのアンケートについてはすべてメール連絡網を活用したりして、学校としての働き方改革を進めていった。

さらに、令和5年度に向けては、教職員の声を反映 して下表のような方針を固めた。PTAや児童への説 明を要するものについては、粘り強く時間をかけ、計 画的に改善や廃止等の準備を進めてきた。

新規	改善	
・外国人児童のオンライ	・学校徴収金を振込方式へ	
ン日本語教室の開設	・PTA学級役員制度をサ	
・児童の資質能力向上の	ポーター制度へ	
ためのカリキュラム・	・ 教員研修の充実	
マネジメント	・学級経営案を目標申告へ	
・ 5 時間授業を週2日	・ICT 機器の利活用を図っ	
・自治的な児童会活動	た家庭学習へ	
継続・充実	廃止・縮小	
いじめ認知システム	・金管部の廃止	
・不登校児童への多様な	・運動部の活動時間の適正化	
学びの場の創出	・学年だよりの廃止	
・読書活動の啓発 (読書	・紙媒体のアンケート廃止	
通帳、読書の木)	・宿泊学習時の見送り禁止	
・会議、打合せの精選	・不要不急の会議の縮小	
・メール連絡網の積極的活用	•通学バスの登下校指導の	
・デジタル職員室	廃止	

その甲斐あって、令和5年度の年度当初の職員会議は、昨年度の4分の1程度の時間に縮小するとともに、各学年を担当する教員が集まって、教科等横断的な視

点でカリキュラム・マネジメントについて話し合うという、重要かつ有意義な時間を設けることができた。

また、令和5年度当初に開催されたPTA総会では、 校長自らが本校の「いじめ認知システム」をはじめと する学校経営方針等について話すことができ、保護者 からも、「取組の細やかさに驚きました」「1人1人を 見てくれているのが伝わる」と喜びの声も頂戴するに 至った。実際、学校評価アンケートにおいても、児童 の満足度は、82.5%から 98.0%へと大幅に向上した。

5 おわりに

エンパシーという言葉が一時、話題になった。共感などとも訳されるが、略称「ぼくイエ」で有名なブレイディみかこ氏によれば、「別にかわいそうだとも思わない相手や、必ずしも同じ意見や考えを持っていない相手に対して、その人の立場だったらどうだろうと想像してみる知的作業」と定義される。

たとえば、何度も注意したのに、Aさんはまた友達の頭を殴った。その事実に教師として、親として、まず一言、何という言葉をかけるか。「あんなに言ったのに、なんで殴ったの!」という言葉をぶつけるようなら、エンパシーを働かせていたとは言えないだろう。

そうではなく、「Aさんにとって、我慢ならないような何かがあったのではないか」と想像し、まず一言「何があったの?」と優しく尋ねれば、Aさんは「〇〇君が、悪口を言ってきたんだ…」という自分の言い分を落ち着いて言えたであろうし、「そう、それは悔しかったね。でも、殴るという方法は正しかった?」と論すことで、Aさんは、反省するとともに自分自身が大切に扱われていることも実感できるかもしれない。様々な不祥事や不適切な指導等が報じられるたびに、エンパシーを働かせてさえいれば…と思うことが増えた。

本稿で報告した「いじめ認知システム」は、形だけ整えれば機能するわけではない。多忙を極める教職員の業務改善や働き方改革と同時に進めなければ、さらに負担を増やしてしまうだけである。本稿でも紹介したように、ベテラン教員の児童へのまなざしや、エンパシーを働かせる姿を若手教員とともに共有しながら、今後も、さらなる充実を図っていきたい。

【参考文献】

- ○広瀬弘忠『人はなぜ逃げ遅れるのか一災害の心理学』 (集英社新書、2011年)
- ○国立教育政策研究所「生徒指導リーフ Leaf19」

肢体不自由児の体育指導における「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善

~「準ずる教育課程 |の車いすラグビーの授業実践を通して~

千葉県立船橋夏見特別支援学校 教諭 上 野 光 作

1 はじめに

本校は、平成27年4月に開設した肢体不自由教育を行う特別支援学校である。千葉県立船橋特別支援学校から中学部と高等部を分離する形で開校し、今年度で9年目を迎える。教育課程を準ずる課程(A課程)、知的代替の教育課程(B課程)、自立活動主の教育課程(C課程)の3つに分けて学習活動を展開している。教育目標を「一人一人が主体的に学ぶ教育の推進」とし、卒業後の生活や共生社会の実現を見据えた教育活動を行っている。また、本校のある船橋市は、「スポーツ健康都市」としてスポーツが盛んな地域であり、本校も開校以来、体育指導に力を入れている。

本研究は学習指導要領の育成を目指す資質・能力の 三つの柱(図1)に基づいた体育指導を通して、複雑 で将来を予測することが困難となることが予想される 社会を生きるための力を育むため、「主体的・対話的で 深い学び」の視点からの授業改善を行うこととした。

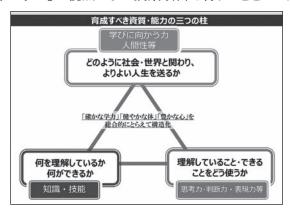


図1 育成を目指す資質・能力の三つの柱

Ⅱ 研究の概要

1 主題設定の理由

A課程の体育では、運動やスポーツの多様な楽しみ方(する・みる・支える・知る)を卒業後も社会で実践できる資質・能力の育成を目指している。その中で、様々な運動やスポーツを経験し、勝つ喜びや負ける悔しさ(競争)、動きや考え、気持ちを仲間と共に創り上げていく(共創)という体育ならではの経験を味わえるようにしている。

しかし、肢体不自由のあるA課程の生徒の実態は、 運動機能の障害に加え、感覚、知覚、認知等の発達に 遅れがあり、活発な身体活動が難しい。また、自発的 な発語が少ない生徒、自分の思いや考えを言葉で伝え ることが難しい生徒もいる。授業において、生徒たち が「主体的に学ぶ」ためには、一人一人が運動やス ポーツとしっかり向き合うことで、「どうしてだろう」と いう問いや、「こうしてみたい」「解決したい」という 課題を解決する意識をもたせることが必要である。そ のために教師は、生徒たちの興味・関心、これまでの 学習の積み上げなど、生徒の実態をしっかりと捉えた 上で、取り扱う運動やスポーツを選定し、指導・支援 を工夫していくことが大切になる。また、生活体験が 不足していることから直接的に表現する言葉が多用さ れ、語彙が乏しく、自分の思いや考えを言葉で伝える ことが難しい生徒もいる。教師や生徒同士が感情・思 考等を読み取り、共感したり代弁したりすることで「対 話的な学び」が成立すると考える。そのため、運動の 行い方やルール、教材等の工夫が求められる。

2 目的

本研究はA課程体育「車いすラグビー」の授業を通 して、主体的・対話的で深い学びを実現させる体育の 授業を開発することを目的とする。

Ⅲ 方法

1 対象

中学部A課程3名、高等部A課程8名(男子6名、女子5名)である。心疾患等の疾病があったり、進行性の障害を抱えていたりし、日常生活において、部分的または全面的に支援を必要としている。また、筋緊張が強い生徒や体の変形が進行している生徒などがおり、様々な場面で健康状態への配慮が必要である。運動面では、独歩での移動が可能な生徒が4名、車いす移動の生徒が7名(電動車いす2名)である。健康状態に応じて、歩行と車いすを併用したり、ウォーカーを使用したりする生徒もいる。また、まひが強く転倒しやすい生徒、進行性の障害による筋力低下がみられ

配慮が必要な生徒等、様々である。コミュニケーション面では、全ての生徒が会話でのやり取りができる。 吃音がある生徒、発声や発音がはっきりとしていない 生徒もいるため、発言を聞く際は、ゆっくり時間をかけたり、生徒との距離感を調整したりしている。

2 授業の形態

中学部と高等部のA課程合同で授業を実施した。毎週木曜日5・6校時(12:55~14:30)が授業時間となっており、活動場所は体育館である。疲労が蓄積しやすい生徒が多いため、適宜休憩時間を設定しながら授業を展開した。

3 実施時期

車いすラグビーの単元は、令和5年4月13日(木) ~令和5年7月13日(木)の合計12回であった。

4 実施者

筆者(特別支援学校での保健体育科指導歴11年)が主指導を行い、他のA課程職員(英語科1名、数学科2名、国語科1名、理科1名、社会科1名)6名が副指導者として授業を展開する。A課程の授業で唯一ティーム・ティーチングを行っている。

IV 授業実践

1 単元について

単元名は「車いすラグビー」。

平成29年告示の中学校学習指導要領の保健体育編 「体育分野」領域「E球技 アゴール型」、平成30 年告示の高等学校指導要領の保健体育編「体育」領域 「E球技 アゴール型」を受けて設定した。

車いすラグビーは四肢に障害をもつ者が行うパラスポーツで、バスケットボール、ラグビー、アイスホッケーなどの要素を採り入れ、カナダで考案された。車いす同士がぶつかり合い、ボディコンタクトがあるのが特徴のパラリンピック正式種目である。本単元で取り扱う車いすラグビーは、国際ルールをもとに、タグラグビーの「タグを取ることで相手の動きを止める」とハンドサッカーの「カウント内で動く」の要素を採り入れた本校独自の攻守混合系陣取りゴール型の球技である。特性としては、相対する2チームがボールを持ってランで移動し、パスをつないで攻めたり、相手に突破されないように守ったりしながらゴールラインまでボールを運ぶこと(トライによる得点)を競い合う運動である。車いすラグビーは、他の球技に比べて、ゲームに必要な個人的技術が易しく、容易にゲームに

参加することができる。そのため、発達段階に幅のある生徒たちにも取り組みやすい運動と考えられる。

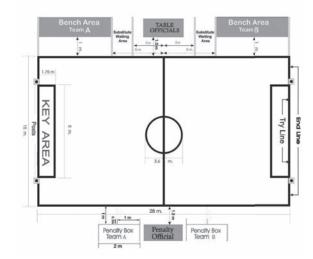


図2 車いすラグビーコート

(JWRF2022車いすラグビー競技規則より引用)



図3 本校体育館に設置したコート

- ・コートのサイズを公式競技規則(図2)より小さめに設定。
- ・疲れやすい生徒が多いこと、トライの場面が多くなること、ゲームに出場している生徒全員がパスを受けられるようにすること等を考慮し、小さめのコートにした。(図3)

2 車いすラグビーのルール

(1) ゲームは5対5で行い、選手交代に人数制限はない。

(2)ボール運び

- ・ラン:選手1人1人に持ち時間があり、その時間内でランでの移動が可能。持ち時間を越えた場合、反則とし、ターンオーバー(攻守逆転)となる。持ち時間は、選手の実態によって異なる(5秒選手、10選手など)。
- ・パス:投げても転がしてもよい。相手がキャッチできなくても車いすや身体の一部がボールに触れればパス成立となる。
- (3) タックルは禁止とし、相手のタグを取ることでターンオーバーとする。

- (4)競技時間は、1 ピリオド6分間で2 ピリオド行う。ピリオド間のインターバルは5分間。第2 ピリオド終了後に勝敗が決まっていない場合は、3 分間の延長ピリオドを行う。コートチェンジは行わない。
- (5)トライは、ボール保持者が乗っている車いす の前後輪4輪のうち2輪(立位の選手は両足) が、相手側のゴールライン上に達するか通過し ている状態で得点となる。
- (6) ファウルまたはバイオレーション(反則)が あった場合は、ターンオーバーとなり、その場 からゲームを再開する。
- (7)ボールがコート外に出た場合は、出た場所からスローインでゲームを再開する。トライ後は、 自陣のゴールラインからゲームを再開する。





図4 タグを着用した選手

- ・車いす選手は、車いすにタグを着用。(図4左)
- ・独歩選手は腰に2本着用。車いす選手が夕グを取りやすいように2本となっている。(図4右)
- ・タグを奪い合うことで、ターンオーバーを目指す。

3 主体的な学びの実現

運動の特性(楽しさ)を理解する

車いすラグビーの特性(楽しさ)は、「仲間と協力してトライを目指す」である。導入時、車いすラグビーの紹介として、パラリンピックの映像や教師のデモンストレーションを見学してルールを理解できるようにした。また、映像の中で、選手達のボール操作やボールを持っていないときの動き、どのような作戦を考えているのかなどに着目して観察するように促すことで、ゲームの進め方に見通しがもてたと考える。

安全面の配慮を行う

楽しく活発に活動するためには、生徒たちが安心し て活動できる環境を整えることが必要不可欠である。 授業を行う前に車いすラグビーへの印象を聞くと、「怖い」「ぶつかる」などといった対人プレーに対する恐怖心をもつ生徒が多かった。このようなことから、タックルのような対人プレーをなくし、身体接触がないことやボールを持って自由に移動できるようにし、参加する生徒全員が楽しめるように配慮した。さらに、最悪を想定して、保護帽やフットガードの着用を義務化した。



図5 フットガード

- ・接触する危険性があるため、フットガード(図 5) を着用し、ケガの防止に努める。
- ・ランの持ち時間を表示し、審判に分かりやすく伝 える。

ルールや用具の工夫

多様な実態の生徒たちが、ともに車いすラグビーに参加でき、その技能を習得するためにルールや用具を工夫した。ルールについては、生徒から出た意見を大切にし、「こういう工夫があれば、もっと動ける」「このルールを変更すれば公平になる」などの意見を参考に、分かりやすく、活動しやすいルールを生徒たちと一緒に作り上げた。また、用具の工夫では、公式球を扱うことが難しく、ソフトバレーボールに変更したことで操作しやすくなった。ボールを保持し続けることが難しい生徒は、専用のかご(図 6)を車いすに着用し、ゲームに参加した。全ての生徒が活躍するにはどのようなアレンジが必要かを常に考え検討した。



図6 ラン移動時のボール入れ

- ・車いすを使用する生徒は、ボールを保持しながら 移動することが難しいため、かごを着用する。
- ・安定したランプレイが可能となる。

自己の技能への自信

運動やスポーツをすることが「得意」と感じている 生徒が少ない。運動に関して、「自分もできた」といっ た成功体験が少なく、自己の技能に自信がもてない現 状が伺える。技能習得のため、「ボール操作(ラン・パ ス)」と「ボールを持たない動き(空間を作り出す動き)」 の基礎的な技能を高めるため、動きのポイントを確認 しながら学習を進めた。作戦ボードや基礎的な動きを 紹介する学習プリントを活用するなどの教材を工夫し た。また、ランとパスという比較的簡単な技能で得点 を得られるという車いすラグビーの良さを生かして、 全ての生徒が得点(トライ)する楽しさや喜びを味わ うことができるようにした。

4 対話的な学びの実現

話し合い活動の充実

課題解決活動やゲームの中で、チーム独自の作戦を 考えたり、ゲーム状況の中で最適な作戦を選択したり する場面を設定するなど、話し合いが必要な場面を意 図的に設定した。作戦やチームの課題について、話し 合いをする中で、仲間の良い動きを見つけ、個人や チームの動きに取り入れていくような授業となった。

また話し合いをする際は、自分の考えを伝えやすい ように「作戦会議の約束」(図7)を提示した。約束に 基づき、単元が進むにつれて、話し合いが活発となっ た。話し合いが停滞したときは、ヒントとなる教材を 提示したり、各チームに所属している教師が話し合い に参加したりして対応した。ゲーム後に振り返りをし やすくするため、作戦会議の内容を記録する学習プリ ント(図8)を準備し、授業のまとめの時間に活用した。

作戦会議の約束

- ①友人の発言をさえぎらない。
- ②話すときは、だらだらとしゃべらない。 ③話すときは、感情的 (怒ったり、泣い
- たり) ならない。 4分からないことがあれば、すぐに質問
- する
- ⑤話を聞くときは、話している人を見る ⑥話を聞くときは、他のことはしない。
- ⑦最後まで話を聞く。
- ⑧どのような意見があっても、否定(間 違っていると決めつけない)しない。
- 9作戦会議が台無しになるようなことは 言わない ⑩作戦会議が終わったら、すぐに次の活
- 動に移る。 ⑪意見に対して、必ず「なぜ? どうし
- て?」と理由を確認する。 12必ず全員が1回以上は発言する。

図 7 作戦会議の約束

・話し合い活動(作戦会議)の際、提示した。

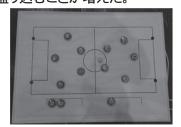


図8 作戦会議記録用紙

考えたことを言葉で表現するたけでなく、記録 としてもまとめる。

助け合い・学び合い・教え合いを深める

全ての生徒が車いすラグビーに積極的に参加し、 仲間との助け合い・学び合い・教え合いの中で、全員が 楽しめる学習を展開した。チームの課題解決活動では、 共通の目標を明確にしたことで、技能の習得に効果が 得られるとともに、仲間との協力やチームの団結力を 高めることにつながった。共通の目標を設定すること で、作戦ボード(図9)を積極的に活用し、互いに声 をかけ合いながら学習に取り組んだ。チームの作戦を 立てる活動を通して、互いを認め合ったり、協力し合っ たりし仲間意識を高められた。そして、仲間の長所 を作戦に盛り込むことが増えた。



作戦ボード(コート図)

- ・作戦会議の際に、各チームに1つずつ配付し、チー ム内でポジションや動きを確認できるように する。
- ・仲間の動き、相手の動きを視覚的に分かりやすく する。

5 深い学びの実現

ICTの活用

仲間と考えた作戦や自分や仲間の動き、そして対戦 相手の動きを知識・理解としては深められた。しかし、 実際の技能や動きとしてつなげることは難しい。また 生徒たちは、ゲームで勝つためにどのような工夫が必 要かを考えるようになった。そこで、タブレット端末 を活用し、録画した映像を見ることで、ボディーイメ

ージを高めたり、自分やチームの動き、相手チームの動きを客観的にとらえたりして、考えを深めることができた。作戦会議の中でも、映像を見ながら話し合うことで新たな意見や考えが生まれるようになった。

(図10、図11)



図10 見学者による撮影



図11 映像を元に話し合い活動

振り返り学習

単元の最後には、振り返り学習を丁寧に行った。車 いすラグビーで気づいた自分の長所や課題、自分の長 所をチームにどのように生かしたのかなど記入してい た。また、体育の授業以外の日常生活や他教科の授業 で生かしていきたい内容を記入する生徒もいた。体育 の授業を通して、学習指導要領の育成を目指す資質・ 能力を育むことができた。

Ⅴ 考察

主体的・対話的で深い学びを実現させるためには、 前提として運動やスポーツを「楽しむ」ことが大切で ある。楽しいから「もっとやりたい」「もっと知りたい」 という思考・意欲が生まれ、成功体験を積み重ねるこ とで自信がつき、生徒の主体性を引き出せたと考える。 また、スポーツの醍醐味でもある「勝敗を競う(競争)」 中で「勝ちたい」という明確な目標が生まれる。そして、チームで作戦を立てる活動を通して、互いを認め 合ったり、協力し合ったりし、仲間と協働して動きや 考えを創り上げていく(共創)の意識が高まる。さら に、チームとして「もっとうまくなりたい」「もっと勝 ちたい」という気持ちになり、活発な対話が生まれ、トップアスリートはどのような作戦を考えているのか 自分たちで調べるようになった。学んだ知識、調べた 情報をゲームの中でどう表現するのかを話し合い、練 習計画を立て、ゲームに臨むようになった(知識・技能の習得、情報収集)。ゲームの結果によって、「なぜ勝てたのか、なぜ負けたのか」を振り返り分析し、次のゲームに生かしていくことが大切である。このような流れで授業の展開を繰り返したことで、主体的・対話的で深い学びの体育の授業が展開できたと考える。

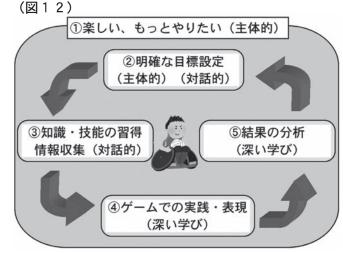


図12 体育の授業のサイクル

VI まとめ

今回の研究では、肢体不自由をもつ特別支援学校に 在籍する生徒の実態が多様化する中で、生徒一人一人 の障害の状態に応じた運動やスポーツの楽しみ方を伝 える必要があることがわかった。そのために、教師と 生徒が協力し、ルールや用具の工夫を行う。どのよう な工夫があればもっと活動しやすくなるのかを体験的 に理解することにもつながる。学校外や卒業後の生活 で、活動する場が変わったとしても、自分に必要な工 夫を周囲に伝えることができれば、どのような環境で も学び続けることができると考える。

また、体育の授業サイクルを他教科でも活用し、主体的・対話的で深い学びが全ての教科で実現できるようにしていきたい。体育の授業では、他教科担当の教員と一緒にティーム・ティーチングで実施してきた。体育での経験を他教科の授業で生かしてもらいたい。

最後に、肢体不自由の体育では活動できるスポーツが限られていると言われている。今回の実践のように、全ての生徒が活躍できるスポーツを作り上げ、他校に紹介し、実施してもらう。そのスポーツがさらに広がり、大会を実施できるようになれば、パラスポーツの推進にもつながると考える。

【引用文献】

千葉県教育委員会(2022)「思考し、表現する力」を 高める実践モデルプログラム(改訂版)

全校児童と交流をした知的障害特別支援学級による川上小郵便局活動

~コロナ禍の子ども達を元気にする実践をめざして~

八街市立川上小学校 教諭 上 代 繁

1. 取り組みのきっかけ

中華人民共和国の武漢市で新型コロナウィルスの感 染が広がっているというニュースが最初に伝えられた のは、2020年1月頃だった。それから瞬く間に全世界 に広がり、3月には世界保健機関(WHO)から、パンデ ミック(世界的な大流行)の状態であると表明された。 2021年8月には、全世界の感染者数は約2億人、死者 数は 400 万人以上に及ぶ。このような COVID-19 (以下 新型コロナウィルス感染症) のパンデミックは、私たち の生活を大きく変化させ、子どもの心に少なからず影 響を及ぼした。2020年3月から5月の一斉休校は、友 達と遊ぶ場をなくし自宅でテレビゲームばかりしてい る子、自宅にこもりきりで、兄弟喧嘩が増えた子、運動 不足でイライラが増えたり、昼夜逆転した生活になっ てしまったりした子などがいた。学校再開後も、常時マ スク着用、音楽の合唱や調理実習の中止、体育の種目や 運動場の遊具の使用に関する制約など、子ども達の心 身に多くのストレスがかかる状況にあった。

もともと知的障害特別支援学級に在籍する児童の中には、交流学級の友達とは積極的に関わることができない児童がいる。その背景には、知的な遅れから自分に自信がなかったり、同年代の児童との対話では話の内容が正しく理解できず、楽しめなかったりすることが挙げられる。新型コロナウィルス感染症を予防し社会的な距離を確保するために、交流授業を取りやめたことで、児童間の交流の機会が少なくなり、さらに人間関係が限られてしまった児童も多かった。

そこで、「川上小郵便局を開こう」という生活単元を 構成し、手紙の交換を交流学級の児童と行うことによ り、多くの人々と関わる場面を作ろうと考えた。以下、 知的障害特別支援学級担任として、コロナ禍3年間に 実践した全校児童との交流をめざした生活単元学習の 取り組みについて報告する。そして、本実践事例を通し て、交流及び共同学習としての活動の効果と意義につ いて考察したい。

2. 指導方法

友達と交流したいという気もちを出発点に、密接・ 密集・密閉のいわゆる3密を避けて交流する方法とし て、手紙の交換を提案した。そして、それを全校に広 げるために特別支援学級で郵便局を校内に開設するこ とにした。そのために、まず、はがきやポストを観察 したり、郵便局員の仕事について調べたりする活動を した。その上で、はがきを紙すきで制作した。全校に 行き渡る枚数を作ることを目標に、継続的に作業に取 り組ませた。また、学校の畑でサツマイモを栽培し、 収穫したイモを使ってスタンプを制作し、消印とし た。ポストも制作し、校内に設置した。川上小郵便局 の運用を開始すると、決まった時間にポストからはが きを集め、学級ごとに仕分けをし、配達する活動に児 童は分担して取り組んだ。川上小郵便局活動の発展と して、1年目の実践では、ビデオ会議システムを活用 して、交流学級の児童に長期間にわたる取り組みの様 子を伝えると共に、お互いの感想をシェアした。2年 目の実践では、1人1台のタブレット端末が導入され たことから、その機能を活用して、郵便局活動の発展 として、本の紹介動画をQR読書郵便にして、1年生に とどけた。3年目の実践では、タブレット端末を活用 した動画撮影や文字入力などのスキルが向上したこと から、川上小郵便局のホームページ作りに挑戦した。

3 実践経過

川上小郵便局を開こう!

つかむ

新型コロナウィルスで学校の休みが続い たよ。

☆寂しかった→☆友達と交流したい→ ☆3密はダメ→☆手紙を書こう→ ☆全校に届けよう→

☆全校に広げよう→

☆川上小郵便局を開こう

社会

さあ, しらべよう!!

しらべる

はがきのことを知りたい! (はがきの観察)

ポストのことを知りたい! (ポストの観察)

郵便屋さんのことを知りたい! (映像で観よう)

図工

作ってみよう!

紙すきはがき作り

郵便ポスト・郵便受け作り

サツマイモの芋版消印作り





図1紙すきはがき作り

図2芋版作り

川上小郵便局の準備

- ・教室を集配局にし、仕分けボックスを作る。
- ・郵便ポストや郵便受けを設置する。
- ・仕事を分担する(集配,消印,仕分け)

広げ

る

国語 説明書や郵便番号表を作る

動画で川上小郵便局開局のお知らせをする

川上小郵便局活動開始!

算数

決まった時間に郵便ポストから手紙を集める。

郵便番号ごとに手紙を仕分ける。

手紙の枚数を確認し間違いなく配達する



図3 はがきの収集

図4 はがきに消印を押す





図5はがきの仕分け

図6はがきの配達

まとめる

これまでの活動をまとめる。

国語

伝える

1年目 ビデオ会議システムをつかって 川上小郵便局の活動を通して体 験したことを交流学級の友達に

表現しよう!

伝える。



図7ビデオ会議による交流

2年目

本の紹介動画を QR 読書郵便 にして、1年生にとどける。





図8 本紹介動画

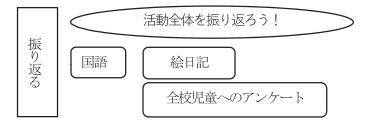
図9 QR 読書郵便

3年目

川上小郵便局のホームページを作って交流学級の友達に伝える。



図10 川上小郵便局のホームページ



4 考察

(1) 活動の効果

3年目の活動後に全校児童へのアンケートを実 施した。本アンケートは、Google Formを利用し、 184人(児童180人、教職員4人)から回答を得た。

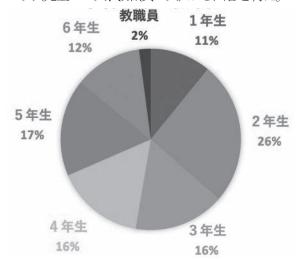


図11 アンケートの回答者の学年別割合

川上小郵便局を利用してはがきを出したり、も らったりした人の割合は94%だった。5件法によ る川上小郵便局の感想では、「とてもたのしかった」 と「たのしかった」を合わせた肯定的回答は、91.8% だった。

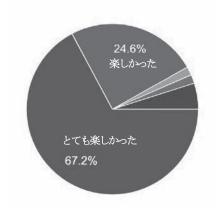


図 12 川上小郵便局の活動に対する感想

次に自由記述による川上小郵便局について、感

想を、AI テキストマイニングにより分析する。 AI テキストマイニングは、人工知能を使って、 テキストデータから有益な情報を抽出する手法 である。ワードクラウドにより、スコアが高い単 語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図 示したものが図13である。「楽しい」「ありがと う」などの語句が大きく表示されている。

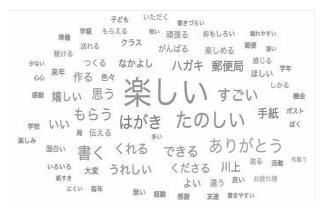


図13 ワードクラウド

文章全体を分析し、感情傾向を可視化したもの が図14と図15である。

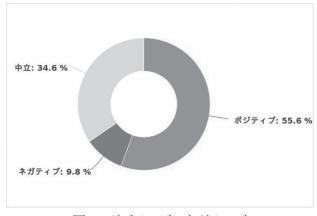
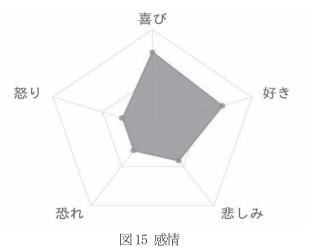


図14 ポジティブ・ネガティブ



ポジティブな言葉が半数を超え、内容も「好き」

「喜び」を表すワードが多いことがわかった。 以上のワード分析から、児童の自由記述の重要 語句として、次の5つの語句が抽出された。

- はがきを書くのが楽しい。
- ポストに入れるのが楽しかった。
- いろいろな人と交換できる。
- ・感謝の気持ちを伝えられる。
- もらった時のうれしさ。

児童は、はがきを書き、ポストに入れることを楽 しいと感じ、いろいろな人と交換し、感謝の気持ち を伝える文面から、はがきをもらった時のうれしさ も味わった。児童が、面と向かっては言いにくい教 師に対する感謝の言葉や友達に対する感謝の気持 ちを表現するきっかけに、川上小郵便局の活動がな ったと考えられる。

柴田・大村(2017)は、「手書きには労力が必要であり、書かれたものは一過性のものであり、再利用できない。こうした相手のために費やした労力に対する代価として、感謝の気持ちが強く認識されるかもしれない」と述べている。児童は手書きのはがきを書いてもらっただけでなく、川上小郵便局を企画し、はがきを集配した本学級児童への感謝の気持ちも高まった。これは、次のような学級に届いた通常学級児童からのはがきの文面からも窺われる。

「この川上ゆうびん局をつくってくださり、ありが とうございました。この機会で皆や先生方の(に) 感謝の気持ちを伝えられました。本当にありがとう ございました」(6年生)。

「いつもおもしろいきかくをたててくれてありが とうございます。これからもおもしろいきかくたの しみにしています。これからもよろしくおねがいし ます」(5年生)。



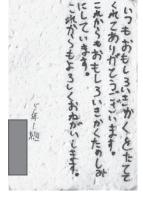


図 16 通常学級児童から届いたはがき

コロナ禍でのソーシャルディスタンスの維持は、 児童間の心理的距離も遠ざけてしまっていた。そして、常時マスクをしての学校生活では、表情から互いの気持ちを読み取ることが難しかった。こうした中で、川上小郵便局を利用して、はがきを交換することを通して、全校規模でのコミュニケーションが増え、児童間の心理的距離を縮め、互いの親密さも高める効果があったと考える。宮田(2020)は、「『手書き』による手紙には、双方向の距離感を縮め、親密さを増し、互酬関係を下地にした信頼関係を高めていく力がある」と述べているが、本実践においても、こうした手書きの手紙の効果が実証されたと考えられる。

(2) 活動の意義

① 交流学習としての意義

川上小郵便局の活動は、コロナ禍の制約のある 中での全校児童を巻き込んだ交流活動として、特別 支援学級の児童にとっても、通常学級の児童にとっ ても必然性がもてる内容だったので、児童が目的意 識、相手意識を明確にできた。特別支援学級の児童 だけでなく、交流学級の児童もワクワクし、興味関 心が高まった。そして、川上小郵便局の活動に参加 した児童相互の親密さが増し、信頼関係が高まっ た。文部科学省(2019)は、「障害のある子供と障害 のない子供、あるいは地域の障害のある人とが触れ 合い、共に活動する交流及び共同学習は、障害のあ る子供にとっても、障害のない子供にとっても、経 験を深め、社会性を養い、豊かな人間性を育むとと もに、お互いを尊重し合う大切さを学ぶ機会となる など、大きな意義を有するものです」と述べてい る。川上小郵便局の活動は、こうした点において、 交流学習として意義のある活動だったと考えられ る。

② 共同学習としての意義

学習指導要領(文部科学省2017)の様々な教科の本文・解説に「手紙」に関連した記述がある。例えば国語科2内容B書くことの第1学年及び第2学年には、言語活動の一つとして「オ伝えたいことを手紙に書くこと」、第3学年及び第4学年には、「エ目的に合わせて依頼状、案内状、礼状などの手紙を書くこと」が例示されている。国語科のポイントのひとつは、「人との関わり」(全学年の目標)と「相手とのつながり」(5、6年の内

容)である。川上小郵便局の活動を通して、人と 関わり、相手とつながるツールとして、手紙の良 さを実感できたので、通常学級児童にとっても新 しい学びのある学習となったと考えられる。文部 科学省(2019)は、「交流及び共同学習は、相互の触 れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的と する交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的 とする共同学習の側面があり、この二つの側面を 分かちがたいものとして捉え、推進していく必要 があります」と述べている。川上小郵便局の活動 は、こうした点において、共同学習としても意義 のある活動だったと考えられる。

③ ICT活用としての意義

2021年から、文部科学省による GIGA スクール 構想の具現化に向け、一人一台のタブレット端末 が導入された.。本学級においても学習活動に ICT を効果的に活用できるように実践を進めてきた。 川上小郵便局の活動においてもタブレット端末や 電子黒板を学習ツールとして利用した。 ICT を活用 した効果として次の 4 点が挙げられる。

- ・ビデオ会議システムを使うことで、直接対面することがなかったので、発表することへの抵抗感を下げることができた。人のなかに入っていくのが苦手な児童にとって、安心感があった。
- ・川上小郵便局開局のお知らせなどを動画で配信 したことは、文字を書くことが苦手な児童にと って、自分の思いや考えを表現するのに効果的 な手段となった。また、動画の録画機能は、失 敗しても撮り直せるので、児童が納得のいくも のに仕上げることができた。
- ・児童の特性に合わせて、個に応じた形で ICT を 活用することができた。タブレット端末は、ク ラウド上のドライブに記録することで、変更が あれば自動で更新される。完成できなくても次 の時間に続きから再開できるので、個々の児童 のペースで学習が進められた。また、共有ホル ダーを活用することで他の学級と交流するのに も便利だった。
- ・川上小郵便局の活動の見えない部分をビデオ会 議やホームページなど ICT を活用して知らせる ことにより、本学級児童の思いや苦労なども含 めて発信することができた。

川上小郵便局でのICT活用は文部科学省(2020)の示す「知的障害の児童生徒に対しては、抽象的な事柄の理解と話し言葉によるコミュニケーションの代替に活用」として効果的だった。文部科学省(2011)では、「特別な支援を必要とする子どもたちにとって、情報通信技術は、障害の状態や特性等に応じて活用することにより、各教科や自立活動等の指導において、その効果を高めることができる点で極めて有用である」と述ている。こうした点において、知的障害特別支援学級におけるICTの有効活用としても意義のある活動だったと考えられる。

(3) 今後の課題

2023年5月、世界保健機関(WHO)は、新型コロナウィルス感染症の緊急事態宣言を解除した。わが国も感染症法の位置付けを2類から5類に変更した。学校もプールでの水泳学習の復活など、コロナ以前の日常を取り戻しつつある。全校へのアンケートでは、約9割の児童が川上小郵便局の継続を期待している。コロナ禍に対応した活動として取り組んできた川上小郵便局を今後どう展開していくかが課題である。

ICT機器が充実し児童のスキルも向上してきていることから、今後も、手紙のやり取りというアナログとICTの活用というデジタルのハイブリッドで川上小郵便局活動を発展させていきたい。そして、発信したものが自分のところに返ってくるような双方向のコミュニケーションが高まるよう工夫していきたい。

【引用文献】

宮田 譲(2020) 手紙における「手書き」がもたらすコミュニケーション価値 相模女子大学紀要 VOL. 83 文部科学省(2011) 教育の情報化ビジョン 文部科学省(2017) 小学校学習指導要領解説国語編 文部科学省(2019) 交流及び共同学習ガイド 文部科学省(2020) 特別支援教育における ICT 活用について

柴田博仁・木村賢悟 (2017) 手紙の内容評価と差出人のパーソナル評価に及ぼす表示メディアと文書スタイルの効果 日本印刷学会誌第54巻第1号ユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析(https://textmining.userlocal.jp/)

優 良 賞

学校教育目標の実現に向けたカリキュラム・マネジメント

~総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・デザインとその評価~

野田市立柳沢小学校 校長 遠藤 恵美子

I 研究の背景と目的

現代社会は急速に変化しており、未来がどのような世界になるのかという具体的な姿を誰も描けないほど、予測困難な時代となっている。このような時代において、平成29年度の学習指導要領改訂では、「社会に開かれた教育課程」を編成、実施して、「子供たちが未来社会を切り拓いていくための資質・能力を一層確実に育成する」ことが求められた。こうした資質・能力を育成するためには、教育課程全体を通じて目指す教育目標の実現に向けたカリキュラム・マネジメントを確立することが必要である。

しかし、学校教育目標とカリキュラムや授業等が互いにつながりのある営みとして、どこまで意識的に取り組まれてきたかといえば、否定的にならざるを得ない。国立教育政策研究所の報告(2020)によると、PDCAサイクルにおけるカリキュラムの評価に関して、年度途中での評価がその後の見直しに活用されていなかったり、年度末にのみ実施されており、カリキュラムと授業のつながりが意識されにくくなっていたりすることが報告されている。

さて、現行の学習指導要領において、総合的な学習の時間は学校教育目標を実現する上での中核となる存在として明確に位置付けられた。さらに、総合的な学習の時間と各教科等を関連付けることで、別々に身に付けた資質・能力をつながりのあるものとして活用・発揮することが期待されている。このように、総合的な学習の時間を中核としながら、カリキュラム全体において学校教育目標の実現を目指すことが重要である。以上のことから、本研究では以下の二点に関する研究を行うことを目的とした。

①育成を目指す資質・能力に基づく総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・デザインを行い、各教科で育成された資質・能力が適切に活用・発揮される単元配列や単元構成、授業における学習指導の効果について検証する。

②作成したカリキュラムが資質・能力の育成に有効 であるかを検証するために、カリキュラムの評価の在 り方を模索し、効果的な知見を得る。

本研究を通して上記の成果が図れれば、各学校における学校教育目標の実現にも生かせるカリキュラム・マネジメントの一例として提示できると考え、本主題を設定した。

Ⅱ 研究仮説

学校教育目標から育成を目指す子供の姿を資質・能力の三つの柱で整理し、それらが各教科において活用・発揮が期待できる重点単元と、各教科と総合的な学習の時間との間において活用・発揮される関連単元を明確にしたカリキュラム・デザインを行えば、各教科で育成された資質・能力が適切に活用・発揮される単元配列や単元構成、具体的な学習指導を意図的に設定することができ、目指す資質・能力の育成につながるだろう。また、重点単元と通常単元における観点別学習状況の評価を比較することで、資質・能力の育成状況を把握することができ、カリキュラムの評価につながるだろう。

Ⅲ 研究の具体的内容

1 学校教育目標を踏まえた資質・能力を育む カリキュラムの編成

学校教育目標の実現に向けてカリキュラムが編成さ れていることからも、「どのような資質・能力の育成を 目指しているのか」を明確にし、共有することによっ て、そのカリキュラムの評価を適切に行うことができ る。そこで本研究では、学校教育目標を「三つの資質・ 能力」で見つめ直すことで、「育成を目指す資質・能力」 を子供の姿として具体的に描く。本校の学校教育目標 は「主体的に活動し仲間と協働できる児童の育成」で あり、「進んで学ぶ子」、「思いやりのある子」、「元気で たくましい子」の三つの目指す児童像から構成されて いる。この知・徳・体にあたる目標を、学習指導要領 が示す三つの資質・能力で具体的に表現することによ り、グランドデザインから単元配列表、そして単元計 画へとつながり、育成を目指す資質・能力が授業の1 単位時間にまで落とし込みやすくなる。そうすること で、授業の評価が単元計画の改善につながり、単元配 列表やグランドデザインの見直しに結びつくという連動したカリキュラム・デザインが可能になる。

本校においては、全国学力・学習状況調査(2021)の児童質問紙調査から、学習指導要領において学習の基盤となる能力とされている「問題発見・解決能力」や、学んだことを実生活や社会の様々な場面に活用しようとする意識において課題が見られることが明らかになった。そこで、この課題を克服し学校教育目標の実現を目指すために、今後2年ないし3年間で育成を目指す児童像を短期目標として設定した。本校では児童の実態から、「思考力、判断力、表現力等」を重点的に育成することを目指し、各学年の1単位時間における目指す子供の姿を具体的に示した(図1)。

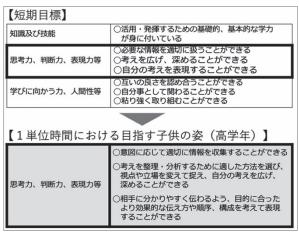


図1 育成を目指す資質・能力と子供の姿

2 総合的な学習の時間との関連単元と各教科にお ける重点単元の設定

天野(2005)は、「教科学習での基礎的・基本的内容の確実な定着があって、総合的な学習は身を結ぶことができるのである。また、総合的な学習での問題意識が教科学習の意味(学ぶことの意味)を見つけさせ、教科学習を活性化させる。」と論じている。これは、子供の学びが個別の教科内で閉じるものではなく、それぞれの学びが相互につながっており、その関連を具体的に考える必要性があることを示している。そこで、本研究では、目指す資質・能力を育成するために、図1で示した1単位時間における目指す子供の姿をもとに、総合的な学習の時間との関連単元と各教科における重点単元を明確にした単元配列表を作成し、検証する(図2)。

重点単元については、1単位時間における目指す子供の姿につながるキーワードを抽出し、各教科の学習指導要領の内容と照らし合わせ、目指す資質・能力の発揮が最も期待できる単元を検討し、設定した。

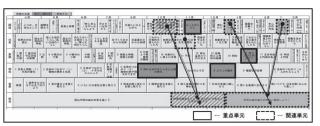


図2 単元配列表 (第5学年)

3 目指す資質・能力を育成する授業の方策

1単位時間における目指す子供の姿の実現に向けた 授業改善の手立てとして、「考えるための技法」(思考 ツール)の活用、振り返りによる学びの自覚化を設定 した。

(1)「考えるための技法」(思考ツール)の活用

「考えるための技法」(以下、「思考ツール」という)は、現行学習指導要領において、総合的な学習の時間にはじめて示された。これは、考える際に必要になる情報の処理方法を「比較する」、「分類する」、「関連付ける」のように具体化し、技法として10に整理したものである。

授業において、「子供が持っている情報」、「子供が行う処理方法」、「子供が生成する成果物」などを意識し、どのような思考ツールを用意するか検討した。思考ツールを取り入れることで、頭の中にある情報やイメージを視覚化し、課題に対する個々の考えを共有したり、広げたり、深めたりすることにつながると考えた。

(2) 振り返りによる学びの自覚化

受動的に教わったことを記憶することだけでなく、 授業を能動的に振り返って見つめ直すことにより、学 びの意味付けや価値付けにつながると考えた。そこで、 授業の終末に自分の考えや体験を自らの言葉で言語化 し書くことによる振り返りの時間を設定した。総合的 な学習の時間における育成を目指す資質・能力につい ては、振り返りをテキストマイニングで分析すること で見取ることができると考えた。

4 重点単元における観点別学習状況評価を用いた カリキュラムの評価

重点単元における観点別学習状況評価をカリキュラムの評価に用いるためには、学校教育目標を各教科の単元レベルにおける評価の観点に組み込んでおく必要がある。それは、図1で示したように学校で育成を目指す資質・能力を三つの柱に明確に落とし込むところから評価が始まるといっても過言ではない。つまり、カリキュラムが子供にとってよりよいものになっているのか、子供の授業における姿を目指す姿と照らし合

わせて、3段階で評価 $(A \cdot B \cdot C)$ したものを数値化 $(A=3 \cdot B=2 \cdot C=1)$ し、判断していく。

5 カリキュラム・デザインの中核となる総合的な学 習の時間の単元計画と実施

学校教育目標の実現に向け、1単位時間における目指す子供の姿を基盤とした総合的な学習の時間の単元 「市民の森、救出大作戦!」を開発した(表1)。

表 1 単元計画

小単元	時数	ねらい・学習活動	偏考
1 市民の森の様子をさぐろう	1	○生物多保性収略拠点の自然環境や生物の変化について知り、市民の海がどのような場所なのかについて話し合う。 市民の海がどのような場所なのかウェビングマップを活用して考える。 ・生物多保性のご地略拠点な中市氏の森の自然 環境や生態系を取り上げ、それらのよさや 変化について知る。	・ウェビングマップで市民の海についての寿 えを広げ、市民の森の長所も短所も提えら れるようにする。 かつては自噴井戸があり、生活用水として 使われていたが、現在は見られなくなって いることや、家庭ごみの廃棄、ドブ臭があ ることなどを知る。 ・確認された生物は、在来種が減少し、外来 種が増加していることや個体数が減少して いることを押さえる。
05	2	○地域のガシのインタビューやアンケート等から問題点を見出し、「市民の意、敷出大作表」1という場元を通した課題を設定する。 ・地域の人の市民の蘇への関心や認知度の低さを知り、今後でのような課題に取り組んでいくのか話に合う。 ・地域の人に市民の蘇の何を伝えれば良いのか考える。	・「生物多様性」についてのアンケート結果等を示すことで、地球の人の限心の転さを知ることで、自分たちだけでなく、地域の人にも応える必要性を感じられるようにする。 市民の森の魅力を伝えることの重要性をつかませる。
2 自分民	3 1 4	○解決に必要な情報とその調査方法を明確に しながら、計画を立てる。・何を詳しく調べればよいか、どのように調べるかを明らかにする。	・KWL シートを活用して、児童が知っている ことや知りたいことについて明らかにす る。
自分たちにできることはなんだろう市民の森をよりよくするために、	5 5 12	○フィールドワータを行い、市民の森の魅力を見出す。 そ見出す。 フィールドワークを行い、市民の森の魅力 を置す。(写真に強す) 専門政が進んだ (市民の森の魅力) が伝わる写真から、魅力を伝えるためにどのような担点が最更かを話し合う。 専門家や本、インターネットなどから必要な情報を受験する。	・収集する情報について考え、本やインターネットでの検索や、自然科学系の専門家の方へのインタビューといった多様な方法で的操に情報収集し、情報ごとに蓄積する。
5	13 5 14	○市民の森をよりよくするために、地域の人 に対して市民の森への関心を高めてもらう ための写真を活用した発信方法を考える。	・関心を高めてもらう発信方法について、ウ ェビングマップや座標軸などの思考ツール を活用してアイデアを広げたり、焦点化し たりする。
	15	○市民の森を発信する上で、より目的に近づける方法を検討する。	前時にグループで検討したことをもとに、 学級全体で話し合う。
3 市学	16 5 19	○写真展で掲示する写真と、自分が写真を通 して伝えたい思い (テーマ)を目的に合わ せて決定し、展示作品を作成する。	・これまでの話し合いで見出した魅力を伝え るために重要な視点を生かし、写真を選 ぶ。
市民の森を発信しよう学校や地域に	20 1 23	○学校や公民館で「市民の森写真展」を行 い、学校や地域の人々に向けて情報を発信 する。 ・よりよい写真展にするために、どうしたら よいのか考え、見直し・改善していく。	・学校での写真展を鑑賞しながら、気付きや 感想から課題を見出し、公民館での写真展 に向けて改善していく。
)	24	○今後の自分たちと地域や環境との関わりについて、これまでの活動を振り返ってまとめる。	・単元を通して学習を振り返る。

本単元は、第5学年を対象とし、国語や社会における関連単元での学びを総合的な学習の時間でも活用・ 発揮しながら、学区にある二つの市民の森を環境保全 の視点で捉え、その魅力について学校や地域に発信し、 持続可能な自然環境の在り方について考える単元構成 となっている。

本単元では、1単位時間における目指す子供の姿の一つである「考えを整理・分析するために適した方法を選び、視点や立場を変えて捉え、自分の考えを広げ、深めることができる」について、小単元1の第2時と小単元2の第15時において育成を目指す授業を設定した。そのため、本研究では小単元1(第2時)と小単元2(第15時)を分析対象の授業とした。

(1) 小単元1 (第2時) の具体的内容

第2時は課題の設定場面である。授業では、自分以外の視点からも市民の森の現状やよさ、問題などについて考えらえるように、保護者や地域の方のインタビュー動画を観る時間を設けた。これまでの学習では、

子供は市民の森に対して「暗い」「整備がされていない」 「ごみが多い」といった環境面への問題を強く感じて いた。しかし、保護者や地域の方のインタビュー動画 を観たことで、市民の森自体を知らない人や名前だけ しか知らない人が多いということに気付いた。自分た ちが取り組んでいく問題について話し合う場面では、 ピラミッドチャートを活用した(図3)。話合いが進む 中で、ごみの多さか関心の低さかどちらの問題を解決 するかに意見が分かれた。そのため、二つの課題につ いて比較しやすいよう、マトリックス表も取り入れて 話合いを進めた (図4)。子供からは、「ごみのある状 態を知らせることも大切だけど、きれいな森を知って もらいたい」「市民の森を知っている人を増やすことで、 私たちの活動に協力してくれる人を増やすことにつな がる」「関心を高められれば、私たちの活動が終わって も、市民の森を大切に思う人がいてくれる」と様々な 視点から意見が出された。最終的に、「きれいさを保ち つつ、市民の森への関心を高める」という課題に取り 組むことが決まった。インタビューや思考ツールを取 り入れたことで、様々な立場や視点から問題について 考え、話し合う姿が見られた。





図3 話し合いの様子

図4 第2時の板書

(2) 小単元2 (第15時) の具体的内容

第15時は発信方法の検討場面である。授業では、学校や地域の人々の市民の森に対する関心を高めるために、前時で出されたいくつかの方法をもとにどのように発信していくかを話し合った。最初に、グループごとに話し合う時間を設けた。話し合う際には、自分たちで適した思考ツールを選び、ホワイトボードを活用するよう指示した。子供が選んだ思考ツールは、マトリックス、ピラミッドチャート、座標軸、ウェビングマップ、PMIシートとグループによって様々であった。全体での話合いでは、「効果的か」「自分たちでできるか」「持続可能か」といった視点での意見が多く出された。しかし、自分の立場から考えた意見が多かったため、教師から「学校や地域にはどんな人がいるのか」という発問を投げかけた。その発問をきっかけに、「小さい子は文字が読めないから、写真が伝わりやすい」

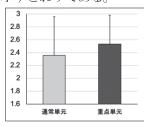
「働いている人たちは時間がないから、展示会をネット上でもできないか」など、自分より幼い子や親世代など様々な立場から考えた意見が増えていった。最終的に、「ポスター・写真展」を公民館や Web 上で開いて発信するということに決まった。

Ⅳ 結果と考察

1 カリキュラムの評価

(1) 通常単元と重点単元における観点別学習状況の 評価の比較

設定した重点単元が、目指す資質・能力の育成につながったかを検討するために、教科別に通常単元と重点単元に分類した。それぞれの単元の観点別学習状況評価について、 t検定による分析を行った。本研究では、総合的な学習の時間の検証授業を行った第5学年の2クラスにおいて、9月から12月までに実施した社会と国語のそれぞれ5単元を分析対象とした。そのうち、重点単元は社会において1単元、国語において2単元である。それぞれの分析結果は、図5、図6に示すとおりである。



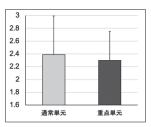


図5 社会における比較

図6 国語における比較

結果として、社会では通常単元よりも重点単元が高 い値を示し、有意な差がみられた(図5、p=0.013)。 この結果から、社会の授業においては、1単位時間に おける目指す子供の姿をもとにした単元計画や授業の 1単位時間における手立てや支援が効果的であったこ とが考えられる。このことから、カリキュラム・デザ インにおいて重点単元を明確に設定することが、目指 す資質・能力の育成につながる可能性が示唆された。 一方、国語においては通常単元と重点単元の間に有意 な差は認められなかった(図6)。そのため、授業や単 元計画、単元配列表などを見直し、改善する必要があ る。どの階層を見直し、修正するべきかは、見取った 子供の姿や教師の振り返りなどを踏まえながら、1単 位時間において授業の方策が有効に機能していたか、 単元構成や単元配列は適切であったかなどについて検 討していくことが考えられる。

(2)総合的な学習の時間と関連単元の関係性

本研究では、社会や国語における関連単元で育成さ

れた資質・能力が総合的な学習の時間でも活用・発揮 されることで、目指す資質・能力の育成につながるだ ろうと仮説を立てた。具体的には、国語や社会の単元 を通して活用した「比較する」「多面的に見る・多角的 に見る」という思考スキルが、総合的な学習の時間に おいても活用・発揮されることで汎用的なスキルとし て向上すると考えた。

総合的な学習の時間の検証授業を行った第5学年の2クラスに対して、関連的な指導に関する自己評価を9月と12月の2回調査した。結果は図7に示したとおりである。肯定的な回答の割合は、9月が72.1%であったのに対し、12月は95.3%と約20ポイントの増加が見られた。12月の調査では「当てはまらない」と回答した児童はおらず、パーセントポイントが最も増加していたのは4項目中「当てはまる」と回答していたものであった。このことから、各教科での学びを総合的な学習の時間に生かすことができたと自覚している児童が多いことが明らかとなった。

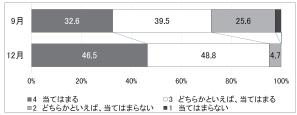


図7 関連的な指導に関する自己評価

総合的な学習の時間や教科の学習後における振り返 りから、児童がどのような点において総合的な学習の 時間と他教科の関連を自覚していたかを分析した。振 り返りの記述から関連の自覚が見取れた児童は44名 中13名(29.5%)であった。その記述内容から、関連 するタイプを「知識や内容」「表現力」「思考力」の3 つに分類した。「知識や内容」の関連を自覚している児 童が最も多かった。これは、社会と総合的な学習の時 間における学習材が「森林」という点で共通しており、 関連を認識しやすかったことが考えられる。育成を目 指す資質・能力に関連する「表現力」や「思考力」の 関連を自覚していた児童は5名(11.3%)だった。自 己評価において関連を自覚している児童が 95.3%だ ったことを踏まえると、具体的にどのような点で関連 しているかについて明確に自覚している児童の割合は 低かった。そのため、本研究では、関連単元を設定し たことが目指す資質・能力の育成につながったかどう かを結論付けることはできないと考えられる。

今後、総合的な学習の時間と各教科の関連によっ

て資質・能力が育成されているかを適切に評価する 方法を検討していくことが重要である。

2 総合的な学習の時間における検証授業の分析

(1)全体の傾向

本研究では、単元における思考・判断・表現の評価 規準をもとに、児童の振り返りの記述を3段階(A・B・C)で評価した。授業評価は図4に示すとおりである。 評価の傾向として、小単元1(第2時)から小単元2 (第15時)にかけて、Bの割合に大きな変化は見られ なかった。一方、Cの割合が31.6ポイント減少し、A の割合が28.1ポイント増加した。この結果から、総合 的な学習の時間を通して、目指す資質・能力の育成に つながったことが示唆された。

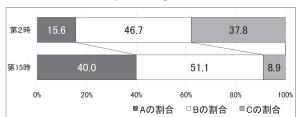


図6 分析対象とした2時間の授業評価

(2) 児童の振り返りと授業方策の関係性

小単元1 (第2時)と小単元2 (第15時)における 授業の振り返りについてユーザーローカルテキストマ イニングツール (https://textmining.userlocal.jp/)を活用 し、共起キーワードをもとに分析を行った。分析対象 とした2時間は、「考えを整理・分析するために適した 方法を選び、視点や立場を変えて捉え、自分の考えを 広げ深める姿」を目指した授業であった。小単元1 (第 2時)では、「ごみ」「知名度」といった市民の森の現 状に関するキーワードが多く挙げられた (図7)。「知

名度」から協力 を増やすことや 管理を手伝うと いった内容のも のへとつながっ ていることが明

らかとなった。

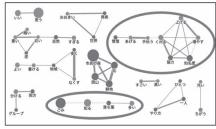


図7 第2時における振り返り

課題を解決するための方法を決定した小単元2 (第15時)では、様々な発信方法からの広がりの他に、「マトリックス」「比べる」「ウェビングマップ」「広げる」という思考ツールと思考スキルに関連するキーワードが出てきた(図8)。目的を達成するために、どのような方法で解決すれば良いのか、自分たちで思考ツールを選択し、活用して話合いができていたことが振り返

りから読み取ることができる。振り返りの視点が変化 したことは、授業において思考スキルに適した思考ツ ールを繰り返し活用したことが影響していると考える。 その結果、様々な視点や立場から考えを広げたり、比

較したりする思 考を身に付ける ことができ、目 指す資質・能力 の育成につなが った。

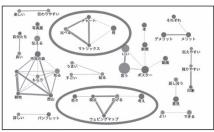


図8 第15時における振り返り

V 研究のまとめ

1 本研究で得られた知見と本研究の限界

- (1) 育成を目指す資質・能力に基づく各教科における重点単元と総合的な学習の時間との関連単元を明確にしたカリキュラム・デザインを編成することで、各教科で育成された資質・能力が適切に活用・発揮される単元構成や具体的な学習指導を意図的に設定することができ、目指す資質・能力の育成につながる可能性が示唆された。
- (2) 重点単元における観点別学習状況評価をカリキュラムの評価として用いることで、目指す資質・能力が育成されているかを検討することができた。その評価をもとに、授業改善という視点だけではなく、単元やカリキュラムの見直しにもつながる効果的な知見が得られた。グランドデザインや単元配列表、単元計画、授業のどの階層の見直し、改善をしていくことがより効果的なカリキュラム・マネジメントとなるかは、今後さらなる検討が必要である。

2 おわりに

学校の実態によって効果的なカリキュラム・マネジメントのあり方も異なることから、どの方法が最適であるとは断定できないが、今回示したカリキュラム・デザインとその評価方法が、学校現場の実践に少しでも役立ち、カリキュラム・マネジメントがより充実したものとなるよう願っている。

【引用・参考文献】

天野正輝 (2005) カリキュラムと教育評価の探究 田村学 (2019)「深い学び」を実現する カリキュラム・ マネジメント

常盤豊 (2021) 学校評価の効果的な活用方策に関する 一考察

対話型OJTの機能を生かした校内研修体制の在り方

~道徳科デザインシート、短時間研修の定例化等を通して~

旭市立干潟小学校 校長 加 藤 由美子

I 問題の所在

「考え、議論する道徳」を掲げ、「特別の教科 道徳」 (以下道徳科)が施行され、小学校では6年目を迎える。小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編の第4章指導計画の作成と内容の取扱い 2 道徳科の特質を生かした学習指導の展開には、次のように示されている。「道徳科の指導においては、(中略)道徳性を養うという特質を十分考慮し、それに応じた学習指導過程や指導方法を工夫することが大切である。それとともに、児童が自らのよさや成長を実感できるように工夫することが求められる。」教師は児童の道徳性を養うことを目標に指導方法を工夫し深い学びを実現しなくてはならない。

教科化になった当初は、質的転換を目指し、各校がさまざまな研修を行い、評価の理解や指導方法の工夫を取り入れる等、道徳科への関心は高かった。しかし、それに歯止めをかけるかのように COVID-19 の流行や1人1台端末の導入により、対話の機会の減少や、情報機器の活用方法への関心が広がり、考え、議論する道徳の実現に滞りをみせている現状がある。

更に、新規採用職員は増え、教職員の若年齢化は急速に進んおり、若手育成や指導力の向上が喫緊の課題となっている。

令和4年度の本校の職員の経験年数は以下の通りである。(管理職、養護教諭、事務職員は除く。講師含む。)

表1 本校職員の教員経験年数(人)

教職経験年数	人数(人)	割合 (%)
$0 \sim 5$	5	3 3
$6 \sim 1.0$	2	13
11~15	1	7
16~20	4	2 7
21~	3	2 0

表1からも分かる通り、約半数が教職経験10年未満である。よってここで、立ち戻り、教職員全体で校内研修の在り方を考えていく必要があると考えた。

また、教職員の心身保持のため、働き方改革の推進 も挙げられている。そのため、全体研修時間の確保や、 学年間や部会等で行う教材研究の時間の確保が難しい 現状もある。 そこで、教職員の負担軽減を前提とし、対話を軸と した 0JT の機能(対話型 0JT)を生かした研修体制の 見直しを図ることとした。若年経験者職員を中心とし た全教職員の指導力向上、そして、道徳科の授業の充 実を目指し本主題を設定した。

Ⅱ 研究の目的と方法

(1)研究の目的

0JT の機能を生かした校内研修を対話中心に行い、 継続、定例化し、道徳科を中心とした教職員の指導力 向上を目指す。

(2) 研究対象と実践時期

研究対象 A 小学校教職員 15 名 A 小学校児童 246 名

実践期間 2022年4月~2023年2月

(3)研究の方法

- ① 道徳科の授業作りにおける課題点・実態調査
- ② 校内研修体制と取り組み
- ③ 実践の分析・考察

Ⅲ 研究の内容

(1) 道徳科の授業づくりにおける課題点・実態調査「令和3年度道徳教教育実施状況調査」(以下「道徳教育調査」)では、「【設問6】道徳科の授業を実施するうえでの課題」として、過半数の学校が「議論して考えを深めるための指導」や「多面的・多角的に考えるための指導」、「自分との関わりで深めるための指導」に課題を感じている。これらは、道徳科の目標としている根本の部分である。更に、注目したいのが、「教材の吟味や授業構想のための時間の確保」である。研修の時間が確保できない実情が伺える。

また、「【設問8】道徳教育の校内研修実施回数」を 見ると、小学校、中学校共に、9割以上の学校が、令 和3年度において1回以上実施しているという現状が ある。各校が教科化に伴い、道徳科の研修を行ってい る。しかし、その回数を見ると、1回実施の学校が約 半数を占める。また、「【設問9】校内研修で重点を置 いていること」では、「道徳科の指導」、「道徳科におけ る評価」についての回答が多かった。このことから、 1度の研修で行う内容には限りがあり、十分な時間確保ができていないことや、研修を行っても、指導方法や評価についての表面的理解にとどまり、考え、議論する道徳が実現できているとは言い難い実情がわかる。

令和4年度4月に実施した本校の職員アンケートからも同様のことがわかる(図1)。道4徳科の1時間の流れを構想することについて「よくできる」と答えた職員は0人であった。「できる」と答えた職員は4人であり、多くの職員は道徳科の授業構想に課題を感じていることがわかる。

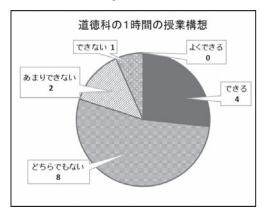


図1 道徳科の1時間の授業構想 N=15 以上のことを踏まえ、次のような実践を行った。 本研究の構想を以下に示す(図2)。

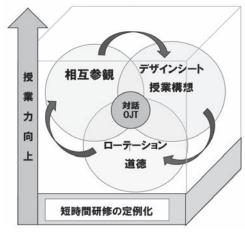


図2 本研究の全体構想

学年ごとに、話しやすい環境のもと、授業づくりを 行う。短時間で繰り返し行うことで定例化され、研修 機会の確保と共に授業力向上が期待できる。

(2) 校内研修体制と取り組み

①道徳授業デザインシート (以下デザインシート) による授業作り

授業を構想するにあたり、指導書に示された発問を順に行うだけでは、十分な考え、議論する道徳に繋がらない。しかし、毎回指導案を作成することは時間的

にも難しい。また、それぞれの学級の実態に応じ、教師が明確なねらいをもち実践することが望まれる。その際、授業の流れを1枚のシートに記入することで、授業構想を練ることが容易にできる。

本研究では、尾花氏の作成した design sheet をも とにしている。(諸富祥彦、土田雄一、松田憲子編著 考 えるツール&議論するツールでつくる 小学校道徳の 新授業プラン 明治図書 2020) 尾花氏に承諾を得た 上で本校の研究と関連させたシートを新たに作成し活 用した(図3)。このシートは、1時間の流れが書き込 めるようになっている。ねらいを設定した後の発問や 問い返し等、それぞれの枠に書き込めば完成されるよ うになっている。必ずしもすべてを埋める必要はなく、 本時のポイントとなる部分を抑えることを意識して作 成する。また、学習指導要領解説 特別の教科道徳の 第5章道徳科の評価 2 道徳科における評価 (1) 道徳科の評価に関する基本的な考え方の中で、「評価に 当たっては、(中略)一面的な見方から多面的・多角的 な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分 自身との関わりの中で深めているかといった点を 重 視することが重要である。」と示されていることから、 評価の視点のチェックリストも作り、指導と評価の一 体化を図れるようにした。

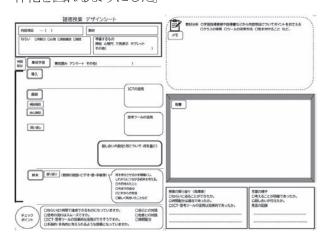


図3 本研究で使用したデザインシート

②ローテーション道徳

「特別の教科道徳〜授業力向上への一歩〜」(2020) の2018、2019に小中学校教員へ行っている調査の中で、「道徳の授業力を高めるために必要なこと」についての回答で一番多かったのは、「達人などの授業参観」であった。次いで「学級経営の充実」、「校内研修を増やす」という意見であった。本書の中で松田は「経験年数が少ない若年経験者職員は、どのように授業したらよいのかイメージがわかず、『発問』 や『終末』への難しさを感じている。このようなニーズに対し、校内での対応を考えたい。」と述べている。本校の実態からも同様のことが考えられる。そこで学期に1度、ローテーション道徳を行った。

これは、1つの教材を同学年の他クラスで行うものである。教材は表2の道徳実践研修計画を学期の初めに設定し、同時期に実施した。本校は多くの学年が2クラスのため、授業者が一つの教材を二度行えることになる。また、単学級の場合は、低・中・高の枠組みでローテーションを行い、実施した。

表2 道徳実践所修計画

			道很	実	践	研	修計画	
7学其	月に 回以上のロー	テー	ンョンì	道徳を	÷!			
(1 組	B教員が I 組、2 組 実践	で同		受業。	別	日に2	2組教員が I 担当	組、2組で同教材で授業) 教材名
		①	月		()		was and the
						時		
	ローテーション	2	月	日) 時		
	道德	①	月	日	()		
学期						時		
		2	月	日) 時		

③相互参観

②で示したローテーション道徳を行う際は、自由に 参観可能とした。ローテーション道徳実施予定表(表 3)を作成、配付しそれぞれの可能な時間に参観した。 管理職を中心に、積極的な参観を呼び掛けていった。

表3 ローテーション道徳一覧表

B	曜日	時間	実施クラス	授業者	教材名
10	火	-1	4-2	岩井	おばあちゃんとの思い出
11	水	5	3-1	高橋	まどガラスと魚
12	*	4	3-2	高橋	まどガラスと魚
12	*	4	4-1	清野	やっぺし
13	金	-1	4-2	清野	やっぺし
17	火	4	1-2	田中	森のゆうびんやさん
18	水	3	1-2	石崎	せつのほし
18	水	5	3-1	宮崎	新聞係
19	*	2	4-1	岩井	おばあちゃんとの思い出
19	*	4	3-2	宮崎	新聞係

④研修の習慣化

研修日は木曜日と設定されている。ここで言う研修は、校内研究のための研修のみならず、ICT活用研修や、モラールアップ研修も行われる。その研修の後、約10分間の道徳科研修を位置づけた。ここでは、学年間で前時の授業についての振り返りや意見交換、次時の道徳科の授業構想をデザインシートを用いて行う。個人で行うのではなく、学年間で行うことで、0JTの機能を十分に生かすことができる。年代、性別、経験年数の違う職員同士が話し合うことで、多様な考えが生まれる。中心発問を各クラスで変えて行った場合の考えの違いや、板書の工夫等、1つの教材から様々

な指導ができることを実感する。この研修は、雑談程度のものとし、約10分を目途に行う。そうすることで、職員への負担も少なく、毎週の研修として定着させる

授業についての振り返りを授業後時間をあけずに行うため年度当初各クラスの道徳科の時間を火曜日、水曜日、木曜日と限定し、時間割を組むことができる

ことができる。また、

		時間割(道徳科)		
	月	火	水	木	金
1		4-2			
2			6-I		
3		2-1		5-I	
4			1-1	3-2 4-1	
5		6-2	1-2 3-1		
6			_		
			4_	研修日	
			10	分研修	

ようにした(図4) **図4 各クラスの道徳科時間割表** ⑤板書記録・資料共有・環境整備

毎時間の授業は、記録しておき、指定のフォルダで整理した。他学年の授業の様子を見ることや、学年の発達段階による思考の違いなども見ることができる。 そして、授業で使った資料やデザインシートも学年ごとに蓄積し、来年度に生かせるようにした。次年度はこれらをもとに、実践を行うことが可能となる。



図5 道徳科板書記録

校内環境の整備として、廊下に道徳科の板書を掲示した。その際、他教科との関連を意識して、実践を行っている様子が分かるよう工夫した。また図書館司書と連携し、全職員で道徳教育の推進を図り、本校の道徳科重点目標を意識できるよう環境を整えた(図6)。



図6 図書室展示本

(3) 実践の分析・考察

取り組み①のデザインシートについて

教職員へデザインシートの聞き取り調査を行った。 結果は表4の通りである。

表4 デザインシートについての調査(N=15)

デザインシートを活用してどうでしたか?

○授業を組み立てるときに考えやすかった。

○授業を行う上で必要な情報を考え、書いておけるのでとても助かった。

また、意識的に思考ツールやICT機器を取り入れた授業構成を考えるようになった。

○価値についてきちんと考えるようになった。

○授業の見通しが立てやすかった。

○略案や指導案のような形式ではないので、時間も短縮して作成することができた。

○今までは児童の発表をただ板書するだけだったがちょっと構造化された板書になり 見やすくなった。

▲腰を据えてじっくり教材研究する時間と労力がなかった。

○授業準備の時間短縮こなった。1 時間の流れを考えやすかった。

○板書計画と発問を一緒に考えることができた。

考えやすささや書きやすさが結果時間短縮につながった。そして、1時間の流れを考える一助となった。

職員アンケートの「1時間の授業構成」(図7)の変化を見ると、「よくできる」、「できる」と答えた職員が、4月は26.7%だったのに対し、2月は53.4%とおよそ2倍に上昇している。また、記述から、デザインシートを活用したことで授業の組み立てやすさを実感したり、板書、発問を同時に考えられたりすることで教材研究の時間短縮にもつながった。今回は全職員にデザインシートを使ってもらったが、授業構成や流し方の理解が深まれば、デザインシートではなく自分の作りやすい形で授業づくりを行ってもよいと考える。

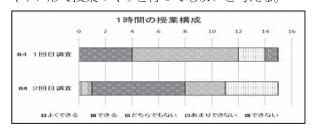


図7 道徳科1時間の授業構想について(N=15) (1回目 4月実施 2回目 2月実施)

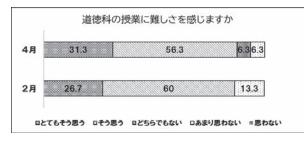


図8 道徳科の授業についての難しさについて(N=15)

「道徳科の授業に難しさを感じますか」という質問では、「とてもそう思う」がやや減少し、「あまり思わない」が増加した。しかし、まだ、難しさを感じている職員は多いということがわかる(図8)。この要因として、職員の道徳科の授業へ対する意識の向上が伺える。教材研究を積み重ねる中で更なる課題が見えてくる。

そのため自己評価も厳しくなりこのような結果を生んだと考えられる。以下は当時の校長のコメントである。

令和4年度 大平時美校長のコメント

自らの授業に関して相互に対話しやすい体制づくりが効果的に働き、経験年数等に左右されず、それぞれが授業づくりの研修を身近に感じ、自分の課題として捉えている姿が大いに見られた。それこそが授業力向上の底上げに直結すると思われる。

取り組み②のローテーション道徳については、図9のような結果となった。表5は職員アンケートの一部である。

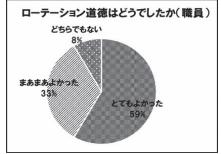


図9 ローテーション道徳についての調査(N=15) 表5 ローテーション道徳についてのコメント(N=15)

- ○同じ教材でも児童が違うと反応が違うことに気付けた。
- ○先輩方の授業をみることで参考にできたから。
- ほかのクラスに行くことによりいろいろな授業のパターンの幅が広がったから。
- ○先生がたがご苦労をかけていると思うが、他学級の様子を苦労しな がらつかむことができ、結局は、自分に返ってくる研修だと思った。
- ○自分以外の先生が行う授業を受けている子どもたちの様子やその 先生が行っている授業を見る機会があるので、勉強になるところや、 1回目で改善したいと思ったところを次のクラスで実践できるので、 授業力アップにつながると思います。
- ○自分の学級を客観的に見ることで、新しい発見やよい意見など余裕をもって見られてよかった。 ○隣のクラスの様子を知れてよい。

児童へのアンケート調査を見ると、ローテーション

道徳に関して9割の児 童が肯定的な回答であった。「色々な考えができる。」「新鮮で楽しい。」という意見があり、 双方にとって良い効果を生んだことが分かる。

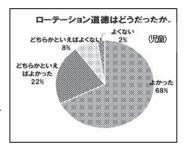


図10 ローテーション道徳についての調査(n=246) 取り組み③の相互参観について

学期に1度ローテーション道徳を実施し相互参観の機会を設けたことで他学年、他クラスの授業を多く見ることができた。若年経験者職員は指導の方法を学ぶことができるよい機会となった。また、ICT機器の活用を得意とする職員は多様な使い方を周囲の職員へ知らせる機会ともなった。また、発問に対し児童の反応などは各クラス異なるため、クラスの雰囲気や実態を

把握することにも役立ったといえる。予定表があった ため、学年間で相談して参観に行けたことや、相互参 観と位置づけられていたため教室へ入りやすかったな どのメリットもあった。多くの職員で参観することで、 評価する際の妥当性、信頼性につながった。

取り組み④の研修の定例化について

木曜日の短時間研修を位置づけ、道徳科の時間割を 研修日近くに設定したことで、自然と授業に関する対 話が生まれるようになった。学年間で、若年経験者職 員へ助言することや逆に新たな視点での意見を聞くこ とで、双方の学びを深めることができた。研修の機会 を意図的に設けることで、話しかけやすさ、聞きやす さは、若年経験者にとって大きな安心材料となった。 これは、コミュニケーション能力の育成にもつながり、 更には、職場環境へも影響を与えた。校長への聞き取 り調査からも、その様子が伺える。

取り組み⑤の板書記録、資料共有、環境整備について 板書記録を蓄積していくことで、児童の振り返りに 有効であるとともに、指導者の振り返りにも活用でき る。また、板書の書き方にも目を向け、児童の思考を 促す構造的な板書を検討することもできる。さらに、 次年度以降その記録や資料をもとに授業を構成するこ ともでき、若年経験経験者職員はそれを参考に授業を 行うこともできる。

児童の道徳科に関する調査について

表6 道徳科に関する調査(n=246)

	全校 n=246	そう	だいたい	あまり思	思わ
	主权 11-240	思う	そう思う	わない	ない
(1)	道徳の時間に自分の考 えをもてたか。	132	96	12	6
2	道徳の時間に友達と話 し合いをしたか。	146	75	17	8
3	友達の考えから新しい 考えを知ることができ たか。	154	71	16	5
4	話し合いで自分の意見 を言えたか。	128	82	24	12

表6は1年間の振り返りの際、児童へ行ったアンケートの一部である。多くの児童は、自分の考えをもとに、話し合いを行い、新たな考えを知ることができたことがわかる。その前提には教師が教材理解や、発問の吟味を行い授業構想を十分に行った結果が表出されているといえる。

IV 研究のまとめ

(1) 成果

教職員の指導力向上を目指し、本研究に取り組んだ。 デザインシートでの授業作りを積み重ねることで、ね らいに迫る道徳科授業の実現へと繋がった。また、ローテーション道徳や相互参観を行い、多くの授業を見ることで、指導方法の工夫や児童理解等多くの視点からの学びがあった。これらの活動の根幹にはいつも『対話』がある。教職員間での対話の時間が自然と増えるとともに、教職員間の関係性が豊かになったことは言うまでもない。「対話」をすることで、他者理解へつながり、教材研究を行う中で多くの議論が交わされた。時には学年を超えて話し合われることもあった。週に1度研修日に短時間で行う研修は、週に1度にとどまらず、交わされていた。それは、職員の道徳科に対する意欲が深まったからだと言えよう。また、主体性も養われ、校内研究会では率先して授業者となる職員も見受けられた。受け身の校内研究から、主体的に行う校内研究へと変化したことは、大きな成果だと言える。

さらに、管理職を含めた、全職員参加型の体制で研修を進めたことが大きな成果を生む要因となった。学校の教育目標を軸に、全職員が同じ方向を見るという意識の確立はとても重要なことであると痛感した。

職員の授業力向上、道徳科への自信は、実際の授業にも反映され、多くの児童が道徳科を好きだと答えている。今後も、若年経験者職員が自信をもって実践できるよう、対話型0JTの継続、推進が望まれる。

(2)課題

児童数の減少により、学級数が減っている。そのため、相互参観や、ローテーション道徳の実施が難しくなる。学年という枠ではなく、低・中・高の枠組で取り組んでいくなど、校内体制の柔軟な対応が不可欠である。また、道徳科の授業に対する難しさは、本研究後も多くの職員が感じている。授業構想においては、学級の実態を考慮し考えていかなければならないものである。難しいと感じる部分を共有し、今後も研修体制をその都度見直し、必要な部分を補えるようにしていく必要がある。

【主な参考文献】

- 1) 文部科学省 道徳教育実施状況調査 (令和3年度実施)
- 2) 小学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳」
- 3) 植田和也 櫻井佳樹監修、植田和也 毛内嘉威、 土田雄一 斎藤嘉則 松田憲子編著「特別の教科 道徳〜授業力向上への一歩〜」(2020 美巧社)
- 4) 考えるツール&議論するツールでつくる 小学校 道徳の新授業プラン (2020 明治図書)

進んで学習する子どもの育成をめざして

~子どもに学習力を! 教師に授業力を! 「館小モデル」での取組~

館山市立館山小学校 校長 神 作 正 孝

1 はじめに

めまぐるしく変化する社会において、たくましく生き抜くためには、単に知識や技術を得るだけではなく、身に付けた知識や技術を活用して進歩させていく必要がある。知識や技術を活用して進歩していくためには、知識や理解の質を高め、資質・能力をはぐくむ「主体的・対話的で深い学び」が大切である。課題を解決していくために必要な思考力・判断力・表現力を全ての子どもに育成していき、身に付けさせるには、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度が欠かせない。学習意欲を向上させるために教師は授業力を磨き、継続して指導いくことで子どもたちの学習意欲を学習習慣にしていき、社会情勢の変化にも対応し、たくましく生きる子どもたちを育てていきたいと考え、本校では校内研修を続けている。

2 本校の概要

本校は学制が公布された翌年の1873年(明治6年)度に創立し、今年度で150周年を迎える。校舎からは館山湾の美しい海や戦国大名「里見氏」の居城跡である館山城が見える。児童数は348人の中規模校である。

本校では、平成14年度から3年間、文部科学省から「学力向上フロンティアスクール」の指定を受け、国語科と算数科を中心に基礎学力の向上に取り組み、平成16年度に公開研究会を実施した。その際「子どもたちが落ち着いた生活を送るためには、学校生活の大部分を占める授業の充実をおいて他ならない。そのためには教師は絶えず授業力の向上をめざし、研究をすすめていこう。」と、翌年の平成17年度から国語科・算数科・特別支援教育を中心に「学力向上実践研究会」として、年2回の公開研究会を継続して開催してきた。

また、令和3年度より、本校独自の教科担任制を導入している。令和2年度は、理科・家庭科・音楽科・ 社会科・外国語活動において、人事等校内事情により 多少の変化はあるものの、専科教員による指導を行ってきた。それに加え、令和3年度から全学年で、①学級担任2名による、国語科・算数科の交換授業、②各学級担任2名による、道徳科の交換授業(隔週)、1、2年生においては、5、6年担任による図画工作科・音楽科の授業(クラスによる)一部教科担任制を取り入れた指導を実施している。

3 子どもの実態について

自主公開研究会を継続してきたことにより、子どもたちが落ち着いて授業に臨むという雰囲気が醸成されてきた。学校生活の大部分の時間を占める授業の充実を通して、子どもたちが安心して、学習活動に取り組める状況を継続的につくりあげてきたことが理由として挙げられる。これらの取組が、子どもたちの問題行動を減少させるという生徒指導上の効果をもたらすとともに、学習に向かう姿勢の改善という成果となって表れていると考えている。

「千葉県標準学力検査」の結果を見ても、県平均と 比較してどの学年も学習意欲は高まっている傾向にあ る。一方で、授業ではまだまだ受け身の様子が見られ たり、友達の発言につなげて意見を話すことや話し合 いの内容の深まりに課題が見られたりする。また、学 力差が大きく、学習課題が早く終わってしまった子ど もへの対応や、理解が難しい子どもへの対応も課題と して挙げられる。これらを踏まえ、子どもにさらに学 習力を身につけさせるためにも、「館小モデル」の取組 を継続して進めていく必要があると思われる。

館小モデルによる取組で研究主題にどこまで迫ることができたかを検証するため、アンケートにより子どもの国語科及び算数科における意識調査結果をおこなっている。また、全国学力学習状況調査や hyper - QU(「子どもたちの学級生活における満足感や学校生活における意欲」や「学級集団の成長の様子や雰囲気」を客観的に分析することができるアンケート。)等、各種調査の結果をもとに現在の館山小学校の子どもの実態を分析している。

4 「館小モデル」について

「館小モデル」とは、「子どもの学習力」と「教師の授業力」を向上させるための手立てを、実践を通して見出し、蓄積・整理し、それらを活用・実践する、本校の教育活動のスタイルをいう。これまでの「館小モデル」での取組は、次の5点に整理することができる。

①授業実践

- ・授業研究・教材研究・公開研究会・学習会
- ②学習支援体制づくり
- ・学力ケアプロジェクト・甲子園・検定プロジェクトなど
- ③学習へ向かう姿勢づくり
- ・日常的な指導(家庭との連携を含めて)の実践
- ④学力形成を支える学習環境の整備
- ・サテライト経営・大型モニター・1人1台パソ コン など

⑤実態調査の実施

- ・事前、事後アンケート・千葉県標準学力検査
- ・全国学力学習状況調査・hyper QUテスト
- ・家庭学習の実施状況調査などの分析

「館小モデル」の維持・改善を図ることで、子どもの学習力、教師の授業力を向上させ、めざす子ども像である「進んで学習する子ども」を育成することができると考える。

5 研究目標

本校の学校教育目標は、「やればできる やさしくなれる やすまずできる」である。この学校教育目標を受け、「進んで学習する子どもを育成するために、教師の授業力を向上させ、子どもの学習力を向上させる実践を行い、『館小モデル』の維持・改善を図る。」という研究目標を掲げ、実践している。

6 実践

(1)授業実践

① 研修や学習会の実施

昨年度までの課題である「子ども同士の発表のつながりや深まり」を踏まえ、今年度は重点として「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を検討していった。特に、今年度は主体的な学びの視点、対話的な学びの視点に重点をあて、「つなげて聞く・つ

なげて話す」対話による深まりのある授業の改善に取り組んでいった。

さらに、「個別最適化の学習」にも視点をあて、指導 の個別化や学習の個性化を図っていった。

年度当初に研究推進委員会を開き今年度の研究の重点について話し合いを行い、研修計画について確認した。その上で国語科、算数科、特別支援教育の各部会でどのような場面で「個別最適化の学習」や「つなげて聞く・つなげて話す」を意識して学習指導していけば良いのか話し合い、授業の進め方について共通理解した。1学期中に各部会で相互授業参観をして、研修の方向性について確認を行った。

夏に実施した外部講師を招いての学習会でも、「個別 最適化の学習」や「つなげて聞く・つなげて話す」こ とを授業のどのような場面で取り入れていけば良いか 教材研究をすすめていった。また、この学習会は近隣 の小中学校の先生方も参加可能とし、多くの先生方が 参加した。

② 公開研究会

令和4度は11月2日(水)と12月2日(金)の2回実施した。年間2回の公開研究会の実施のねらいは、「授業づくりの過程の中で授業改善のモチベーションを維持していくこと」にある。本校研究のサブテーマにも「子どもに学習力を!教師に授業力を!」とあるように、子どもの学習力を向上させるには、「教師の授業力を上げ、質の高い授業を行う」ことが必須となる。公開研究会を核として、それに向けて日常的に授業力の向上を図ることが、子どもに学習力をつけ、ひいては「進んで学習する子ども」を育成することにつながると考えた。



【第6学年の「雪は新しいエネルギー」の公開授業の様子。】

6年生の国語では、教科書で学んだことを踏まえ、 再生可能エネルギーについて調べたことを新聞にグループでまとめる学習を行った。グループは自分がかき たい再生エネルギーが同じ子ども同士でグループを作 った。話し合いがスムーズに行われるようにグループは3人とした。個別最適化の学習を行うために、新聞の作り方は手書きやパソコンなど、自分たちに合った作成方法が選べるようにした。新聞を3人同時に編集することは困難なため、手書きの子どもには、様々な割り付け(題号・見出し・本文・写真・まとめ等)の用紙を準備した。それぞれの用紙には、罫線があるもの、ないもの、白紙など子どもたちが必要に応じて使用できるようにした。パソコンで作成する子どもにはMicrosoft社のTeamsのアプリ内にある共同編集機能を使ってグループの子どもが同時にそれぞれの分担箇所を編集できるようにした。様々な選択肢を用意しておくことで、子どもたちは意欲的に取り組むことができた。



【第6学年の「比とその利用」の公開授業の様子。】

6年生の算数では、大型モニターに本時の学習課題を映し、視覚的に問題把握をしやすいようにすることで、子どもが前時との違いに気付き、解決すべき問題を見出し、学習問題を立てることができた。課題に一人一人が自分で取り組んだ後、ペアでの相談タイムを行った。相談タイムを取ることで、自分の考えを整理することができ、全体での広げ深めていく場面でも、自信を持って発言をすることができた。話し合い活動を年間通して意図的に行ったことで、友だちの意見と自分の意見の違いや同じところに気付くことができ、友だちの発言への付け足しや同意、修正など多角的、多面的に物事を捉えることができるようになった。



【なかよし4組(知的障害)生活単元の様子。】 特別支援学級のなかよし4組では、子どもたちが実際にスーパーマーケットに行って、1人で買い物をすることができるように、広い教室にスーパーマーケッ

トの会場を擬似的に作り、買い物体験を行った。商品 の位置(野菜コーナー・お肉コーナー等)、レジの位置、 かごの位置等、全て実際のスーパーマーケットの構図 と同じにし、店内 BGM も同様に流した。また、商品 カードも、実際にスーパーマーケットに売ってある物 をそのまま写真で撮り作成した。このような会場を作 ることで、子どもたちはスーパーマーケットでの買い 物をイメージして、買い物体験に取り組むことができ た。単元の最後にスーパーマーケットに行った際には、 子どもたちは、欲しい商品がどこに何が売ってあるか がすぐに分かっていた。また、どこに置いてあるかが 分からない商品があった際には、看板を頼りにして探 すことができていた。さらに、商品カードを使って実 際の値段で買い物の計算を行っていたため、スーパー マーケットに行った際にも計算がスムーズにできてい た。

(2) 学習支援体制

① 学力ケアプロジェクト

算数の計算領域において、定着に時間がかかり、身に付けないと他の学習にも影響が出てしまう内容を、確実に身に付けさせることを目的として、給食準備の時間(10分程度)に各学年の算数ルームにおいて個別支援を行った。当該学年や前学年で学んだ計算練習を繰り返し行うことにより、基礎力の向上に繋がった。

② 学習競技(甲子園・検定プロジェクト)

4年生以上が参加できる学習競技(漢字・計算・地 図については9・10月、短距離走で競うスプリント については10月の各年1回実施。)である。学年の枠 を取り払い、同じ条件で競うため、高校野球になぞら えて「甲子園」と命名した。教師でプロジェクトチー ムを編成し、事前に問題や出題範囲を示し、子どもが 自主的に学習に取り組めるようにしている。参加の意 思は個人の自由であり、保護者の承諾により参加がで きる。また、地図甲子園・漢字甲子園・計算甲子園の 各全問正解の子どもは「博士」とし認定証が送られ る。スプリント甲子園では、男女各1位が「スプリ ント王」「スプリント女王」として記録を校内に掲 示。歴史人物検定・日本地図検定は甲子園と同じ方 法をとり、全問正解の子どもは1級・2問不正解の子 どもは2級とし、認定証が送られる。さらに、歴史人 物検定においては歴史上の人物名を漢字で答える問題 が3問出題され、全問正解に加えてこの漢字の問題に も正解すると特級が認定される。また、1人1台タブ レットが配備され、今後試験やテストがコンピュータ を使った試験方法になっていくことを考え「タイピン グ検定」を令和4年度より実施した。

第26回地図甲子園(15分 50問)(9/8 実施)第35回漢字甲子園(15分100問)(9/22実施)第35回計算甲子園(10分100問)(10/6 実施)第16回スプリント甲子園(予選・決勝)(10/26実施)第11回歴史人物検定(10分50問)(12/8 実施)第5回日本地図検定(10分50問)(12/8 実施)第1回タイピング検定(5分100問)(2/9 実施)

(3) 学習に向かう姿勢づくり

なかよし言葉運動

「なかよし言葉運動」とは、言われた相手が気分を害する言葉や相手を威圧する言葉、自分の意見をはっきり示さない言葉など、言葉による暴力につながる言葉や表現力を低下させる言葉はやめ、「はい・ありがとう・ごめんね・おはよう・さようなら・こんにちは」など、正しい日本語、思いやりのある日本語を使うようにし、よりよい人間関係を構築していこうとするものである。ポスター掲示による啓発や校内の生活の中で機会を見つけての指導だけでなく、毎月1回「なかよし言葉チェック」の日を設け、子どもに日々の自分や周りの言動を振り返らせるとともに、なかよし言葉の大切さを繰り返し指導している。今年度から集約の簡素化を図るため、子どもたちに配付しているタブレット型パソコンから、Microsoft 社の Forms を使用してアンケートを行い調査した。

(4) 学力形成を支える学習環境

サテライト経営

「サテライト経営」とは、教室内での授業から離れ 廊下や特別教室などの意図的な展示や掲示によって、 子どもが自主的に学んでいく仕組みを持つ日常的な 教育活動である。毎年各部会で話し合い、改修や改善 を行っている。

- ・熟語くん ・体の慣用句 ・昔の月の言い方 ・十二支
- ・図書室(ブックリスト)・いろは坂
- ・2とび・5とびの世界 ・パターンブロック
- ・かいだん九九 など

今年度の活動として国語部会では「敬語」関する掲示物を増やした。算数部会では、「10のまとまりの歌」

「いろいろな大きさの円」などの掲示をした。子どもたちの休み時間等の様子を見ていると、掲示物を見たり、実際に操作したりしているので、今度も子どもたちの興味・関心を高められるように環境を整えていきたい。

7 成果

(1) 進んで学習する子どもの育成を目指した館小モデルの日常実践

子どもの学習力と教師の授業力向上を図るため、公 開研究会を核に教師がモチベーションを維持して研修 に取り組んでいる。公開研究会だけでなく、本校の一 貫した授業スタイルや学習規律など研究構想に基づい た実践を積み重ねてきた。今年度の重点として、日常 の授業から主体的・対話的で深い学びの視点を取り入 れ、「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログ ラム(千葉県教育委員会)などを参考に、授業改善を した。その中でも特に、「つなげて聞く・つなげて話す」 対話による深まりのある授業の改善に取り組んだ。そ うすることで、友達の考えを受け止め、共感して聞い たり、自分の考えと比べながら聞いたり、根拠をもっ て自分の思いを伝えたりして話し合うことを通して、 主体的に対話を楽しみ、自分とは異なる意見に気付き、 自分の考えを見直したり、深めたりできると考えたか らである。

日頃から対話による深まりのある授業を意識して実践したり、3人対話やペア対話において、友達の考えと比べながら意見を言うことを条件としたりすることで、「〇〇さんとは違って~。」「△△さんの考えにつけたしで~。」など、友達と自分の意見を比較しながら発言する姿が多くみられるようになった。

6月と12月に国語・算数における意識調査を行った。4点満点中、3.5点を上回る項目が複数あった。「算数の授業が楽しい」「国語の勉強が好き」は、それぞれ3.5点を上回っていることから、それぞれの学習に対して意欲的・肯定的に捉えている子が多いことがわかり、授業実践を日々積み重ねてきた成果だといえる。特に、今年度重点としていた「つなげて聞く・つなげて話す」においては、「友達の答えや考えを、自分やほかの友達の答えや考えと比べながら聞こうとしている」の項目で、6月に3.47点だったものが、12月には0.04点上昇し、3.51点となった。「友達や先生の話をよく聞き、それにつなげて自分の考えを言おうとし

ている」の項目で、6月に3.42点だったものが、0.03 点上昇し、12月には3.45点となっている。

教師がねらいをもって授業を展開することにより、 子どもたちの中にも、友達の考えと自分の考えを比較 して考えようという意識の高まりが表れてきた。今年 度、重点としてきた「つなげて聞く・つなげて話す」 対話による深まりのある授業の改善を教師が意識して 取り組んできたことの成果といえる。

(2) 教科指導の共通理解

新年度当初に研究構想の検討と国語科・算数科の学習の進め方や授業の約束(学習規律)など全校で取り組んでいくことを前年度の公開研究会の実践資料をもとに、各教科部会主任が全職員に向けて伝えた。そうすることで、全職員で共通理解をし、理論だけでなく、実践を通した理解をすることができた。

また、1学期に同じ部会内で授業を参観し合った。 参観し合うことで、言葉だけでは共通理解しきれていなかった、細かい学習規律や学校のルールを確認することができた。年間を通して積み重ねてきた指導による効果が、子どもたちの姿として表れ、次年度指導者が替わってもスムーズに学習を進めて行くことができ、学力の向上にもつながっていくと思われる。

(3) 学習競技

多様な分野で、活躍できる子どもを取り上げることができた。練習問題を持ち帰り、自主学習として練習したり、ホームページに公開した問題を繰り練習したりするなど、子どもたちが自主的に練習し、取り組んでいる様子が見られた。

(4) ICT 機器の活用

令和2年度から、教師だけでなく、子どもたちにも 1人1台タブレット型パソコンが配備された。やむを 得ない理由で急に欠席することになっても、家庭から リモートで授業に参加できるようにしたり、ラインズ e ライブラリを活用して家庭学習を行ったりするため に、毎日カバンに入れて持ち帰るようにした。また、 学校でもいつでもすぐに使用できるよう、手提げを各 家庭に用意してもらい、それにパソコンを入れて机の 脇にさげた。国語科における書く領域の下書きの作成、 算数科における学習素材の提示、英語科における単語 や文章の英訳など、教科に縛られず広い範囲で活用で きた。さらに、3、4学年においてのローマ字入力、5学年においてのプレゼンテーション資料の作成、6学年においての表計算ソフトを使ったプログラミング学習、というように総合的な学習の時間の年間指導計画に位置づけることで、小学校卒業までに、パソコンに関する基礎技能を系統的に学べるようにした。今年度からは、本校独自のタイピング検定も導入することもできた。意図的にパソコンを使って学習する機会を設けることで、今後学力テスト等がCBT化した時に円滑に移行できるようにした。

8 課題

1人1台タブレット型パソコンが導入されたことにより、授業内でパソコンが活用されることが多くなったが、教師が有効的に使えるように、使用に慣れていくことには課題がある。また、「タブレット活用ルール」や「私とタブレット10の約束」を制定して、使用上のルールを子どもや保護者に周知したが、徹底しきれない部分もあった。正しく安全に使用するために、今後も定期的に確認して、ルールを守る意識をもたせる必要がある。

教科担任制を導入したことにより、学習規律は統一することができたが、宿題の出し方やドリルの扱いについて、共通理解しきれず、教師も子どもも戸惑うことがあった。学年間でコミュニケーションをとり、より質の高い授業を子どもたちに提供し、戸惑うことなく学習に向かえるようにしていく必要がある。

9 おわりに

本校が公開研究会を続けて18年目を迎え第34回・35回の公開研究会を行うことができた。自主公開研究会を継続して実施してきた目的の一つに、教師自身の「授業づくりの過程で授業改善のモチベーションを維持していくこと」がある。サブテーマに「子どもに学習力を! 教師に授業力を!」とあるように、子どもの学習力を向上させるためには、我々自身が常に向上心をもつことが大切であり、「教師の授業力を向上し、質の高い授業を行う」ことが、私たちのめざす子ども像の具現化には欠かせないものである。

これからも、変えるべきところは変え、変えてはならないものはしっかりと抑え、「館小モデル」の維持改善を行っていき、研究主題に迫ることができるような研修を行っていきたい。

学校教育活動全体でおこなう「自ら考える人権教育 |

~ 「多様性を認め合える穏やかな教育環境づくり」を目指して~

市川市立第四中学校 校長 新 部 操

1 はじめに

本校は、昭和22年5月に開校し、中山法華経寺を 学区に抱える古くからの住宅地で、歴史深く穏やかな 雰囲気の教育環境にある。明るく素直な生徒が多く、 何事にも真面目に取り組むが、自己肯定感が低く自ら 表現することが苦手な生徒が多くみられる。教職員に ついては、今年度、臨任講師5名が全て20代前半、 10年未満経験者も8名と全体の約4割をしめ、非常 に若い集団となってきている。若く情熱があり、学校 に活気がある反面、学習指導や生徒指導面において、 経験不足により生じる課題も抱えている。

一方、新型コロナウイルス感染症が世界的に拡大したこの3年半の間、子どもたちは、社会から誹謗中傷やいじめ、差別などの人間関係の脆弱さを学び、さらに今、戦争により多くの人が亡くなっている様子を目の当たりにしている。

また、大切な成長期にマスクにより表情が見えない、 歓喜の声など心から自然と発せられる声も躊躇しなけ ればならない状況が続き、集団活動に大きな制限が強 いられてきた子どもたちへの将来的な影響も危惧され ている。お互いを尊重し、多様性を認め合えるこれか らの世の中を創造するには、まずは、子どもたちを取 り巻く教育環境が「人権を尊重し、また、尊重される」 場である必要がある。その中で未来を創る子どもたち の人権意識の涵養など、学校の担う役割と学校への期 待は、大きいと考える。本校は、平成30年度から「人 権教育」の推進に努めてきた。昨年度は、文部科学省 及び千葉県教育委員会から人権教育研究校の指定を受 けながら、学校教育目標のテーマである「多様性を認 め合える穏やかな教育環境づくり」の具現化に向け教 職員及び生徒の人権意識の涵養に学校組織全体で取り 組んだ。今回は、これまでの具体的な実践と成果をま とめた。

2 具体的な実践

【教職員の取り組み】

生徒の人権意識の高揚を図るには、教師自らが生徒

の人格を尊重し敬意をもって接しなければならない。

(1)「さん」付け宣言

昨年度の初め、全校生徒の前で「今年から先生たちは、授業中皆さんを『さん』付けで呼びます。」と宣言し、下記の3点を全職員で意識することに努めている。 ①「君」「さん」による性的マイノリティをなくすこと。 ②日常と授業にメリハリを付けること。

③教えるプロとして、学習者をリスペクトすること。

(2) 教職員の人権チェック

生徒の人権意識向上のためには、まず指導者である 教員自らの人権意識を高めていかねばならない。かつ ては高圧的な指導が当たり前な時代もあった。けれど も教員も生徒も同じ人間として、人権の価値は等しい のだということを教員がまずは理解しなければならな い。それができていないがゆえに、生徒を見下した発 言、体罰、暴言が起こるのだと感じている。生徒が間 違った行為をしてしまったとき、感情的に怒るのでは なく、生徒の成長を願う指導ができる教員、生徒の人 権を大切にすることができる教員の育成を目指した。 そして、教員の人権意識向上のため、教員版人権チェ ックを月に一度行い、その分析結果から、「今月は生徒 の呼び方を意識する」「今月は生徒に間違いを気づかせ る」「今月は生徒を怒鳴らない」等の重点目標を掲げ意 識するようにした。教師自らが振り返ることにより体 罰などの不祥事の防止にも繋がると考える。

教職員版人権チェック

<質問項目>

- 1(授業中)生徒の氏名を呼ぶときに、呼び捨てにしている。(さん付けしていない)
- 2 何か事があったときに『正直に出てきて』と言っているの に、正直に出てきたらまず叱ってしまう。
- 3 ある生徒を指導する際、全体の前で大声で怒鳴りつける ことがある。
 - (HSPの子たちは、自分のこととしてとらえがちです。無関係なのに自分が叱られているよう感じてしまいます。 不登校の原因にも)
- 4 生徒指導する際こ、『叱る』のではなく、生徒の言動にムカ ついて『怒って』しまう。※叱る→相手の成長を願うもの。 大きな声ではない。教員はカッカしていない状態。 ※怒る→自分の感情で怒鳴る。カッカしている状態

- 5 職員室で、生徒の悪口や、生徒をネタにした笑い話を言ってしまうことがある。
- 6 職員同士の会話の中で、生徒のことを、『やつ』『やつら』 『こいつ』『こいつら』などと言ってしまう
- 7 寝ている生徒がいた際こ、起こさずにほっておくことが ある。
- 8 生徒の体に触れることに抵抗がない。(男女関係なく)
- 9 生徒と話(相談事や生徒指導)をする際に、ドアを閉めて 二人きりで話すことがある。
- 10 生徒と個人的にラインやメール、電話などで相談を受けることがある。
- 11 生徒の容姿を誉めることがある。
- 12 身体的特徴を表す差別用語を使うことがある。
- 13(他の生徒の前で)生徒を否定してしまうことがある。 → 『ばっかじゃないの~?』『情けないなぁ』など。
- 14 生徒の良くない行為を指導するときに、『だからお前は ダメなんだ』とか、『そんなやつなんだ』など、生徒の人格 を否定する言葉かけをすることがある。 → 問題がある のは、行為である。
- 15 生徒を指導する際に『おまえ』『おまえら』とか『やつら』 『てめえら』などの言葉を使用することがある。
- 16 生徒がよくないことをした際の指導で、つい自分も言葉を荒らげてしまう。
- 17 クラスの生徒の前で、生徒の個人情報を大声で言うことがある。(例・○○くん、△△高校の願書どうした?のように。)
- 18 授業中、いきなり(突然)大声や大きな音を出すことがある。 →HSPの子は大変驚きます。
- 19『男のくせに』「女の子なんだから」など、性別に対する偏見がある。
- 20 生徒に『こんな問題もわからないの?』と言うことがある。
- 21 生徒指導の際には、生徒に怖い思いをさせることも必要だと思っている。
- 22 自分の車に生徒を乗せることがある。
- 23 生徒に『ありがとう』を言うことが少ない。
- 24 給食当番などで集団活動で、メンバーの一人が何かやらかしたので、罰としてもう一週間延ばすなどの決まりを作っている。(連帯責任を負わせることがある)
- 25 生徒の写真を自分のスマホで撮影することがある。

(3) 授業評価アンケート

生徒による授業アンケートを1学期末の7月と後期 末の2月実施し、教師の指導の工夫改善に努めている。

授業評価アンケート

<質問項目>

- 1. 授業のねらい(めあて)が、毎時間はっきりしている。
- 2. 先生の説明や指示が、明確でわかりやすい。
- 3. 黒板などに、学習内容や学習の流れ、まとめがわかりやすく示されている。
- 4. 自分の意見を発表したり、自分なりに工夫して活動したりする場がある。
- 5. 授業内容や指導方法が工夫されていて、興味が持ちやす く、理解しやすい。
- 6. 私は、この教科の学習内容に満足している。
- 7. 私は、この教科の学習内容を理解できた。
- 8.この授業では、授業中に「さん付け」で呼ばれている。

(4) リスペクトアザース

今年度の研究主題を「主体的に仲間と共に学び、自分の考えを表現できる生徒の育成」~多様な考えを認め、学び高めあえる授業づくり~としている。全ての授業の中に生徒が活動(話し合い、学び合い)する場面を取り入れ、「話し合いのコツ」を提示しながら、他者の意見を尊重すること(リスペクトアザース)を意識させ、互いに認める声かけを積極的に行えるようにすることで、自己肯定感の向上も図っている。



【生徒の取り組み】

生徒自身の人権意識の高揚には、教師からの指導や 投げかけだけでなく、生徒自らが思考し、判断し、活動し、自らの行動を振り返り、改善していくことが重要である。

(1) 人権チェック

「多様性」を認め合い、誰しもが安心して過ごせる 居心地の良い学校を作るために、日々の自分の行動を 振り返り、自ら気づいていくための人権チェックを2 か月毎に行っている。これは、生徒同士の人権問題に なりがちな17の行為について、自分で自分の日常を 振り返り、「○…よかった」「△…すこしあてはまって しまった」「×…あてはまってしまった」の3つで反 省し、△や×になった原因と、今後はどうしていきた いかを考えるものである。他人から言われて直すので はなく、自ら気づいて直すことが重要との考えから、 チェックを行う際には、正直に振り返ることが大切で あると生徒に毎回伝えた。そして、たとえたくさん× がついても叱責せず、生徒自身が失敗に気づいたこと に対して評価し、自らの行動を直す気持ちを持てるよ うに担任がチェックし、コメントを生徒に返している。 さらに、今年度より各クラスでチェック項目を設定す る欄を作成し、クラスで意識向上を図っている。

人権チェック

<質問項目>

- 1 他人の趣味や好きなことを否定したり、バカにする。
- 2 自分より点数が低い人や能力が低いと(自分が)思っている人をバカにする。(例・お前より俺のほうができるんだから~とか、お前点数低すぎ~とか)
- 3 身体的特徴の差別的な言葉を使ってしまう。 (例 ちび、デブなど)
- 4 他人の話で盛り上がり、あざ笑う。 (あざ笑う=馬鹿にして笑う)
- 5 他人が言っていた悪口は本人に伝えるべきだと思う。 (つげ口と言います)
- 6 授業中に人の意見を冷かしたり、私語をしたりしている。 (授業妨害になります。これは先生、生徒両方に対する人権侵害です)
- 7掃除などの当番活動をさぼる。 (他人が大変になっている)
- 8キモイ、ウザイ、死ね、消えろなどの言葉、暴言を言ってしまう。
- 9 偏見の目で人を見ることがあったり、男のくせに、女のくせになどの言葉を使う。
- 10 ズボンおろし、他人の物を隠す、などの悪質ないたずら をする
- 11 他人が嫌がることをし続ける。 (ちょっかい、からかいなど)(相手が、いやそうな表情を しているのに続けるのは、、、)
- 12他人の過去の失敗をいつまでもいじったり、責任を過度に追及してしまう。
- 13 SNSやネット上に、他人の悪口や陰口(誹謗中傷)、うその情報を書き込んだ。
- 14 他人の秘密を人に話さずにはいられない。

15

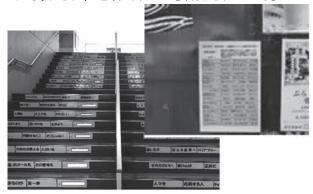
16 ※ クラスごとにチェック項目を考えましょう!17

(2) 四中ギネスコーナー(年間継続)

生徒のコンクール等の表彰や、部活動の記録、さまざまな特技などの優れた記録などを掲示した。この中には、生徒全員が年間を通じて取り組む時事問題バトルの結果や、ルービックキューブの早揃えの記録、円周率の暗記、タイピング選手権などもある。ギネスへの挑戦の機会は、生徒集会に設定し、全校生徒が承認している。

(3) 人権標語コンクール

12月の人権週間に合わせ全校で取組を開始した。 日本にある様々な人権課題に対して、法務省の資料を 使用し、全生徒が日本の差別問題の現状について知る 機会を設けた。その後、たくさんある差別問題から一 つを選び、その問題が解決に向かうよう働きかける標 語づくりを行った。また、保護者にも保護者会等で、 生徒と一緒に家庭で標語づくりをしてもらえるよう投 げかけた。作成された標語をコンクール形式で生徒、 保護者、教員による投票を行い、入選作品は校舎内の 階段に掲示するとともに、生徒が自ら依頼して地域の 商店等に掲示をしていただいた。作品は、店先や店舗 内に掲示され、地域の方々にも啓発されている。



<各年度の入賞作品>

(4) イエローリボン運動

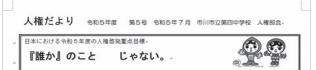
年に2回、生徒会・評議委員中心に、四中からいじめを無くす「イエローリボン運動」を行っている。昨年度2回目からは、生徒自らいじめやアンコンシャスバイアスをテーマとした動画を作成し、それをもとに全生徒縦割りの約90のグループで考えを出し合い、互いのグループから出た意見を発表し合った。異年齢グループの活動は、それぞれの学年の生徒が良い刺激をうけ、相乗効果が期待できる。今年度は、ブロックの小学校にも広げていく予定である。



(5) 人権だよりと朗読

生徒、保護者に対して、人権だより(毎月2回程度)を発行し、人権に関する話題や事実、実際の問題など紹介しつつ、自分ならどう考えるかということを投げかけ続けた。世の中にある様々な人権課題の事実を知ることが、課題解決につながる第一歩である。タイトルには「人権の歴史」「無意識の偏見とは?」「つげ口の悲劇」「交通事故に気をつけよう」「発達障害について考える」「みんなちがってみんないい」などがある。

また、人権講演会や人権の取組についての生徒の意見紹介なども積極的に行い、他者の意見に触れる経験を積ませるようにした。よく言われることであるが、学校からの配付物は読んでほしい生徒ほど読んでいないという。それを補うために、人権だより発行時には給食時の放送で広報委員が朗読をし、耳からも生徒に伝わっていくようにした。



ハリウッド映画から考える多様性

みなさん、映画は好きですか?最近はどんな映画を見ましたか?見るだけで、ドキドキしたり、ハラハラしたり、笑ったり、涙する。そんなたくさんの夢や希望を与えてくれる映画ですが、実は、ハリウッドは過去何十年にもわたって映画制作における人種問題を抱えています。金田一ドショーや土曜ワイド劇場で流れる映画、別えば、「インディージョーンズ」、「バックトゥザフューチャー」「ジュラシックバーク」などの有名作品は、みなさんも一度は、観たことタイトルを聞いたことがあると思います。実は、これらの作品には、いわゆる"白人"

(6) 人権コーナーの設置

時事的、社会的な情報を掲示するコーナーを作り、 新聞記事の切り抜きや、人権啓発資料、人権だより、 人権に関する書籍、ポスターなどを掲示した。

また、図書館前には図書委員による人権啓発コーナーを備えた。



3 成果と課題

(1) 生徒の人権意識調査から(抜粋)

質問1	あなたは人の立場に立って考えてから、行動や言動ができている				
	lacksquare	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
1年全体	4月	27.4	58.5	11	3.1
14主体	1月	37.1	50.3	10.9	0.6
増	咸	9.7	-8.2	-0.1	-2.5
2年全体	4月	38.5	53.3	6.5	1.7
24土14	1月	40.1	47.5	11.7	0.6
増	咸	1.6	-5.8	5.2	-1.1
3年全体	4月	34.4	57.5	8.1	0
3牛土冲	1月	52.3	40.3	5.8	0.6
増	咸	17.9	-17.2	-2.3	0.6
大空	4月	76.9	23.1	0	0
人主	1月	84.6	15.4	0	0
増	増減		-7.7	0	0
学校	4月	34.4	55.7	8.3	1.6
子仪	1月	44.7	45.4	9.3	0.6
増	咸	10.3	-10.3	1	-1

質問1からは、全学年で、「そう思う」の数値が向上している。学校全体でも10ポイントの向上が見られ、相手の立場に立つことができる生徒が増加したことがわかる。特に3年生では、公民としての自覚が見られ、「そう思う」の数値では、全体を大きく上回る17.9ポイントの向上が見られた。ただ、2学年では「どちらかと言えばそう思わない」と答えた生徒が増加し、思春期特有の心の乱れの傾向があると思われる。

質問2	いじめはどんな理由があっても、やってはいけない				
		そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
1年全体	4月	85.3	12.9	0.6	1.2
14主体	1月	83	13.9	2.4	0.6
増	減	-2.3	1	1.8	-0.6
2年全体	4月	87	11.8	0.6	0.6
24-主体	1月	79.8	17.8	1.8	0.6
增	減	-7.2	6	1.2	0
3年全体	4月	83.1	15	0.6	1.3
3年土体	1月	91.6	7.8	0	0.6
增	減	8.5	-7.2	-0.6	-0.7
大空	4月	100	0	0	0
人主	1月	92.3	0	7.7	0
増	増減		0	7.7	0
学校	4月	85.5	12.9	0.6	1
子仪	1月	84.9	12.9	1.6	0.6
增	減	-0.6	0	1	-0.4

質問2からは、学校全体としては、そう思うが-0. 6ポイントと下落した。しかし、3年生は「そう思う」が8.5ポイント向上し、人権課題解決のリーダーとしての意識が高まったと言える。

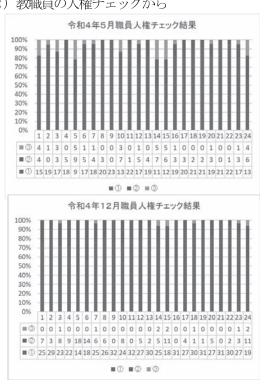
質問5	人権問題は差別している人が悪いので、その人が改心するしか解決方法はない				
		そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
1年全体	4月	42.8	27.1	13.8	16.3
14土本	1月	29	38.3	20.4	12.3
増;	減	-13.8	11.2	6.6	-4
2年全体	4月	36.7	37.9	17.2	8.3
24主体	1月	26.7	42.2	24.9	6.2
増	減	-10	4.3	7.7	-2.1
3年全体	4月	24.4	39.4	27.5	8.7
3年主体	1月	22.2	23.5	15.7	38.6
増	減	-2.2	-15.9	-11.8	29.9
大空	4月	61.5	7.7	15.4	15.4
人至	1月	30.8	15.4	0	53.8
増	増減		7.7	-15.4	38.4
学校	4月	35.3	34.1	19.4	11.2
子攸	1月	26.2	34.4	19.8	19.6
増	减	-9.1	0.3	0.4	8.4

質問5は、差別問題を他人事と捉えていないかを測る 質問として設定した。その結果は、すべての学年で、 「そう思わない」方の数値が向上し、狙いが達成でき たと感じる。特に3年生では、4月には「そう思わな い」という数値が8.7ポイントに対し、2月には3 8.6ポイントと29.9ポイントの向上が見られ、 人権課題解決のリーダーとしての自覚が育っていると 考えられる。

質問7	私は人権について、いつも意識して行動できている				
		そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
1年全体	4月	19.5	57.9	17.1	5.5
14土14	1月	24.4	54.9	18.3	0.2
増	減	4.9	-3	1.2	-5.3
2年全体	4月	24.3	57.4	13	5.3
24土体	1月	20.4	58.6	17.9	3.1
増	減	-3.9	1.2	4.9	-2.2
3年全体	4月	17.5	65	15	2.5
3牛土体	1月	36.4	54.5	7.2	1.9
増	減	18.9	-10.5	-7.8	-0.6
大空	4月	75	25	0	0
八王	1月	61.5	15.4	23.1	0
增	減	-13.5	-9.6	23.1	0
学校	4月	21.6	59.4	14.6	4.4
子校	1月	27.8	55	14.8	2.4
増	減	6.2	-4.4	0.2	-2

質問7は日ごろの人権意識について振り返るものであ る。2学年では多少数値が減少した部分があるが、学 校全体としては、「そう思う」と答えた生徒が6.2ポ イント増加した。特に3学年では、18.9ポイント の増加が見られた。この他、人権課題について知識が 増えたことで、人権標語コンクールでは差別問題につ いて深く考えた作品が例年以上に多かった。また、知 らないことも差別につながるという意識を持てる生徒 も増加した。人権チェックその他の生徒の反省欄から は、自分の行動を振り返り、今後よりよく生きていこ うとする記述が多くみられるようになった。また、他 人の問題のある行動について注意しようとしたり、集 団としてよい環境づくりをしようという態度も見られ るようになった。以上の結果から、これら1年間の取 組が生徒の人権意識向上につながったと評価できる。

(2) 教職員の人権チェックから



令和4年5月から令和4年12月の7か月間の教職

員の意識の変容であるが、当初低い数値を示していた 質問1「授業中生徒の指名を呼ぶときに、呼び捨てに している。(さん付けしていない)」質問5「職員室で、 生徒の悪口や生徒をネタにした笑い話を言ってしまう ことがある。生徒のことを、『やつ』『やつら』『こいつ』 『こいつら』などと言ってしまう。」質問10「生徒の 容姿を誉めることがある。」質問14「生徒指導をする 際に『おまえ』『おまえら』とか『やつら』『てめえら』 などの言葉を使用することがある。」質問15「生徒が よくないことをした際の指導で、つい自分も言葉を荒 げてしまう。」において、かなりの変容が見られた。 これらの結果からも学校全体で人権教育を推進し、教 職員自身も振り返りを行うことにより、教職員の意識 改革になり、ひいては、教職員による不祥事防止につ ながると考える。

(3) 保護者の評価から

年2回実施している学校評価アンケートの「お子さん は、多様性を認め合う気持ちが育っている」について は、肯定的数値が令和4年6月85.5%から令和5 年6月90.6%と5.1ポイントの増加、「学校の教 職員は、生徒一人一人を尊重し、大切にしている。」に ついては、77.5%から77.8%と0.3ポイン トの増加が見られ、保護者の目からも生徒や教職員の 意識の変容が見て取れる。

4 おわりに

令和4年度は、お互いを尊重しあい、多様性を認め 合える社会(学校、地域、世の中)の担い手となる生 徒の育成に取り組んだ一年であった。毎月の人権チェ ックや人権だよりでは、自分の言動を振り返ることに より、自分の中の課題に気づいた。2回実施した講演 会では、多様性を認め合えるようになることや自分を 大切にできるようになることをテーマに置いた。全教 科の授業では、他者の意見を尊重する態度の育成を図 った。生徒会による活動では、制服の見直し検討から 変更に至り、現在は、校則の見直し検討に着手し学校 内の人権課題を自分たちでどうしていったらよいのか、 自主的に取り組んでいる。また、生徒だけではなく職 員も自らの人権意識の向上に取り組み、生徒をリスペ クトし、大切にする姿勢がとれるようになり生徒との 関係が穏やかになってきた。今後もこれらの取組を組 織として継続しつつ、本校から家庭・地域に発信し協 働を図りながら、子供たちにとって多様性を認め合え る穏やかな教育環境づくりを目指していく。

「考え、議論する道徳」の実現に向けた道徳科の研究

~生徒が主体的に取り組もうとする授業の充実を目指して~

御宿町立御宿中学校 校長 吉 田 誠

I はじめに

本校は海や山などの自然に囲まれた環境にある小規模校である。学校教育目標は、「豊かな心と確かな知性をそなえた、心身ともにたくましい生徒の育成」を掲げ、教育活動を行っている。地域との連携を生かした教育活動も行われている。特に、「命の海洋教育」と銘打って行われる保健体育科におけるライフセービングの授業や、道徳科での「海と生命尊重の関連」を共通のテーマにした授業は本校の特徴と言えるだろう。

豊かな心と確かな知性を備えた生徒を育成するためには、様々な場面での人との関わりが大切である。互いの良さを認め合う思いやりのある人間関係づくりがなされた学習集団の中で、生徒が学ぶ楽しさを感じ、自ら学ぶ態度が養われると思われる。そして、これらの取組が学校教育目標の具現化へとつながるのではないかと思われる。

本校では、令和3年度より、千葉県教育委員会から「特色ある道徳教育推進校」の指定を受け、本校の道徳教育充実のための好機と捉え、道徳科の授業の改善を中心に全校体制で実践を行っている。

Ⅱ 研究の概要

1 生徒の実態

本校の生徒は、明るく素直な生徒が多い。自分の 役割や与えられた課題に対して、確実に取り組もう とする姿勢や、行事をはじめとして物事に積極的に 取り組み、みんなで協力して行おうとする姿勢が随 所で見られる。特に男女の仲がよいのが特徴的であ り、普段からよく話をしていたり、授業などでのグ ループ活動でも互いにコミュニケーションをとった りしながら活動を進めることができる。

その一方で、小規模校であるがゆえに、狭い範囲での人間関係が続いており、他者のことを「この人はこういった人」と決めつけてしまうことや、「こう考えるのが普通だ」と自分と周りの生徒の違いになかなか気づけない生徒もいる。

令和3年度の「全国学力・学習状況調査」の生徒質問紙からは「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という質問や、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」という質問に対して「当てはまる」、「どちらかというと当てはまる」と肯定的な回答をした生徒が全国平均を上回っており、地域への帰属意識の高さがうかがえる。

また、「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか」という質問に「当てはまる」と回答した生徒の割合は全国平均を約6ポイント上回っている一方で、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」という質問に対しては、「当てはまる」と回答した生徒の割合は全国平均を約4ポイント下回った。

以上のことから,道徳科において,地域への帰属意識の高さを活かしながら,他者との考えの違いを感じながら,自分の考えを深められるような授業の実現を目指し,本研究に取り組んだ。

2研究仮説

- (1)地域に関わる題材を扱うことで,道徳的問題を「自分事」として捉え,主体的に議論することができるだろう。
- (2) 思考ツールを効果的に活用すれば、様々な意見を 引き出すことができ、生徒は多面的・多角的に考 えることができるだろう。

3研究主題

「考え議論する道徳」の実現に向けた道徳科の研究 一生徒が主体的に取り組もうとする

授業の充実を目指して一

4研究内容

- (1)地域性を生かした教科横断的なカリキュラム(「命の海洋教育」)など地域性を生かした授業の実践
- (2) 生徒が道徳的価値について多面的・多角的に考えられるよう、思考ツールを活用した授業の実践

5研究実践

- (1)地域に関わる題材
- ①「命の海洋教育について」

本校で行われている「命の海洋教育」は、400年 前に御宿であった人命救助と交流の歴史やライフセー ビングを中心に構成し、生命の尊さや郷土の良さに気 づき、また、生命を尊重する態度を育み、郷土への誇 りや愛着を持たせられるようにしたいという願いのも と取り組んでいる。

【教育課程への位置づけと年間予定表】

月	実施内容
	道徳:1年「助けられた317の命」
4	2年「大切な命」
4	3年「負けない涙の後誓う」
	総合:1年ふるさと「御宿」に関する活動
5	
6	特活:海岸清掃
	保体:1年「サバイバルスイム基礎の習得」
7	2年「サーフスキルの習得」
'	3年「ライフセービングスキルの習得」
	総合:1年 海と山の子交流会 (海の交流)
8	総合: 2年希望者
0	社会体験学習「ライフセーバー体験」
9	総合:1年「野沢温泉村」に関する学習
	保体:1年「心肺蘇生法の基礎習得」
10	2年「心肺蘇生の理論と実践手技習得」
	3年「AEDを使用した心肺蘇生法」
	総合:1年 野沢への土産づくり
1 1	「御宿のつるし雛」づくり体験
	社会:メキシコからの移民
1 2	
	総合:1年 海と山の子交流会
1	音楽:全学年 日西墨交流の歌
	「あの日を忘れない」
2, 3	

【ライフセーブの授業での様子】



ヒューマンチェーンという川や海などでおぼれている人を救助する方法を体験している。

道徳科においては、毎年4月の授業参観の際に、「命の海洋教育」の一環として、各学年の教材による道徳の授業を展開し、保護者に参観していただいている。

【授業実践例】

1年生「助けられた317の命」

(内容項目:D(19)生命の尊重)

本授業は、「1609年に前フィリピン諸島長官ドン・ロドリゴが任期を終えて、マニラからメキシコに帰還する途中暴風雨に遭い、乗っていたサンフランシスコ号は御宿町の岩和田海岸沖で座礁したが、それを聞きつけた岩和田村民たちにより乗組員373名のうち317名が救助され、手厚く保護された」という史実を題材にしたものである。

(授業後の生徒の感想)

この時代では、ロドリゴたちを助けることがとて も困難な状況にもかかわらず、岩和田の人々は自分 たちの身を削ってでもロドリゴたちを助けた。だか ら、こうして語り継がれているのだと思った。人の ために尽くすことは難しいことだけれど、尽くした 方も、尽くされた方も、そのことは絶対に忘れない し、お互い助け合っていける関係になれるのだと思 った。

(授業を参観した保護者の感想)

助けられた317の命の話は知ってはいましたが、 あらためて聞くと御宿町民との関わりがとてもあり、 すごいことだと思います。一緒に勉強いたしました。 ありがとうございます。道徳の内容をこれからもぜ ひ行ってください。

2年生「大切な命」

(内容項目:D(19)生命尊重)

本授業は、御宿町の海の安全を守る「ライフセーバー」の体験をもとに作られたものである。ライフセーバーの「私」の仕事での喜びや苦悩を通して、命の尊さについて考え、自分の命や他者の命を大切にするためにできることは何かを考えさせる授業である。

(授業後の生徒の感想)

命に関わる仕事に就いている人は、他の人より命について考えることが多い。だから、その人達の話を聞いて納得したし、たくさんのことを学べた。自分も普段から命についてもっと考え、行動していきたいと思った。

(授業を参観した保護者の感想)

生と死について考え、将来どんな仕事に就きたいかを考えさせる良い機会となったと思います。ライフセーバーを例にした良いテーマでした。命について普段考えることはないので、生徒たちの思いを聞けて良かったです。

②地域のことを導入に活かした授業実践例 【授業実践例】

2年生「消防団(光村図書『中学道徳2』)」 (内容項目: C(12)社会参画,公共の精神)

本教材は、地域の消防団に参加する巻出さんへのインタビュー形式で進められる。巻出さんが消防団に参加し始めたときの気持ちと、今も消防団としての活動を続けている理由などを考えることを通して、社会参画について考えさせられる教材である。

本実践では、町の広報誌を活用し、御宿町の消防団 の活動を最初に紹介し、他にも、地域のためにと活動 している方々にはどんな人がいるかを想起させた。



【授業で用いた御宿町広報誌の記事】

地域教材を使うことで、自分たちに身近なこととして、内容を捉え、その授業で扱おうとする道徳的価値に関しても、自分事として捉えている傾向が見られた。 それは、導入で地域の動画や広報誌を使った際も同様で、教科書の他地域の内容であっても、それを自分たちの住む御宿町の状況などと重ね合わせながら、考えることができていた。

(2) 思考ツールを活用した授業実践例

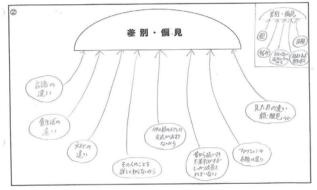
『考え、議論する道徳』の実現に向け、生徒がおのずと、様々な視点から多角的に物事を考えていくことができるような工夫として、本校では思考ツールを活用した実践を積んできた。

【授業実践例】

①「クラゲチャート」を用いての実践

「クラゲチャート」は、「テーマに対する根拠や原因となる考えを整理する思考方法」である。まず、クラゲの頭の部分にテーマを書く。それに対して根拠や原因となるものを足の部分に書いて、「テーマ」と「原因・根拠」との関係を分かりやすく整理できる思考ツールである。

本実践は、「ぼくの物語 あなたの物語」(光村図書『中学道徳3年』)を教材としたものである。思考ツールは主発問として、「『差別・偏見』の根本にあるものは何だろう。」と考えさせたときに用いた。クラゲチャートを用いることで、生徒たちの様々な考えを引き出すことができた。また、グループでの話し合いでは、自分の意見を伝えるだけでなく、例を用いながら説明する様子が見られたり、色ペンを使いながら、友達の意見を自分のクラゲチャートに加えたりする生徒の様子も見られた。



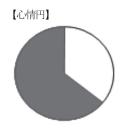
【生徒が実際の授業で書いたクラゲチャート】

②心情円を用いての実践

「心情円」は自分の心情を割合で示すものである。 色の違う2つの円を重ねて、動かしながら、その割合 で心情を表す。例えば、あることに対して「賛成」か 「反対」かを問われたときにこの心情円を使うことで、 「賛成」と「反対」の気持ちの割合を視覚的に表現す ることができる。

本実践は、「命の選択」(光村図書『中学道徳3』)を 教材としたものである。思考ツールは、主発問として 「自分が『父母』の立場だったら、尊厳死を望んだ「祖 父」の考えを尊重できるか」考えさせる際に用いた。 心情円を用いることで、簡単には尊厳死を認めること はできない気持ちと、祖父の気持ちを尊重してあげた い気持ちの複雑な生徒の思いが見られた。友達同士の 話し合いでも、自分と違う立場の友達の意見に真剣に 耳を傾けながら、考えようとする姿が見られた。





【心情円を使って自分の考えを示す生徒の様子】

思考ツールを活用することで、生徒からは肯定的な 意見を多く得ることができた。また、指導する教師の 立場からも肯定的な意見が多く得られた。

③その他の思考ツール

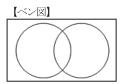
座標軸

縦軸と横軸にそれぞれ基準を設けることで、自分の考えをより明確にできる。

ベン図

相違点と共通を整理するのに 便利なツール。視覚的にもわか りやすく,他教科でも有効。





【生徒アンケートより 令和4年9月実施】

1 思考ツールを用いることで、自分の考えを整理したり表現したりしやすくなりましたか。



② 思考ツールを用いることで、発表やグループでの 話し合いがしやすくなりましたか。



3 思考ツールを用いることで、友だちの意見と自分 の意見とを比べやすくなりましたか。



アンケートの数値を見ると、思考ツールを活用する ことで、自分の考えを整理しやすくなったと答えてい る生徒が9割に上った。思考ツールを活用する前は、発問に対して、自分の考えを文章で書かせることが多かったため、書くことに苦手意識があった生徒は、自分の考えは持っているが、文章にするのに苦労していたところもあったのではないか。それを、思考ツールを活用することで、自分の考えていることを単語や短い表現で表すことができるようになったことで表現しやすくなったのではないかと考える。

それと同時に、思考ツールを活用することで、自分 たちの考えが可視化され、お互いの意見を比較しやす くなったと考えられる。考えが可視化され、違いが明 確になったことで、自然と「どうしてそう考えたの?」、

「それってどういうこと?」などと友達に聞く様子も 増え、話し合いが活発化したように思える。そうなっ たことで、自分にない友達の考えに気づくことにもつ ながっていると考えられる。

指導者の立場からは, 思考ツールを活用することで,

- ・生徒が発問に対して、様々な視点に立って、自然 と考えられるようになった。
- ・生徒がもっている意見の把握がしやすくなり、指 名計画など授業構成にも活かせるようになった。
- ・ワークシートへの記述の時間が短縮され、話し合いの時間が確保できるようになった。

などの意見が多く挙がった。 数18 私の話を聞いてね ネットに投稿しようと思ったのはかせ 不自由な 部分がある人でも、みんない 行動は できる ということを示すだめ。 同じような行行し ぞれの人の個性があるということを含か。 tenote pi この手から『紫顔』をおまれる。という発をには 込められてる?」 「障害をもっている人でも、前向さい捉えて 自分に出生ること(あ良いい)がある。という思 もちろん、Satishipを書で受えて色のによかいみと 知めらことが出来たり、または、世の中に色のかは目 かいて、ではることもロンタジとり達、で良いと見 数材名 ぼくの物語 あなたの物語② 学習テーマ 差別や偏見のない社会にするために大切な トラネぞれ 残じ方はちかうけど、 人種や性別でよれていをはれてる 差別・偏見 (編前) · 管格,

【思考ツールを使ったワークシートの改善例】

【改善前】

- 記述式で考えを書かせていた。
- 考えを書くのに時間がかかる。
- ・書くことを負担に感じる生徒もいた。

【改善後】

- ・内容に合った思考
- 気持ちや考えを端 的に書くことがで きる。
- ・友達の考えを色ペンでメモをする。
- 考えが視覚的にわかりやすい。

本研究を行う以前は、道徳科のワークシートとして、 上のような、発問に対して、文章を書かせる形式のも のが多い傾向にあった。それを、思考ツールを活用し たり、記述欄を絞ったりすることで、生徒の書く負担 を軽減し、その分、話し合いをする時間を十分に確保 できるようになった。可視化されている互いの考えを 共有し、十分な時間をとって話し合いをすることで、 他者のもつ多様な考え方に触れ、道徳的な価値のもつ、 さまざまな側面に触れる機会を増やすことができた。

6 成果と課題

(1)成果

令和4年度の「全国学力・学習状況調査」において、 生徒質問紙の「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか」の質問に対して、「当てはまる」と回答した生徒の割合が7ポイント上昇するとともに、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と回答した生徒が0名であったことは、道徳科の授業改善の成果が表れたと言えるのではないかと考える。

令和4年9月に行った生徒の道徳意識調査からも、 昨年度の自分と比較して、「道徳の授業は、自分にとっ て学ぶ場面がありますか」という質問や「自分の生き 方について考えることができるようになりましたか」 という質問には、過半数の生徒が「とてもそう思う」 と回答しており、他の質問に関しても、肯定的な回答 をしている生徒が多い。

以上のことから、地域とのつながりを大切にして受け継がれてきた「命の海洋教育」を通した取組は、今後も時代の変化に対応しつつ、継続して取り組んでいくことで、郷土愛や豊かな心を育む一端を担うものであることを再確認することができた。

また、思考ツールを有効活用することで、生徒の思考を広げ、多面的・多角的に物事を見ることができるようになるとともに、友達同士やまた教師が、その生徒がどのような考えを持っているのか視覚的にもとらえやすくなり、話し合いの活発化につながったと考えられる。

(2)課題

本研究では、思考ツールの活用について考えてきたが、思考ツールはあくまでも、授業における目標達成のための手段であることを忘れず、生徒の実態とその

教材に適した発問は何であるのか, また, それを考え させるにあたって有効的な思考ツールは何かなど, 今 後も吟味し続け, 授業づくりを行っていきたい。

令和4年度の全国学力学習状況調査において、生徒質問紙の「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」という質問に対して、「当てはまる」と回答した生徒は、前年度より2ポイント下がり、「どちらかといえば、当てはまらない」と回答した生徒が約3ポイント上昇している。道徳科の授業のみではないが、どうして友達が自分とは違う意見を持つのか、傾聴し、理解に努めようとする姿勢を育むための工夫が今後の道徳科の授業の課題であると考える。

【生徒アンケートより 令和4年9月実施】

<昨年の自分と比べて、考えてみましょう>

①友だちの意見を参考に、最終的に自分の考えをもつ ことができるようになりましたか。



②道徳の授業は、自分にとって学ぶ場面がありますか。



③道徳の授業では、自分と登場人物を重ねて考えていますか。



④道徳の授業では、問題意識をもって取り組んでいま すか。



⑤自分の生き方について考えることができるようにな りましたか。



⑥道徳の授業で学んだことを、次の学習や生活に生か そうという思いが強くなりなしたか。



7 参考文献

諸富祥彦(2020). 『中学校道徳サポート BOOKS 考えるツール&議論するツールでつくる中学校道徳の新授業プラン』. 明治図書

自他を認め、共に生きる社会をめざして

~多様な性について、教職員や生徒の理解を深めるための手立てを考える~

東金市立北中学校 養護教諭 片 岡 明 子

I はじめに

近年日本でも、多様な性(LGBTQ などの性的マイノリティ)の話題が多くあげられるようになってきた。

また、テレビや講演会等でLGBTQの人の体験談を聞くことも増え、学校生活でからかわれたり、いじめを経験したりした、つらい思いが語られている。本人のカミングアウトや家族・周囲の理解など、非常に難しい問題を含んでいる。

LGBTQ の人は左利きの人と同じ位の割合で存在していると言われている。しかし、大多数の大人が性的マイノリティについて学ぶ機会がなかったと同じように、ほとんどの教職員がそれを学んでいないため、理解できているのか疑問である。まずは教職員が、多様な性について理解を深めるための学習をすることが必要である。そして、研修で学んだことをもとにした授業を行うことで、生徒たちに自他を認め合う意識が芽生えるであろうと考える。

Ⅱ 本校の概要

東金市立北中学校は、平成10年4月に開校し、令和5年で創立26周年を迎えた新興住宅地の中にある全校124名の小規模校である。

豊かな自然環境に恵まれ、地域から温かい支援を受けている。

北中学校に入学してくる小学校は1校のみで、生徒 たちは、幼い時から多くの時間をともに過ごしてきて いるため、お互いの性格や気心をよく理解している。 そのため、生徒同士は仲がよく、トラブルが少ないの が現状である。

Ⅲ 研究の概要

1 主題設定の理由

北中学校の学校教育目標は、創(つくる)【未来を拓く】である。その中の重点目標の1つに「自他の特徴を受けとめ、相手の立場を思いやりながら、よりよく関わり、力を合わせて課題を解決したり、目標を達成したりしようと努力する北中学校をめざす。」これが主

題設定理由のもとになっている。

学校教育目標

創

【未来を拓く】

〜輝く瞳、笑顔とあいさつ、光る汗〜 重点目標

自他の特徴を受けとめ、相手の立場を 思いやりながら、よりよく関わり、力を 合わせて課題を解決したり、目標を達成 したりしようとする北中学校をめざす。

図 1

そして、最近メディアでLGBTQの話題が多くあげられるようになってきた。しかし、教職員自身が多様な性についての理解が不十分だと感じていること。LGBTQと思われる生徒がいるが、その生徒の支援や、まわりの生徒の対応に戸惑う時があること。過去にLGBTQと思われる生徒がいたが、知識不足のために、支援することができなかったこと。これらのことから、教職員が多様な性について、理解を深めるための学習をすることが必要だと考えた。同様に生徒たちも、授業を通じて、多様な性について理解し、相手を思いやる気持ちをもつことが必要だと考え、本主題を設定した。

2 研究の仮説

- (1) 教職員を対象に、多様な性についての意識調査を行い、その実態を明らかにするとともに、研修を重ねることで、理解が深まるであろう。
- (2) 多様な性についての授業を行うことで、自他を認め合う生徒が育つであろう。

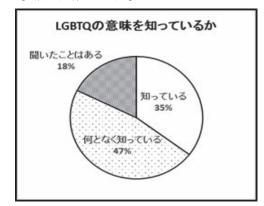
3 仮説(1)の検証

令和4年5月に、校内に「性教育連絡会」という組織を立ち上げた。管理職をはじめ、研究主任、保健主事、養護教諭、保健体育科教諭、各学年代表教諭、栄養教諭など複数の教職員がメンバーになっている。性教育は、組織を立ち上げて、チームで取り組むことによって、新たな気づきを得られ、実践しやすくなる。

(1) 教職員へのアプローチ

図 2

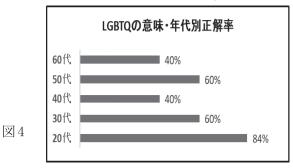
①北中学校の教職員は、多様な性について、どの程度の知識や理解があるのか、令和4年7月に意識調査を行った。調査人数は17人。



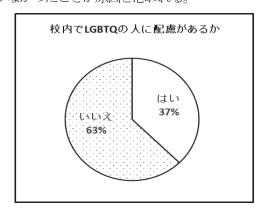
LGBTQの意味の正解率
Q(クエスチョニング)
T(トランスジェンダー)
B(バイセクシャル)
G(ゲイ)
L(レズビアン)

R23

レズビアンとゲイについては、正解率は高かったが、 バイセクシャルやトランスジェンダーは約半数、クエスチョニングは35%と低い結果だった。



LGBTQ の意味をすべて書けた場合を正解とした年代 別の正解率のグラフから、20代の教職員の正解率が高 いことがわかる。30代以上の教職員の正解率が低かっ たのは、大多数がこれまでにLGBTQについて、学ぶ機 会が少なかったことが原因と思われる。



はいの理由

- ・女子の制服にスラックスの選択あり
- ・男女混合出席番号を使用
- ・教職員が意識している

いいえの理由

- ・保健体育の授業が男女別
- ・校則が男女別
- 対応がわからない
- ・LGBTQ の人が身近にいるという意識がない
- 設備が整っていない

②多様な性についての理解を深めるために、令和 4 年7月に校内研修で、トランスジェンダーの方を講師 に招き、講演を聴いた。



図6

講師は、幼少期から身体と心の違和感を覚えていた。 しかし、周囲に理解されないまま年齢を重ね、他者 から壮絶ないじめを受けても、中学校時代には誰にも 相談できなかった。学校教育の在り方の中で、生徒た ちにLGBTQの存在を知ってもらう必要性があるという 内容の話があった。

研修後の教職員の感想

- ・自分自身が性の多様性について、知識・理解が不十分であった。理解することで、救われる生徒が増えるだろう。
- ・何気ない一言が、相手を傷つけるということを改めて、重要なことと捉えた。
- ・偏見のない世の中になるには、幼い頃からの教育が 必要だと思う。
- ・つらい体験やカミングアウトの話を聞いて、涙が止まらなかった。私たちができることは、当たり前を増やしていくことだと感じた。
- ・50~60代の世代の人は、多様な性の受け入れは、難しいと感じた。しかし、若い世代への教育は、必要だと思う。

図 5

研修後の意識調査の結果 調査人数 14 人

生徒が多様な性(LGBTQ などの性的マイノリティ)について学ぶことは必要だと思うか?

そう思う	93%
どちらかといえばそう思う	7%

今後、多様な性(LGBTQ などの性的マイノリティ)について授業をしたいと思うか?

そう思う	64%
どちらかといえばそう思う	29%
どちらかといえばそう思わない	7%

↑理由 授業ができるか自信がないから

(2) 仮説(1)の検証のまとめ

①教職員の意識調査の結果から、多様な性について の意味は知っていると答えていたが、完全には理解していないことがわかった。

②校内でLGBTQの人に配慮がないという回答が約6割にのぼっており、配慮があるという回答を上回った。

③トランスジェンダーの方の講演を聴くことで、研修前よりも、多様な性についての理解が深まったことが、感想から読み取れた。

それとともに、生徒たちが学ぶことは必要だと思う と、すべての教職員が研修後の意識調査で回答している

④多様な性について、授業をしたいという回答がほ とんどであったが、その授業に自信がないという意見 もあり、さらに研修を深めていく必要がある。

4 仮説(2)の検証

(1) 生徒へのアプローチ

①多様な性について、知識と理解を深めるための授業 を行った。

特別活動の時間に、全学年、クラスごとに2回の授業を実施した。

(令和4年12月~5年3月)

1回目の授業のテーマ

「お互いに認め合い、相手を思いやりながら、共に生きることについて考えよう」

授業内容

ある夫婦が、子どもの父親と母親であることには変わりはないが、夫と妻ではなく、これからは人生のパートナーとして、暮らしていくことを公表した。それについて、グループごとに感じたことを話し合った。



図 7

授業後の生徒の感想

1 年生

- ・性別などで、物事を決めていることが多い今の社会が、少しでも変わってほしい。
- ・今まで、あまり考えたことがなかった。もし、困っている人がいたら、話を聞いてあげたい。
- ・小学校の担任の先生が、性別はグラデーションと言っていた意味がわかるようになってきた。

9 年生

- ・今、世の中では「認め合う」という考え方が多いが、 認め合わない考え方をしたのも世の中だから、お互い を認め合うには、まだ大分時間がかかると思う。
- ・最近、多様性という言葉が使われることが多い。実際にその人に会ってみないと、自分がどう感じるのかわからない。そういう意味も含めて、とても難しい授業だった。

2回目の授業のテーマ

「多様な性について、考えよう」

授業内容

人権啓発ショートムービを視聴し、グループごとに 感想を話し合った。

その後、性的マイノリティの説明と、差別や偏見の 気持ちをもたないことについて、授業者が話をした。



図8

授業後の生徒の感想

3年生

- ・「彼氏作らないの?」ふとした瞬間に出る一言が人を 傷つける差別用語になる。小学生のうちから学ぶべき 内容だと思った。
- ・普通という言葉は、本当に難しいなと感じた。LGBT を普通だと思っていないから、この授業が行われるわ けで、触れてはいけないと思うことも差別だし、本当 に難しい問題だと感じた。
- ・こういう授業は、一度きりではなく、少しずつ何度 もやっていけばいい。50分では時間が足りない。
- ・この授業をやらなくてもいい世の中ができてほしい。 この授業は、何歳くらいにやるのがいいのか。

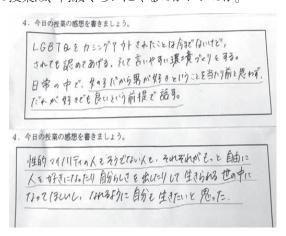


図9 3年生の特別活動のワークシート

授業者の感想

- ・授業を通して感じたことは、自分自身の知識が不足 していることである。もっと学校現場に性についての 知識や理解を深める機会を作ることが必要だと思った。
- ・生徒はLGBTQ を受け入れることに、あまり抵抗が無 いようだった。いろいろな価値観をもつ人がいる世の 中で、どういうふうに生きていくのか、今後の課題で あるように思う。
- ・中学生で初めて学ぶには、遅すぎるのではないかと 感じた。小学校など早い段階から多様な性について扱 っていく必要があると思う。
- ・2 回の授業だけでは、理解を深めることは難しく、 継続的に行っていく必要があると感じた。授業を行っ たことで、生徒のみならず、教職員も学ぶことが多い ものとなった。
- 「○○のような人がいたら、どうしますか?」 という質問をした時に、生徒から「その質問は差別だ と思う。そういう聞き方は、好きじゃない。」と意見が

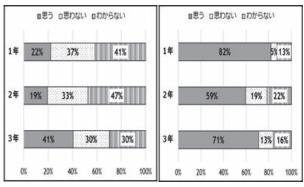
あった。自分自身が固定観念に縛られていることを大 いに反省した。

②多様な性 (LGBT などの性的マイノリティ) について、 生徒の意識調査を授業前後に行い、その結果を比較し た。

授業前の調査 令和4年11月 114名 授業後の調査 令和5年3月 107名

オカマ・ホモ・レズ・オネエは差別用語と思うか。

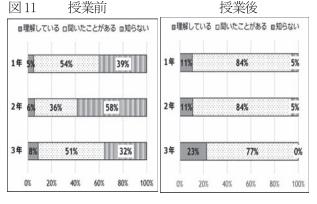
図 10 授業前 授業後



授業後は、差別用語と思うが増加し、思わない・わ からないが減少した。

LGBT の言葉を知っているか?

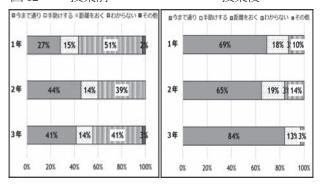
図 11 授業前



授業後は、聞いたことがあるが大幅に増加した。

身近な人から LGBT を打ち明けられたらどうするか?

授業前

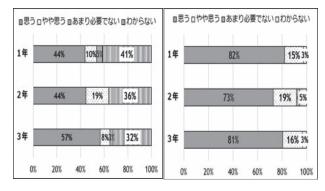


授業後は、今まで通りにつきあうが増加した。特に 3年生が大幅に増加した。

性的マイノリティの人たちが暮らしやすい社会を作るための取り組みは必要だと思うか?

図13 授業前

授業後



授業後は、思うが大幅に増加し、わからないが減少した。

③学校での性教育の取り組みを、保健だよりを通して 保護者に発信した。今後も継続して、発信していきた いと考える。



図 14

(2) 仮説(2)の検証のまとめ

①多様な性について、性別に関係なく、お互いを信頼 し、思いやることが大切だという意識を持ったことが、 授業後の生徒の感想から読み取れた。

②授業後の生徒の意識調査の結果から、オカマ・ホモ・レズ・オネエは差別用語だと理解した生徒が増加した。

また、LGBT の言葉を聞いたことがある生徒も増加した。教職員の意識調査の際に、Q(クエスチョニング)の回答率が低かったため、生徒の質問項目では、Q(クエスチョニング)は除いた。

③保健だよりを通して、学校での性教育の取り組みを 保護者へ発信し、多様な性についての授業の様子を伝 えることができた。

5 成果

- (1) 教職員が研修をしたことで、多様な性について の理解を深めることができた。
- (2)全クラスに同じ内容の授業を行った結果、多様な性についての考え方や受けとめ方は、学年ごとの発達段階によって違ってはいたが、授業後の意識調査や感想から、今まで知らなかったことを理解し、生徒たちに自他を認め合う意識が芽生えてきたことが読み取れた。

6 課題

(1) 性教育は、継続した指導が大切である。

特別活動で2回の授業を行った結果、授業後の生徒の意識調査の結果や感想から、多様な性の考え方については、大きな変容がみられた。

しかし、2回の授業だけでは理解を深めていくのは 難しく、今後も保健体育の授業等で、指導を継続して いきたいと考える。

(2) 授業を行う前に、性的マイノリティと思われる 生徒の支援体制を整えておく必要がある。

性的マイノリティと思われる生徒の中には、ふれないでほしい・ほっといてほしいと思う生徒やわかってほしいと思いう生徒など、気持ちの面で個人差があることが予想される。

多様な性についての教育は、本人が性的違和感に悩む前(小学校入学前)に行うことが望ましく、中学生になってからでは遅いと医療関係者から指導を受けた。 今後は、小学校と連携を図りながら、性教育を進めていきたいと考える。

【引用文献】

みんなに知ってもらいたい性の多様性 レインボー 千葉の会

朝日新聞

教育雑誌 きょうこう vol.42

一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援の推進と体制づくり

〜通常の学級における、学びにくさが原因の計算につまずきがある児童に対し、つまずきの原因を把握し、 個のニーズに合った学び直しを通してつまずきを解消するとともに状況に応じて適切な就学指導に結び付ける取組〜 印西市立本埜小学校

教諭 鳥海 睦美

1 主題設定の理由

令和4年12月に文部科学省が行った「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、知的発達に遅れはないものの「学習面で著しい困難」を示すと担任が回答した割合は6.5%、そのうち「計算する」または「推論する」に「著しい困難」を示す割合は、3.4%という結果であった。

計算に関しての質問では、「簡単な計算が暗算でできない」、「計算をするのにとても時間がかかる」等の回答が担任から出されている。計算のつまずきが、「学習面での著しい困難」の一因となっていることがこの結果からわかる。

本校でも学力に問題があって校内支援委員会で審議対象となる児童は、算数科の遅れを理由とされることが多い。算数科は出来不出来がはっきりするからである。遅れの原因を担任に確認すると、知的に問題があるのか、それとも、通常の学級に在籍する児童に対しての特別な教育的支援である学び直しを行えば、取り戻せるものなのかわからないことが多かった。担任は、指導時間が限られている中で今の学習内容を指導することが精一杯となっており、つまずきの原因について詳細に確認する余裕がないことや指導経験が浅い若手教員はつまずきを解消するために、どのように学び直しをさせたらよいのかわからないことが原因と考えられる。

小学校の算数科の学習は、計算方法の習得が主である。誰もが使える、「計算のつまずき」の原因を把握しつまずきを解消するための指導・支援方法を検討することは、通常の学級で学びにくさを感じている、いわゆるグレーゾーンと呼ばれる児童一人一人の教育的ニーズに応じた個別最適化した指導・支援を行ために欠かせないと考える。

また、学習の遅れの原因を把握し、指導・支援した 詳細な結果を保護者に提示できれば、子どものために どんな環境で学びを継続していくことが最適なのかを 学校と保護者が一緒に考えることができるため適切な 就学指導に結び付けることもできると考える。

上記の理由から今回は、何らかの理由で通常の学習で身に付けるべき基礎的な計算力が足りず、学びにくさを感じている通常学級の児童に対し、つまずきの原因を調べ、学び直しを通してつまずきを解消する特別な教育的支援としての指導・支援の推進とその体制作りはどうあるべきかを主題として設定し検証を行う。

2 研究仮説

仮説1

つまずきの原因把握および指導・支援教材の作成

- (1)「A数と計算」領域に特化した「習得しなければならない計算および計算のパターン」の 理解度を確認するテストを作成すれば、どこ でつまずいているかを発見しやすくなるだろ う。
- (2) 学年ごとに習得すべき四則計算の内容を系統立てて整理した「つまずき発見シート」を作成すれば、一人一人のつまずきに応じた学び直しがしやすくなるだろう。

仮説1-(1)について

- ○各学年で「習得しなければならない計算及び計算パターン」を単元ごとに全て洗い出す。
- ○網羅したパターンで構成した理解度を確認する テストを全学年分作成する。
- ○全校児童に対し学年末に、当該学年のテストを実施し理解度を確認する。
- ○当該学年以前の内容の習熟に問題がありそうな 児童については、何ができていないのかチェック シートに記載しておき保護者へ学び直しを進め る際の指導資料に活用する。

「習得しなければならない計算及び計算パターンを網羅したテスト例(4年生テスト)」

© x395	© <u>x</u> !	04	274 ×608	@ 690×670
0小数の加減さ	† 3E.			
@35.19+7.8		+6.7 Ø16	0.83-8.29	⊕ 4,86 - 3,9
◎ 5 - 0.87	Ø 5.63 -	2.1+13.9 97	-0.55 - 4.45	9 18 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
	1位数でわるわり	7 % E		11,13111
O 4)52	2)71	2)50	@ 819 O	2)84
© 4/8 T	2)80	® 57630	Ø 57734	@ 67809
Ø	® 376 19	(B) 2)1 7 2	Ø 5134T	Ø 4J328

仮説1-(2)について

○四則計算ごとに学習内容の系統を追って問題を配列した「つまずき発見シート」を作成する。学び直しが必要な児童に対し、つまずきの詳細を把握するために系統をさかのぼって問題を解かせる。どの学年のどの内容から理解ができていないかを見つけるのに活用する。

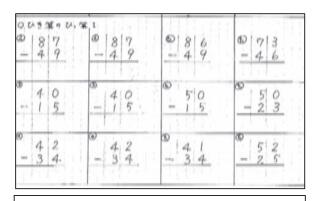
「つまずき発見シート活用例(わり算)」

①何十を 1 位数でわる(暗算) 9 0 ÷ 3	0
②2位数を1位数でわる(暗算) 64÷2	0
何十、何百を1位数でわるわり算 4年	正解〇 不正解×
①基本のわり算あまりなし 52÷4	0
②基本のわり算あまりあり 71÷2	0
③割られる数の末尾0をおろす計算あまりなし 50÷2	×
④割られる数の末尾0をおろす計算あまりあり 90÷8	×
⑤計算途中に数字を書かない 84÷2	×
⑥商に	×
5 年生児童に実施したもの。4 年生の内容か ⑦商に らつまずいていることがわかる。	Х
⑧ 3 位	
001111	

○つまずきに応じた個別の学び直し教材「はなまるワ

ーク」を学び直し担当が作成する。問題はつまずき発 見シートに配列した問題から作成し、指導を行う。

「はなまるワーク」例(ひき算筆算学び直し教材)



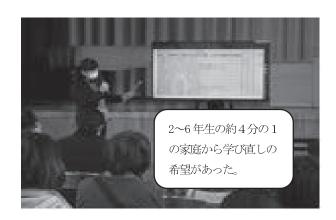
仮説2

指導・支援のための体制作り

- (1) 保護者に対しつまずきの原因及び指導の 方法についてわかりやすく説明できれ ば、学び直しへの理解・協力が得られる だろう。また、個々の指導の状況および 指導結果を学級担任や保護者と共有する 工夫をすれば、組織的・継続的な指導が 可能となるだろう。
- (2) 校内で日課を工夫すれば個別指導の時間を確保できるだろう。

仮説2-(1)について

- ○学び直しの必要性を保護者に理解してもらうために、 全校の保護者が集まる PTA 総会で実施方法について 説明会を行う。
- ○年度末に実施したテスト結果を渡し保護者に、自分 の子供が学び直しが必要かどうかの判断材料とし てもらう。



○組織的・継続的な指導を行うために指導状況を記したシートを作成し、学び直し担当者・担任・保護者が情報共有を行う。

「情報共有シート例(小数の加減の学び直しの指導状況の情報共有)」

	# :	チェック		チェック 指導		コメント	担任より	保護者の方より
小数の加減 3年	ZNO NZN+	001617						
①基本問題 たし算 0,8+0,7	0							
②和が整数(小数点以下の0の処理) 1,4+0,6	0	2	5 月22 日	東耳を書くとかに信を用えて書くことが難しないう でしたので、自旨の後を使って複雑しました。提供一	但69327 五CT第1	(生をなうんかこと! しっしつ		
②報数+小数 2 + 0, 9	0	2	5Я22В	たころ正確に対象できました。小数点以下の00 応信についても、こうして3を向すのかを数明する	村上八十十十十十二	正確に計算していまう!		
④基本問題 ひぎ算 1,8-0,4	0		りからの他にはず、東西アンでして日立てした。 の、東江都にの学覧は対します。(1/22)		1573 (T. ASSAITS	ne charithe able		
⑤映り下がりがあるひき草 1, 7−0, 8	0	2			运线性门工程:			
⑥整数-小数 8-2, 4	0	2	5月22日	Tr. (5/30	哲等(10月(か)。	ないようと注意しながう		
小数の加減計算 4年	正常3 不正解。	000e27						
©##0たLN . 35, 19+7, 84								
		_						

仮説2-(2)について

日課を工夫し、特別支援学級担任が毎日5時間目に指導にあたれるようにする。特別支援学級の児童の交流の時間は交流学級の担任が支援員と協力しながら、適切な支援にあたる。

3 学び直しのイメージ

担任

学年ごと「A数と計算」領域「理解度確認テスト」実施 ←つまずきの発見

\downarrow

学び直し担当

- ○全校の保護者への説明、学び直し希望の確認。
- ○四則計算別学習系統に沿った「つまずき発見シート」 を使ってつまずきの詳細を把握。
- ○指導計画の立案。
- ○個別の学び直し教材「はなまるワーク」の作成。
- ○学び直し「はなまるワーク」の実施。
- ○組織的・継続的指導体制確立のための、学び直しの 状況を担任・保護者と共有。

\downarrow

担任

- ○学級での継続指導。
- ○児童のつまずきを把握し、新しい学習を行う際の支援に生かす。
- ○指導結果を活用した就学相談の実施。

保護者

- ○自分の子どものつまずきの原因把握。
- ○家庭学習の協力。

4 実践

(1) 4年生 A 児に対する実践例

〈A 児のつまずきを把握〉

- ○「習得しなければならない計算及び計算パターン」テ スト(3年生用)の結果からわかったこと。
 - 小数の加減につまずきがある。
 - かけ算につまずきがある。

1.

○四則計算ごと「**つまずき発見シート**」を実施して把握したつまずきの詳細。

「小数の加減」

- ①小数点以下の0の処理が理解できていない。
- ②2+0.9のような計算で、位をそろえて計算することが理解できていない。
- ③8-2.4のような計算で、繰り下がりの処理の仕方が理解できていない。

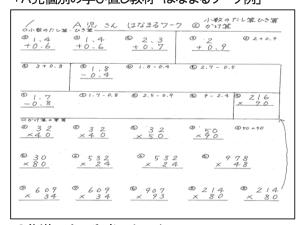
「かけ算」

- ①4・7・8の段の九九を覚えられていない。
- ②かけ算の筆算の手順を十分に理解できていない。

〈学び直しの実施〉

- ○指導はつまずきの状況に合わせて全2回で計画。
- ○発見したつまずきに応じた学び直し教材「はなまるワーク」を作成し実施。

「A児個別の学び直し教材 はなまるワーク例」



○指導の上で留意したこと

「小数の加減」

・小数点以下の末尾の0を消す理由を丁寧に説明するとともに、計算した答えを声に出して読ませるようにした。

「かけ算」

・4、7、8の段のかけ算を忘れがちであることを

担任、保護者に伝え毎日必ず声に出して唱えるように依頼した。

〈指導結果〉

○把握したつまずきは、指導の結果解消した。

〈学級担任・保護者との情報共有〉

- ○情報共有シートを担任、保護者に渡し、指導の状況 を詳細に伝えた。
- ○情報共有シートに記載した担任・保護者への伝達内 容は以下の通りである。
 - ・かけ算九九を継続して言わせること。
 - ・指導内容を忘れていないか確認するために時間を おいて繰り返しテストで確認していくこと。

「活用した情報共有シート(一部抜粋)」

(できるようになったところを、表を使って伝えるとともに、 指導結果を文章で伝える。)

4.004	小工等人					
0	0					
Χ	0	2	5月11日	かける数を10倍、100倍するといくつになるか の練習問題を解いてから筆算をしました。計算	がかが新いから	何回も、たたのれんしかしたね。
Χ	0	2	5月11日	向さんと4.7.0の船のカカの練彩を何口行為	如其中初里力	おふろの中でもいいっぱんりれん習いたねのすらから言える
0	0			約束をしましたので、おうちで聞いてあげてく ださい。今日取り組んだブリントを宿餓に出し	知的作	ようになったので、ママはちちと
0	0			ますので、取り組んで明日提出してください。 来週テストを実施し、百点でしたら学び直しの 学習は終了です。(5/11)	一切かりかり	安心しました。これからもかんばりましょう。
Χ	0	2	5月11日	宿園3回(全て百点)と九九の練習をしっかりと 行いテストに臨みました。百点でしたので合格	性别的.石崎	『島澤先生もの勉強は.
Χ	0	2	5月11日	です。今後の、4年生の学習に自信を持って取り組んでください。(5/17)		いておないかったみたいです。
Χ	0	2	5月11日			もっと、一緒にぬりだかったと、まってました。ありがとうございまして
	THO					

(2) **3年生 B 児に対する実践例**

(B 児のつまずきを把握)

- ○「習得しなければならない計算及び計算パターン」 テスト (2年生用) の結果からわかったこと。
 - ・たし算、ひき算の筆算ができない。
 - かけ算九九につまずきがある。

 \downarrow

○四則計算ごと「つまずき発見シート」を実施して 把握したつまずきの詳細。

「たし算の筆算」

- ①位取りの方法が理解できていない。
- ②筆算の式に正しく直せない。

「ひき算の筆算」

- ①引く数から引かれる数をひいてしまう。
- ②繰り下がりの処理の仕方がわからない。

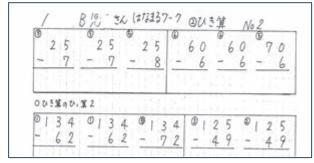
「かけ算」

①6~9の段を覚えていない。

〈学び直しの実施〉

- ○指導はつまずきの状況に合わせて全5回で計画。
- ○発見したつまずきに応じた学び直し教材「はなまるワーク」を作成し実施。

「B児の個別の学び直し教材 はなまるワーク例」



○指導の上で留意したこと

たし算・ひき算の筆算

- ・手順が覚えられず条件が少しでも変わるとわからなくなってしまうため、同じ問題を繰り返し解かせた。 慣れてきたら、少しずつ数字を変えた類似問題の プリントを多数作成して習熟を図った。
- ・内容を忘れないように個別指導で使用したプリント を宿題に出し、家庭でも見てもらうようにした。

「かけ算」

・継続して指導するために、学級でも毎日担任がかけ 算九九を聞くようにした。

〈指導結果〉

○最終的に筆算の手順が身に付けられたことと、 かけ算九九が言えるようになったため指導を終了 した。

〈学級担任・保護者との情報共有〉

- ○情報共有シートを担任、保護者に渡し、指導の状況 を詳細に伝えた。
- ○情報共有シートに記載した担任・保護者への伝達内 容は以下の通りである。
 - ・理解に時間がかかること、また、取りかかりに時間がかかるため指導の際は必ず担任が取組状況を確認すること。
 - ・つまずきやすい場所が明らかになっているため指導の際はその部分に留意して出来栄えを確認すること。
 - ・時間の経過とともに学習したことを忘れてしまう ことが多いため、定期的にテストを行い学び直し

で行った内容を忘れていないか確認すること。

- ○B 児の保護者は就学についての相談を希望していたため、指導の状況を用いてどんなところに学びにくさを感じているか詳細に説明をした。
- ○B 児の保護者からは、学年が進行するに従い学習 が難しくなっていくことから、B 児の学習状況を 見極めながら B 児にとってどのような環境で学ぶ のが適切なのか再度相談をしたいという要望を 受けた。

「活用した情報共有シート(一部抜粋)」 (できるようになったところを、表を使って伝えるとともに、 指導結果を文章で伝える。)

切らさないように支援をしました。複数のブリットを出しますので、答えがさっているか信談 していただき、桐強い間しもしていただけると一句が難いです。実通テストを実施して今後の方 対き決めたいと思います。 (6/23) 「事に議算を行い、全間正解をしました。 荷盤 であるがかず替ちよく頑硬のました。たくさんを でのてあげてください。 なび遊しの学習はいったし		がなけったか。 その部子でかいおっこ ねに
---	--	-----------------------------

5 研究の成果と課題

(1)仮説1の成果○と課題●

- ○「習得しなければならない計算及び計算パターン」 を網羅したテストを作成し、全校児童に対し実施 したことで担任が一人一人の計算領域での理解 度や各単元でのつまずきやすい問題の傾向を把 握しやすくなり、復習したり今年度の指導に生か したりすることができるようになった。
- ○学びの系統に沿った「四則計算ごとのつまずき発見シート」を作成し実施したことで、どの学年のどの段階からつまずいているのかを詳細に把握できるようになった。
- ○把握した児童のつまずきに応じてワークを作成 し学び直しの学習を行うことで、通常学級におけ る特別な支援が必要な児童に対し個別最適化し た支援を行えるようになった。
- ○つまずきが原因で算数科の学習に苦手意識を持っていた児童が、自分のつまずきの原因を理解するとともにできるようになったことで、学習に意欲的に取り組むことができるようになった。
- ●学年が上がれば上がるほど学び直しには時間が かかるため、できる限り早い段階からの対応が必要

である。

- ●学年ごとの学習内容を整理すると中学年で身に付けるべき内容が飛躍的に多くなることがわかる。中学年に対する指導の在り方を学校全体で考える必要がある。
- ●個のつまずきに応じて教材を作るのに時間を 要した。

(2)仮説2の成果○と課題●

- ○つまずきの原因を学校が把握し、つまずきの解 消のための取組方法と実施状況を伝えること で、保護者の学校に対する信頼が高まった。
- ○取組を通して保護者の学習への関心が高まり 協力的な関係が築けるようになった。
- ○指導状況の共有の方法を工夫したことで、担任、 保護者とつまずきの原因を共有しやすくなる とともに、つまずきを解消する方法も共有でき るようになったため、家庭・学校で共通した指 導や支援が行えるようになった。
- ○児童の実態と指導の状況、その結果を詳細に伝えることで、保護者から児童の今後を考えた積極的な就学相談を受けるようになった。
- ○4 月の日課表作成時点で学び直しの時間を設けることができ、混乱なく個別の取組ができた。
- ●一度理解しても習熟が図れない児童に対しては、設定した個別学習の時間以外にも指導をしなければならないことがあった。
- ●行事や日課変更により、担任や支援員との日程 調整が難しくなることがあった。
- ●指導にあたる全教員が、算数の学習の系統についてよく理解し、つまずきに応じた指導スキルを身に付けるなど資質向上に努める必要がある。

生成 A ト を利用した情報モラル・情報リテラシー教育

千葉県立一宮商業高等学校 教諭 小 城 翔 平

I. はじめに

ChatGPTなどの生成AIに関する技術が注目を集めている。Society5.0と呼ばれる社会を生きる私たちは、AI技術の利用を推進しつつ、適切な規制をかけるという矛盾した課題に取り組まなければならない。高等学校における生成AIを利用した教育実践を通して、生成AIを利用することによる教育効果と課題について考察することで、今後の情報教育の発展に貢献したい。

II. 研究背景

Society5.0 は、「サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会(Society)」と定義されており、AI や IoT、ロボットなどの研究、利活用が推進されている。生成AI が一般に利用されるようになるとその有用性と課題が議論されるようになった。AI 関連技術は発展途上であり、多角的な視点での研究が必要となっている。生成AI を利用すると小説や感想文などの文書作成、プログラミング、企業での業務支援などが可能であるとされており、具体的な活用方法が検討されている。しかし、人間が活躍する機会を奪ったり、人間の能力の発展を阻害したりする可能性があるという課題もある。

文部科学省は、令和5年7月4日「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン」を公開した。その中で、「児童生徒の発達段階を十分に考慮して教育活動の目的を達成する観点で効果的か否か、適切に判断する必要がある」ことや「生成 AI への懸念に十分な対策を講じられる学校でパイロット的に取り組むことが適当」と述べている。また、個人情報やプライバシー、情報セキュリティ、著作権などに関する適切な理解と対応が必要であり、これらの学習を踏まえて利用することが求められる。一方、情報活用能力の育成の必要性や生成 AI の校務での活用の可能性にも言及しており、黎明期における生成 AI の教育現場での利用に関する議論が進められている。

III. ChatGPT の概要と特徴

2022 年 11 月 30 日、OpenAI 社が開発した生成 AI 「ChatGPT」のサービスが開始され注目を集めている。ユーザ登録するだけで無料でサービスを利用することができる。2023 年 7 月時点で ChatGPT の Web サイトは日本語化されていないが、ブラウザの翻訳機能を利用すると日本語表記で利用することが可能である。最新モデルの ChatGPT4 は、有料プランだが、アメリカの司法試験や大学院共通試験などで、受験者の中でも上位の成績を収めるほど性能が高くなっている。また、ChatGPTは、MMLUというベンチマークテストにおいて高評価を得ており、英語のみならず、日本語や韓国語など様々な言語に対応できている。



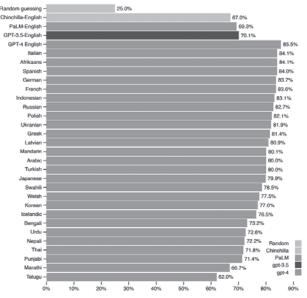


図1 MMLUによるChatGPTの応答精度評価

ChatGPT を利用する際の留意点がある。①意図する回答を得るために的確に質問する必要がある。②回答が必ずしも正しい情報であるとは限らない。③AI が回答した情報の出典を示さない。④2023年7月時点で無料版のChatGPTは、2021年9月までの情報に基づいて回答している。AI の回答を鵜呑みにすることがないよう、情報リテラシー能力の重要性が一層高まっている。

IV. 研究目的

本研究の目的は2点ある。

目的1:生成 AI を利用することのメリット・デメリットを学ばせ、AI 技術を利用することの教育効果を明らかにする。

目的2:生成 AI を適切に活用するための情報モラルを育むための方法、およびその効果を明らかにする。

V. 仮説、および検証方法

研究目的を達成するために2つの仮説を立てた。また、それらを検証する方法について説明する。

仮説1:生成 AI を利用することのメリット・デメリットを考察することで現時点での AI 技術の可能性と 限界を把握し、適切に利用するための情報リテラシー能力が育まれる。

検証方法1:生徒が生成 AI に質問して回答結果を分析し、AI にできること、できないことをレポートにまとめる。また、個人で考察した内容をグループで共有し、意見をまとめる。例えば、「2 進数の数字を 10 進数に変換する方法を説明してください。」とか「2 進数の数字を 10 進数に変換するプログラムを作成してください」といった質問をして基数変換に関する事柄でどこまでのことができるのかを検証するといった質問が想定される。

仮説2:生成 AI の適切な使いを学ぶことで、AI 技術を適切に利用するための情報モラルが育まれる。

検証方法2:生成 AI の適切な利用方法や効果について、個人やグループで考察させ、生成 AI を適切に利用しようとする情報モラルを育む。仮説 1 と同様、個人レポートとグループワークによる教育効果を検証する。

VI. 授業実践

1. 対象・科目

情報処理科2年生(32名)を対象に科目「ソフトウェア活用」の授業で生成AIに関する授業を行った。科目「ソフトウェア活用」は、企業活動におけるソフトウェアの活用方法や情報通信ネットワークに関することを学ぶ科目であり、Society5.0 や AI を活用した社会についての学習内容が含まれている。

2. 実施時期

2022年5月中旬~6月上旬の期間に授業を実施した。 教科書を使った学習や個人レポート課題、グループワーク、発表などを含め、合計10時間授業を実施した。

3. 生成 AI を利用するにあたっての準備

まず、教員自身が ChatGPT を利用してできることや できないこと、生徒に学ばせる事柄などを考察する。 2023 年 4 月時点で ChatGPT に 「2 進数の数値を 10 進数 に変換する方法について教えてください。」と質問した ところ、誤った回答を出力した。しかし、その1週間 後には正しい回答を出力することができた。他にも、 「シーラカンスはどんな味ですか。」と質問したところ、 「海外では食用にされている魚類の一種で、脂が多く、 日本のマグロに近い味わいとされている」といったも っともらしい嘘をついた。ChatGPT は、正しい回答と 誤った回答の両方をすることがあるためそれを判断す る情報リテラシー能力が重要だ。また ChatGPT は、当 時できなかったことが数日後にはできるようになるこ ともあり、驚異的な速度で学習していることがわかる。 技術の進歩を歓迎するとともに人間の能力を上回り仕 事を奪いかねないという危機感もある。

授業で生成 AI に関する取り組みを始めるにあたっては、管理職に授業の狙いや進め方について承諾を得て、生徒や保護者にも授業の目的を伝えたり、サービスの利用を望まない場合は、強制せず別の方法で学習支援にあたることを説明したりした上で取り組みを始めた。通信回線の問題で家庭では生成 AI を利用できない場合は、学校で課題を進めることをサポートするなど、個々の環境に応じた支援が求められる。

4. 生成 AI に関するレポート課題

「生成 AI にできることとできないことに関するレポート課題」に取り組ませた。レポート課題の目的は、生成 AI を活用することの重要性と注意点を体験的に理解させることである。生徒が生成 AI に質問した内容の一部を紹介する。Q(質問)は生徒が AI に聞いた質問であり、A(回答)は、生成 AI からの回答、またはその一部である。

Q1. 湊かなえ著『少女』の読書感想文を書いてください。

A1. 『少女』は、湊かなえさんの特徴的な独特な世界 観と緻密なプロット展開が光る作品でした。物語は、 主人公である少女の目線から綴られており、彼女の内 面の葛藤や成長が描かれています。(以下省略)

生徒は、「小説の内容や結末を述べることなく感想文を書くことができており、著作権を侵害しないように文章を生成できている。一方、学生が読書感想文の課題をAIに代筆させ、文章を書く力が衰えてしまうので

はないか。」という問題を指摘した。

著作権侵害や人間の成長に悪影響を与える懸念を示しており、情報モラルに関する意識が高まっていることが評価できる。

02. 心が辛い時どうしたらいいですか。

A1. A.3 辛い時には、以下のような方法を試してみることが役立つかもしれません。

項目 1. 自分の感情を認める: 自分が辛いと感じていることを受け入れましょう。感情を抑えるのではなく、その感情に対して優しくなりましょう。

(以下、項目7まで続くが省略)

生徒は、「解決策を7つも提示してくれたが精神的に 追い詰められている人に箇条書きで解決策を提示して も問題は解決しないのではないか。人間のカウンセラ 一ならば相手の心情を推測って、その人の心に寄り添 ったケアができるかもしれない。AIには、人間の心に 寄り添って何かをすることは難しい。」と指摘した。

AI は、感情を理解することはできず、感情を理解しているかのようにふるまうだけである。人間にしかできないこととは何かを考え、AI と人間の差別化を図る重要性を学ぶことができている。

32名のレポート課題を添削し、思考力・判断力・表現力、および主体的に学習に取り組む態度について評価を行った。思考力・判断力・表現力を育むために生成 AI の回答から考察したことを適切な文章で表現するという課題は有効である。また、課題に対して興味・関心を持っていればレポートの内容が充実するため、主体的に学習に取り組む態度について評価するためにも有効である。生徒それぞれにレポートのよかった点や改善した方が良い点についてコメントを書いて配布した。指導と評価の一体化の重要性と効果が確認できる取り組みとなった。

5. Microsoft 「White Board」でのグループワーク

生成 AI のレポートに取り組んだあと、グループで意見を集約し発表する活動を行った。グループは、4人1組で8チーム作成した。Microsft365のアプリ「White Board」を使い、ブレーンストーミングや KJ 法などを使って意見を集約し、発表した。すべての生徒にMicrosoft365のアカウントが与えられており、グループウェアを適切に活用する能力の向上を狙い、授業に取り入れた。WhiteBoardは、資料を共同編集する機能に優れており、他のメンバーのマウスカーソルが表示されて誰がどこを編集しているのか共有することがで

きる。また、付箋機能が備わっており、効率的に KJ 法での意見集約ができる。KJ 法以外にも AI に「できること・できないこと」AI を使う「メリット・デメリット」の2軸に分けてポートフォリ形式で意見をまとめたグループもあり、創意工夫が見られた。

グループワーク中は机間指導を行い、リーダーシップを発揮する生徒やフォロワーシップを発揮する生徒、 積極的に WhiteBoard の機能を使って資料を作成する 生徒など、それぞれが主体的に活動する様子を評価した。



図2 Microsoft365 「WhiteBoard」を使う様子

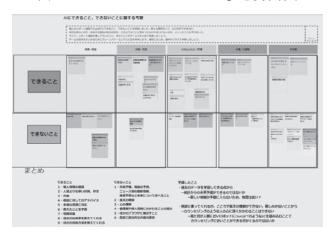


図3 意見をKJ法でまとめた結果



図4 意見をポートフォリオにまとめた結果

グループワーク終了後、パソコン室内のモニタに資料を投影して代表者が発表した。発表では、ChatGPT を利用するメリット・デメリットをわかりやすく伝えようと努めていた。また、ChatGPT の適切・不適切な利用事例を紹介し、倫理観を持って利用するよう伝える生徒もいた。各グループの発表後、生徒からは、「具体的にはChatGPT にどのような質問をしましたか。」とか「ChatGPT を利用するメリット・デメリットが適切にまとめられていてわかりやすい。」などの意見があげられた。個人レポートにより個人の知識、理解が深まった状態でグループワークや発表を行うことで、活発に議論が展開されるという効果が確認できた。

6. 生成 AI の回答の真偽を確認する方法

情報の真偽を確認する能力を育成するためには、バックグラウンドとなる知識を習得することや情報が疑わしいと感じる批判的思考力を獲得する必要がある。 東北大学の松林氏は、「批判的思考力、ファクトチェックの訓練という考え方もあるが、これらは本来非常に高度な能力」であると述べている。また、生成 AI を「使いこなす訓練、教師からの指導が最も重要」であると指摘している。

情報の真偽を確認するためのポイントをまとめる。 ① 情報源を確認する。

ChatGPT に質問した後、「その情報の出典を明らかにしてください。」と質問して、参照URL を提示する場合がある。しかし、大規模言語モデルにより生成された情報で特定のWebサイトを参照しているわけではない回答に対しては、参照元を表示することはできない。ChatGPT に関しては、情報源を確認するのが難しい。②事実と意見の違いを判断する。

「ジョー・バイデンは、米国史上最も偉大な大統領だ。」というのは意見である。意見は、真実も虚偽もない。一方、「ヒラリー・クリントンは、米国史上最も偉大な大統領だ。」というのは、事実ではない。ヒラリー・クリントン氏は、大統領になったことがないからだ。事実には、真実と虚偽がある。このように様々な情報を生徒に提示し、意見と事実を区別させたり、事実のうち真実か虚偽かを判定させるトレーニングを積むことで情報リテラシー能力が育まれる。

③複数の媒体で情報を比較する。

事実を検証する際は、信頼のおける複数のWebサイトを確認したり、新聞や雑誌など複数のメディアの情報を比較することが有効である。WikipediaやSNSは、

誰でも情報発信できるので信頼性が比較的低くなることを教える必要がある。

④ 情報が発信された時期を確認する。

参考にしたWebサイトの更新時期や参考書籍が発刊された時期は、古すぎないか確認する必要がある。なるべく新しい情報に基づいて情報の真偽を判断する必要がある。

⑤ 情報発信者の主観が入っていることを認識する。

Web サイトや書籍は、情報発信者の主観が入っていることを認識する必要がある。例えば、「ChatGPT が世界中で利用されている」という情報を確認するためには、「ChatGPT の利用を推進している国がある」という記事のみならず、「ChatGPT の利用を規制している国がある」という記事も確認して ChatGPT の利用に賛成・反対双方の立場の情報に触れることで、なるべく客観的に情報を判断するようにする。

教育現場には、生成AIを適切に利用するために情報の真偽を確認するトレーニングを積ませ、生徒の情報リテラシー能力の向上を図ることが求められる。

VII. 教育効果の評価

生成 AI を利用することによる教育効果について考察する。

1. 学習に対する影響

生成 AI を適切に活用するためには、どのように質問すれば想定した回答を得ることができるか、「質問する力」が求められる。Chat GPT を利用することで「質問する力」をはじめとした、生成 AI を活用する能力が育まれる。また、生成 AI が回答した結果が正しい情報か、誤った情報かを判断する課題に取り組むことで「批判的思考力」が育まれる。情報リテラシー能力の一部として「質問力」と「批判的思考力」を育む取り組みについてさらに研究を進めることが求められる。

2. 思考力・判断力・表現力や言語能力への影響

生成 AI を利用することで懸念されることを2つ指摘する。1つ目は、「思考力・判断力・表現力への影響」だ。生成 AI に聞けば何でも答えてくれるため、生徒自身が考える前に答えを求めて生成 AI を利用する可能性がある。考えることをやめれば、論理的思考力や忍耐強く考える力が低下する。AI と競争するのではなく、差別化を図るために人間にしかできないことをできるようになることが重要であり、生徒にはその重要性を理解させたうえで学習に取り組ませることが必要だ。

2つ目は、「言語能力」への影響だ。タブレット端末で商品を注文し、ロボットが商品を運んでくる、会計は無人レジでキャッシュレス決済で済ませる、という生活が現実のものになった。人間同士の言語活動の機会が減少すると人と交流する必要性を感じなくなったり、時間や手間などのコストがかからないよう効率重視の行動を選択することが増える。Society5.0の社会は、あくまで人間中心の社会であり、AIは、人間の生活を豊かにするツールである。人間同士のコミュニケーションや言語活動重要である。

VIII. 教育現場での ChatGPT の適切な活用方法

教育現場では、生徒や教員がChatGPT などの生成AI を利用して正しくAI を理解し、利用する方法を学ぶ必要がある。例えば、ChatGPT に体育祭や文化祭など学校行事のパンフレットの項目案を考えさせ、教員がそれを校正することで業務の効率化を図ったり、生徒がテストの記述問題で間違えた回答について、どのように修正するべきかヒントを得たりするといった使い方が考えられる。生成AI を適切に利用できる人とできない人の間には、情報格差(デジタルディバイド)があり、その差が大きく広がっていくことが懸念される。また、アクセシビリティの問題もある。情報通信機器やネットワーク回線の整備状況によって、利用できる生徒とできない生徒がでないよう環境に配慮することも必要である。

ChatGPT は、グラフや図などの形で回答することが 難しいため、人間だからこそ作成できる課題を出すこ とが有効である。また、対面でレポートを書かせたり、 新しいビジネスプランを考えさせる、AI を利用して改 善できると考えられる仕事を考えさせる、など思考 力・判断力・表現力を問う課題であれば ChatGPT に課 題を代筆させることはできないだろう。 生徒の情報モ ラルを育むとともに生成 AI を悪用させないような課 題を出せるようにするという、教員の情報リテラシー 能力の向上が重要である。

IX. 結論

授業実践の結果やこれまでの考察をもとに仮説に対する結論を述べる。

仮説1:生成 AI を利用することのメリット・デメリットを考察することで現時点での AI 技術の可能性と 限界を把握し、適切に利用するための情報リテラシー

能力が育まれる。

結論1:仮説1は支持された。

理由:生徒のレポート、およびグループワークの結果 より、生成 AI にできることとできないことを学習でき たことが確認できた。生成 AI を適切に利用するための 情報リテラシー能力が育まれている。

仮説2:生成 AI の適切な使いを学ぶことで、AI 技術を適切に利用するための情報モラルが育まれる。

結論2:仮説2は支持された。

理由:生徒のレポート課題、およびグループワークの 結果より、生成 AI を適切に活用しようとする態度、お よび不適切な利用をした場合の人間への悪影響を学ん だことが確認できた。

X. おわりに

ChatGPT の最新サービスをデジタル庁が活用する方針を示したり、千葉県庁が業務効率化と県民サービス向上の観点から生成 AI の試行を開始すると表明している。日本は、生成 AI を活用していく方向に舵を切っている。生成 AI は黎明期にあり、活用方法や課題について検討しなければならない点が多い。しかし、教育現場で生成 AI の利用方法を適切に指導することで、IT人材の育成を促進し社会で活躍する人材を育成することにつながる。教育現場における生成 AI をテーマとした研究がさらに発展していくことを期待したい。

参考文献·参考URL

文部科学省 初等中等教育局."初等中等教育段階に おける生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン" (2023) (参照: 2023/07/07)

 $\label{lem:https://www.mext.go.jp/content/20230704-mxt_shuukyo02-000003278_003.pdf$

内閣府."Society 5.0 - 科学技術政策". 内閣府 https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/ (参照: 2023/07/21)

OpenAI." GPT-4 Technical Report" (2023)

https://cdn.openai.com/papers/gpt-4.pdf (参照: 2023/08/02)

松林優一郎. ChatGPT と教育における信頼性. 国立情報政策研究所 (2023)

https://www.nii.ac.jp/event/upload/20230421-05_Matsubayashi.pdf(参照:2023/08/03)

学校に愛着と誇りをもつ児童を育てる

~150周年記念すごろくの作成を通して~

柏市立手賀東小学校 教諭 戸沢 日奈絵

1 はじめに

本校は令和4年度に、150周年を迎えた。150周年記念式典では、保護者や地域の方が300名以上訪れ、昇降口でのプロジェクションマッピング等、本校が一年を通して行ってきた「地域学習」の成果を発表した。

本校の学区は、手賀・片山・布瀬の3地区からな る農業地域である。全校児童はそれぞれの地区に分 かれ、それぞれの農業体験学習に取り組んだ。令和 4年度は手賀地区がとうもろこしを、片山地区が落 花生を、そして布瀬地区がジャンボカボチャを育て た。収穫期には、もぎ取り体験や道の駅での収穫物 販売を児童自ら企画・運営し、また大きく実ったジ ャンボカボチャをコンテストに出品するなど、地域 環境を十分に生かした活動に取り組むことができた。 これらの活動は、畑を貸していただいた方、育て方 や収穫の仕方を教えていただいた方、収穫物の販売 準備・調整をしていただいた方など、多くの地域や 保護者の方の協力と協働で、意義の高いものになっ ている。児童の体験後の感想では、農家の方の苦労 への共感や、地域・保護者の方への感謝の言葉が多 く見られた。また、農業体験活動以外にも、児童は それぞれの地区にある「百庚申」や「旧手賀教会堂」 等の文化遺産について調べ、地域の歴史や風土をよ り身近に感じることができた。

これらの活動後のアンケート調査では、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」という設問に、6年生の92.9%の児童が「当てはまる」・「どちらかといえば当てはまる」と回答している。このことからも、児童の地域への愛着は高まっていることがうかがえる。また、「この学校に来てよかったと思いますか」という設問には、98%の児童が「思う」・「どちらかといえば思う」と答えている。理由には、「他の学校にはない行事(いちご狩りや農作業体験)ができるから」「地域の歴史を知ることができるから」という回答が見られた。

保護者や地域の方は、元々本校の学区に住んでいた方ばかりで、自分が育ったこの地域の児童のため

に、とても協力的である。現在本校に通っている児童にも、その思いを受け継いで、この学校や地域を大事にし、自分たちの力でよりよくしようと思う人に育ってほしい。

これらの活動で培われた地域への愛着は、学校への愛着につながる部分も少なくはない。しかし、本地域学習は学校を取り巻く「外の地域」へ目を向けて行われたものであり、学校への真の愛着や誇りを育むには、学校の「中」に目を向けた学びも必要と考える。私は、創立150周年を迎えた手賀東小学校が、これまでどのような歴史を刻み、どのように地域と関わりながら発展してきたのか、児童がそこに目を向けてこそ手賀東小学校への愛着が増し、誇りももてるものと考え、本研究テーマを設定した。

2 研究のねらい

本研究のねらいは、児童が自分たちの学校に愛着と 誇りをもつことである。児童が学校の歴史や特色を学 び、学んだことを生かしてこの先何十年も地域の人々 に愛されるものを作る、このような取り組みの中で学 校への愛着が深まり、誇りをもつようになると考える。 また、多くの保護者や地域の方に児童の取り組みの成 果を見ていただくことにより、手賀東小学校150年の 積み重ねを広く伝えたいとも考える。

ねらいを達成するための手立てとしては、全校児童による「150 周年記念すごろく」の作成を設定した。すごろくの1ますを手賀東小学校の1年と見立て、合計で150ますのすごろくを作る。児童は、自身の手でその年の主な出来事をすごろくのますに記すことにより、学校や地域の歴史を知ることになる。またすごろくの完成後は、児童はもちろん保護者や地域の方にもこのすごろくで遊んでもらい、楽しみながら本校の歴史の流れを感じてほしいと考えた。

3 研究の手順と内容

令和3年度の3学期、児童会で「150 周年記念に制作するもの」について話し合いをもち、様々な案の中から、学校の歴史を振り返りながら遊ぶことの

できる「すごろくづくり」の案が採用された。そして、児童会役員を中心に、全校で「150 周年記念すごろく」を作成し、全校児童や保護者、地域の方に遊んでもらう、という計画を以下のように進めていくこととなった。なお、この活動には本校校内研究のテーマである「ICT の効果的な活用」を積極的に取り入れていくことも、全校に共通理解された。

(1)活動計画

- I. 150 周年記念すごろくの名前を募集する。
- Ⅱ. すごろくの材料を決める。
- Ⅲ. 資金集めのためにアルミ缶募金を実施する。
- IV. 全校児童が、すごろくのますとなるタイルに、 学校の歴史を書く。
- V. 児童会役員がタイルを貼りつける。
- VI. 高学年が、小学生には難しい言葉を説明する QR コードを作成して貼る。
- VII. 児童会役員がプログラミングでルーレットを 作り、それを QR コードにして、スタートの 場所に貼る。
- VIII. 全校児童がすごろくを体験する。
- IX. 学習発表会で、「すごろくお披露目会」を開催 し、保護者や地域の方にも見てもらう。

(2)活動の実際

- I. 150 周年記念すごろくの名前を募集する。 令和4年度5月の委員会活動で、児童会役員 が、全校に向けた「すごろくの名前募集」の手 紙をGoogleドキュメントで作った。
 - ・すごろくは、手賀東小学校の歴史の1年を1ますとすること
 - ・全校児童が、ますに学校の歴史を書いていく こと
 - ・インパクトがあり、覚えやすい名前を募集す ること

という内容を手紙で知らせ、すごろく名の応募 用紙を専用のポストに入れてもらうよう呼びか けた。

集まったすごろく名を児童会役員が確認し、 学校の歴史に関係あるものを選んで残した。残った名前案をGoogle Jamboard に書き込み、単語を組み合わせながら、インパクトがあって手賀東小の自分たちが作ったものだとわかるようなすごろく名をあれこれと考えた。

その結果,「Let's go to timetravel ~私た

ちのスクログ〜」という名前に決まった。 「スクログ」というのは、「スクール(学校)」 と「ログ(記録)」を掛けた言葉で、さらに 「すごろく」に響きを似せたということだった。



図1 児童会役員による名前の決定

Ⅱ. すごろくの材料を決める。

委員会の時間に、児童会役員で、何を使ってすごろくを作れば良いかを話し合った。 児童はインターネットを使い、長く残せる 材料を探した。紙やラミネートではすぐに 劣化や破損してしまう恐れがあるため、すごろくのますはタイル、台紙の代わりは木の板に決まった。細長い木の板12枚にタイルのすごろく150枚を貼ることとなり、板を持ち運べばいろいろな場所ですごろくをすることが可能となった。

Ⅲ. 資金集めのためにアルミ缶募金を実施する。

すごろくを作るには、タイルやタイルを 貼る板などの材料費が必要である。本校に は以前より、児童の家庭で出たアルミ缶を 集め、業者回収の代金を児童会の運営資金 に充てるといった経緯がある。そこで児童 会役員が話し合い、アルミ缶で得た資金を すごろくの材料費に充てることが決まった。 アルミ缶は1kgで50円になり、目標を 3万円にすると、600kgのアルミ缶が必要 になる。家庭から、より多くのアルミ缶を 持ってきてもらうために児童会で話し合っ たところ、

- ・アルミ缶の募集日(第2・4火曜日)に、 児童会役員が缶の重さを量り、持ってき た児童の名前と缶の重さを記録する。
- ・学期末に、持ってきた回数と持ってきた 重さが多かった児童をそれぞれ第3位ま で表彰する。

ということに決まった。

その結果, 2学期の重さ第1位は, 9370 g のアルミ缶を持ってきた児童となった。 また, 回収日に欠かさず缶を持ってくる児童も増えた。

 $1\sim 2$ 学期の合計は、145kg、8050 円となり、このお金でタイルを買うことができた。なお、不足の材料費は、公益財団法人ちゅうでん教育振興財団の振興助成で賄った。





写真1 アルミ缶回収とアルミ缶表彰

IV. 全校児童が、すごろくのますになる タイルに、学校の歴史を書く。

「手賀東小の歩み」や卒業アルバムから、1年ごとの学校の歴史を書き出し、簡単な言葉でまとめた。

学校の歴史が載っていない年は、「大 正政変」や「ライト兄弟が動力飛行に 成功」など、日本や世界の歴史的な出 来事を入れた。

1年の歴史を1枚のタイルに書くので、全部で150枚になる。西暦、和暦、その年の歴史、書いた児童の学年と名前を書いた。

学年の人数や実態に応じて、低学年は一人につき1枚、中学年は3枚、高学年は4枚のタイルを書くことにした。各学年に、どの内容を書くかを割り振り、その中で誰がどの内容を書くかは、学年に一任した。タイルに書く内容を割り振る時に、低学年には、「学芸会を開く」のように、ひらがなでも意味のわかりやすいもの、文字数の少ないものを選んだ。

各学年で書く時には、学校に何年も 残るものだということを説明し、丁寧 に書き上げるよう促した。





写真2 タイルを書いている様子と完成したタイル

V. 児童会役員がタイルを貼りつける。

児童会役員が休み時間を使い,書き上がったタイルを板に貼った。タイルを貼る接着剤は教師が扱い,児童は分担してタイルを板に貼っていった。

VI. 高学年が、小学生には難しい言葉を説明する QR コードを作成して貼る。

「疎開」や「日朝修好条規」などの難 しい言葉は、5・6年生で説明のスライ ドや動画を作ることにした。1・2年生 は説明をしても難しいので、対象は3・ 4年生にした。

割り振られた1つ目の QR コードを作 った児童は、更に自分が説明したい言葉 を年表から選び、2つ目のQR コードを作 った。他の児童と2つ目に選んだ言葉が 重ならないよう、廊下に貼った年表で自 分が選んだ言葉をカラーチェックするよ うに工夫したまた難しい言葉以外にも, 「全校いちご狩り」など、本校の特色あ る行事の説明を作る児童も見られた。児 童の持っているタブレット端末のアカウ ントは、その児童の卒業後には削除とな るため、作ったスライドや動画は、消え ないところに保存しなくてはならない。 完成スライドは、ICT 支援員の協力で学 校のホームページに載せ、そのURLをQR コードにした。動画を作った児童は、学 校のアカウントの YouTube に上げて、そ のURLをQRコードにした。

できた QR コードは印刷してラミネートし、小さいタイルに貼りつけて、すごろくのますのタイルの下に貼るようにした。自分で作った QR コードのタイルは自分で貼り、本当に説明が表示されるか、タブレット端末でチェックした。



写真3 QR コードのタイルを貼る児童と 本当に表示されるかチェックしている児童

VII. 児童会役員がプログラミングでルーレットを作り、それを QR コードにして、 スタートの場所に貼る。

サイコロの代わりに、QRコードを読み込めば画面上で回すことのできるルーレットを準備することにした。理由は、難しい言葉の説明もQRコードで読み込むことができるので、タブレット端末を持っていけばどちらにも利用できるためと、混雑した時に、プログラミングでのルーレットならそれぞれの場所で回すことができるためだ。

ルーレットは、児童会役員の中でプログラミングが得意な児童が、率先して作った。最初に説明が出るようになっている。



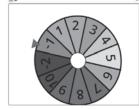


図2 プログラミングで作ったルーレット

VⅢ. 全校児童がすごろくを体験する。 全校児童の力で完成したすごろくを, 各学級で時間を取り,体験した。





写真4 すごろくを体験している児童

IX. 学習発表会ですごろくお披露目会をし、 保護者や地域の方にも見てもらう。 2月20日(土)の学習発表会では、保 護者や地域の方に向けて児童会役員が「すごろくお披露目会」を開催し、同時にアルミ缶募金協力のお礼も伝えた。すごろくのやり方を、児童会役員が事前に撮った画像や動画を交えて説明した。

その後、帰りには多くの保護者がすご ろくの前で立ち止まり、手賀東小学校 150年の歴史を読んでいた。





写真5 「すごろくお披露目会」と、 すごろくを見学する保護者

4 研究の成果と課題

(1) 成 果

150 周年記念すごろく作成の取り組みにより、アンケートの結果に次のような変容が見られた。

①「手賀東小学校の子どもで良かったと思いますか」という設問に対し、「思う」・「どちらかといえば思う」と答えた児童が、98%から 100%になった。

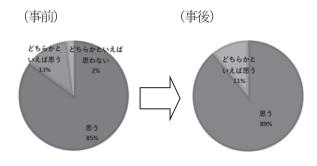


図3 「手賀東小学校の子どもで良かったと思いますか」

②また、「学校を良くしていきたいと思いますか」という設問に対して「思う」・「どちらかといえば思う」と答えた児童が98%から100%になった。これらのことから、学校に対する愛着は高まり、学校をよりよくしたいという気持ちが深まったと考える。

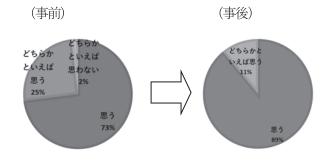


図4 「学校を良くしていきたいと思いますか」

③「あなたの力で学校はもっと良くなると思いますか」という設問に対して「思う」・「どちらかといえば思う」と答えた児童が75%から83%になった。これからの学校のことを自分事としてとらえていることがわかる。6年生からは、「150年もの歴史があるこの学校をこれで知れていつも以上に誇りに思った」、「このすごろくだったら、低学年の人でもわかりやすく楽しく知ることができると思いました」という意見も出た。学校の歴史を掘り起こし、多くの人にそれを知ってもらうことで、児童はこの手賀東小学校に通う誇りを感じることができたと考える。

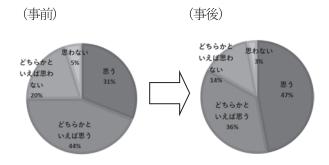


図5 「あなたの力で学校はもっと良くなると思います か」

(2)課題

今年度は150周年だったので、「地域学習」の発表を中心に式典を行い、記念すごろくを作った。 地域の方へ、学習したことや感謝を伝えるという 目標に向かって全校で前に進むことができた。

来年度から数年は、150周年のような大きな行事はない。しかし、地域と学校への愛着と誇りをもつ児童を育てるためには、新しい目標に向かって、児童が主体となって地域と学校を知り、発信していく活動の継続が必要となる。そのために、

まずは職員が共通の認識をもって、児童会活動や 縦割り活動を充実させていきたい。

5 おわりに

本実践では、児童会役員を中心に、何年も学校に 残るすごろくを作った。

「はじめに」でも触れたが、150周年の式典では、多くの保護者や地域の方に大変お世話になった。自分の学校の歴史すごろくを作ることで、過去を知り、何人かの児童は未来にも思いを馳せていた。ある児童は、自分が親になった時に、子どもがQRコードを読み込んで、自分の作った説明を見るかもしれないと、楽しみにしていた。児童の祖父母、両親などが学校を支えてきた歴史が、またその児童に引き継がれていくのだろうと思う。

これからも、学校と地域が力を合わせ、児童を育む環境を継続・発展していけるよう、教師として地域への感謝を忘れず、児童が主体的に学ぶことができる手立てを考え続けていきたい。

奨 励 賞

福祉教育を核とした地域連携と教育の平常化へ向けての実践

~主体的に取り組み、思考し表現しようとする児童の育成を目指して~

旭市立中和小学校 校長 朝 倉 真由美

I はじめに

「地域と共に歩む幽学の里の小学校」本校のキャッチフレーズである。全校児童数90名の小規模校。現在は、市の学校再編計画が進行している学校である。

そんな本校が令和4年度からの3年間、小学校3校、中高等学校各1校、そして、小学校区ごとにある地元福祉協議会と共に、千葉県知事より福祉教育推進校として地域指定(旭市干潟地区)を受けた。これを機会に福祉教育の推進を図りながら、コロナ禍で閉鎖的になってしまった教育活動を地域に大きく開き、地域との連携を再構築しながら、児童が主体性にかかわれる場を設定し、考え、表現し、実践する児童の育成を目指したいと考えた。活動を開始して1年半、活動を振り返ることにした。

Ⅱ背景

(1) 学校現場の混乱

新型コロナウイルス感染症による3年間の行動制限は、学校教育へも大きな影響をもたらした。また、この間、新学習指導要領の完全実施、「令和の日本型学校教育〜全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現〜(答申)」「次期教育振興基本計画について(答申)」など、様々な教育施策や方向性が示され、感染症対策と同時に新しい教育への対応が学校現場に求められた。現場の混乱は言うまでもない。

(2) 児童の状況

目の前の児童を見つめると、行動制限やマスク生活などの日常が、児童の心理面や情操面、人間関係作り、コミュニケーション能力などの発達を足踏みさせてしまった現実が見られた。新型コロナウイルス感染症が5類相当に変化した後も、本校の児童のマスク着用率は5割程度、高学年での着用率が高い。「相手に聞こえる声であいさつができない」「友達との些細なトラブルも自分で解決できない」「失敗や結果を気にして、試行錯誤して学びを深める様子が見られない」

いう実態が見られた。つまり、人とどうかかかわれば よいかがわからない、人の願いや思いを察することが 難しい、人との距離感がつかめない状況になってしまったのである。また、常に変化する新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、体験活動の縮小化や急場しのぎの臨時的な対応を繰り返すうちに、常に受動的な立場で学習を展開することになった影響も大きい。

(3)目指す児童像

旭市では学校教育指導の指針として「ふるさと旭に 誇りをもち、社会で活躍する人を育てる」を掲げてい る。それを受け本校では「かしこく なかよく 元気 よく~学び合い、高め合い、ふるさとと共に歩む中和 っ子~」を学校教育目標とし「主体的に学びに向かう 子」「自分の思いを伝える子」「粘り強く挑戦する子」の 育成を目指している。そして、学校教育目標を具現化 するための重点実践事項に福祉教育の充実を挙げてい る。福祉教育の実践を通して主体的に地域や人とかか わること、体験活動や交流活動での学びから自分事と して課題を設定し課題解決へと発展させること、他者 と深くかかわっていく場や意見交流の場、自己の振り 返りの場を設定していくことで、地域の人と共に生き ようとする心情を育んでいきたいと思う。そして、地 域の一員として自分にできることを行動に移していこ うという実践意欲につなげていきたいと考える。

Ⅲ 学校経営計画と組織づくり

(1) 学校教育目標の実現に向けて

本校の学校教育目標には「ふるさと教育」の視点が盛り込まれている。コロナ以前から、地域の人材や教育資源の活用や近隣施設との連携を積極的に図りながら、教育活動を展開してきた。元々地域の方々は学校に大変協力的であり、学校の行事にも積極的に参加、協力してくれる。もう一度、地域と手を携え、地域と共に歩む学校に戻すためには新しいスタイルでの教育の平常化が求められた。そこで、令和5年度の学校経営方針を次のように示した。

安心・安全な学校環境のもと、社会の変化に対応できる「知」 「徳」「体」のバランスの取れた児童を育成し、ふるさと旭に誇り をもち、社会で活躍できる人づくりを目指す。

- (1) 全職員の参画による教育活動の創造~これからの社会を生き抜く力の育成~
- (2) 共に支え認め合える人間関係づくりと福祉教育の推進
- (3) ふるさと教育の推進~中和小のよさを生かし、地域と共に 歩む学校づくり~

また、経営の重点では、学校教育目標の「かしこくなかよく 元気よく」の「なかよく」の具体的な児童像を「自分の思いを伝える子」とし、以下の内容に取り組むこととした。

①福祉教育の充実

- □県指定福祉教育推進校(地域指定)の地域共通実践「障がい者スポーツへの理解・体験」や全校で取り組む福祉教育活動、「花いっぱい運動」、「歌声いっぱい活動」、「挨拶運動」、「環境美化活動」を継続すると共に、学年ごとの福祉の授業実践を通して、持続可能な社会の一員として、幸福な人生の創り手としての自覚と力を身につけられるようにする。
- □集団登下校班、清掃活動、長縄運動など、縦割り活動の機会 や場面を増やすことで、コミュニケーション能力を高め、豊 かな人間関係づくりを推進する。
- □「個と個」や「個と集団」での人との関わりの中で、互いの よさを理解し、人の痛みや思いに共感できる人権感覚を育て る。

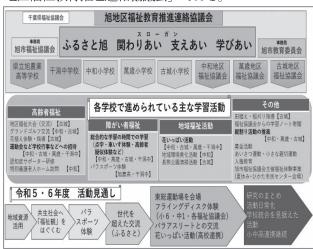
さらには、校内研修においても福祉教育をその中心に据え、研究を通して福祉教育の充実と児童の育成に迫ることとした。研究主題は、主体的に取り組み、思考し表現しようとする児童の育成~福祉教育の実践を通して~である。今年は、福祉教育の年間計画の見直しを行い、教科、特別活動、学校行事など、横断的な活動が展開できるようにした。

月	○ 児童会目標 【道徳的価値】	活動計画(担当)
4月	○ 明るく元気にあいさつしよう 【礼儀 よりよい学校生活】	 朝の挟歩運動(児童会) SOSの出し方教室(生徒指導) いじめ防止強化月間(生徒指導) 教育相談月間(教育相談月間)
5月	○ 進んで体をきたえよう【努力と強い意志】	環境美化活動(環境担当)・土砂災害想定避難訓練、引き渡し訓練(安全主任
6月	○ いのちを大切にしよう 【生命の尊さ 親切・思いやり】	運動会(中和福祉協議会との交流)いのちを大切にするキャンペーン(生徒指導)(学級活動・道徳の実践)人権教室(人権担当)
7月 8月	○ 責任をもって行動しよう 【自由と責任】 【家族愛 家庭生活の充実】	- 朝の挟浮運動(児童会) - 障がい者理解 (6年) <パラリンピックメダリストとの交流>
9月	○ きまりや時刻を守って行動しよう 【規則の尊重】	朝の挟拶運動(児童会)環境美化活動(環境担当)
10月	○ 進んで本を読もう 【感動 個性の伸長】	・命に係わる本の紹介(図書担当)・高齢者福祉(疑似体験・認知症サポーター講座)
11月	○ 学年にあった家庭学習をしよう 【向上心 感謝】	・障がい者理解パラスポーツ体験> (6年)・ナザがね祭(中和地区福祉協議会)
12月	○ 物を大切に扱い、後始末をきちんとしよう 【公正・公平 助労】	・全校花いっぱい活動(環境担当) ・白寿蘭訪問(人権担当) ・募金活動(児童会) ・人権週間(人権担当)
1月	○ 友達となかよくしよう【友情 信頼】	・縦割り長縄活動 ・小さな親切運動(人権担当)
2月	○ 1年間の学習と生活を振り返ろう 【努力と強い意志】	・全校花いっぱい活動(環境担当)
3月	○ 学校をきれいにしよう 【感謝 勤労 思いやり】	・朝の挨拶運動(児童会)

【資料 1 福祉教育年間計画】

(2) 地域の福祉協議会の構築

一方、福祉教育を地域と一緒に推進するためには旭市教育委員会、旭市福祉協議会の指導と協力の下、地域組織を立ち上げ、地域で同じ方向を向いて実践を図ることが望まれた。本地域では、これまでにも各小学校と地区福祉協議会の連携が図られ、すでに福祉教育の基盤が各校に根付き、学校行事への協力、参加、交流など、各々の学校で進められていた。しかし、新型コロナウイルスの影響を受けたここ3年は全く対面での活動はできていなかった。そのことは、今まで当たり前に進められてきた行事の継続を難しくし、学校と団体の関係性を希薄にしてしまった。地域指定として福祉教育を推進するためには、学校と地区福祉の連携を元通りにした上で、5校、3団体を1つの大きな組織としてまとめていく必要があった。そこで、立ち上げた組織が「旭地区福祉教育推進連絡協議会」である。



【資料 2 旭地区福祉教育推進連絡協議会活動の見通し】

共通の方向性を見出すためにスローガンを作成「ふるさと旭 関わりあい 支えあい 学びあい」とし、各学校での福祉教育を充実させながら、共通体験を取り入れながら活動を進めることとした。

Ⅳ 実践

研究指定を受ける前から継続している福祉教育活動 をどう平常化して取り組んだかを中心に紹介する。

- (1) 学校と地域が共に歩む様々な交流活動
- ① 花いっぱい活動 (99 名、100 プランター)

本校では、日頃の児童の 学習活動への協力や安全 な登下校の見守りなどの 感謝の気持ちを込めて、児 童が植えたプランターを



地域へ届ける「花いっぱい活動」を継続してきた。令和 4年度は今までよりも大掛かりに、全校児童99名が一 人1プランターに花を植え、メッセージカードを添え て地域を花いっぱいにする活動を実施した。

1プランターに花苗を3株ずつ植える活動は、全校が6・1年、5・2年、4・3年の縦割りの学年で一斉に実施した。お兄さん、お姉さんが小さい子の面倒を見ながら、植え付けを行う。この活動は児童の心を育てる大切な活動である。重い土を運ぶ、ポットから丁寧に花株を外す、植え付けのポイントを教えるなど、自然な活動の流れの中で、言葉を交わし活動をサポートしながら、笑顔が輝く異学年交流活動となった。花苗の提供は「一般財団法人千葉県まちづくり公社(県立東総運動場)によるものであり、花苗300本を無償で提供いただいた。





植え付けたプランターは、児童と職員が下校時に地域へ届けに行った。「こんにちは、いつも見守りありがとうございます。僕たちの植えた花のプランターです。」児童が声を発し地域の方々に話しかける主体的に活動できる場面が生まれた。

児童が植えたプランターを学校周辺の家にも配布し、そのお世話をお願いした。どの家の方も快く了解してくださり、児童の活動に賛同してくださった。中には、プランターのお礼にと、大切に育てている蘭の花をプレゼントしてくださったご家庭もあった。児童の通学路に当たるこの道路(県道沿い約300メートル)を「笑顔いっぱい花の道」と、児童会がネーミングした。

② 地区福祉協議会の方との交流活動

本校では児童が福祉協議会の高齢者と直接話したり、一緒に活動したりする機会はなかった。そこで、この研究指定をきっかけに中和小学校児童と中和地区福祉協議会のメンバーが、グラウンド・ゴルフ、そして、グループごとの会話を通して交流を行う機会を設けた。前半のグラウンド・ゴルフ体験では、ラケットの持ち方、球の打ち方などを丁寧に指導してくださり、共に楽しむ活動が展開できた。後半は「昔の中和小、昔の遊び」を話題に会話を楽しんだ。児童の知らない昔の様子に、児童は興

味津々で話を聞き、感嘆の声を上げていた。児童からは 旭市音楽会で歌った合唱曲がサプライズで披露された。



スティックの持ち方やボールの打ち方を丁寧に教えてもらってうれしかった。緊張したけど楽しかった。

学校から帰ったら、川で手 づかみで魚をとっていたな んて、信じられない。すご い。



(2) 県立旭農業高等学校との交流活動

① 循環型農業実践発表 (SDGs)

県立旭農業高等学校 畜産科 養鶏班の循環型農業 についての実践発表を中和小学校で実施した。

地元旭農業高校は、花苗 の提供や農業体験などで 市内小学校との関わりを 大切にしてくれる学校で ある。今回5年児童が、果



樹の枝の伐採 → 炭づくり → 土壌改良 → 青菜栽培 → 鶏への青菜(えさ)の提供 →鶏糞を青菜づくりの畑の肥料へ、という循環型の農業の取組についての実践発表を聞いた。そして、この流れで育てた鶏が産み落とした鶏卵が、市販の鶏卵とどう違うのかを、重い鶏卵を探すゲームや実際に卵を割り白身や黄身の様子の違いの観察を通して学ぶことができた。 高校生は、小学生にもわかりやすい言葉で説明してくれた。小学生もSDGs にかかわる旭農業高校の実践を感心した様子で聞き入っていた。

普段かかわりの少ない高校生との交流は単に循環型 農業のすばらしさを伝えただけでなく、農業高校に対 する理解、人と人とのかかわりを広げる貴重な体験と なった。

(3) 白寿園訪問(20 年以上継続する地元特別養護老人ホームとの交流)

特別養護老人ホーム「白寿園」は、本校の北側に位置する施設で、この施設ができた当初から、中和小学校との交流が始まった。白寿園で暮らすお年寄りは、家族と離れて生活し、車椅子を使用しての移動している方や体の不自由さが子供にもわかるような状態の方が多く、その姿は自分の家に同居するお年寄りとはかなり違っ

ていた。そんなお年寄りのために、2か月に1度の「誕生会」に児童が訪問し、一緒にお祝いをするという交流活動を続けてきた。手作りのプレゼントを渡したり、じゃんけんや肩たたきなどをしたりのふれあいの時間を大切にしてきた。そして、何よりも大切だったのは「学習の成果」を発表する機会を定期的に得られたことだ。国語の音読、リコーダー発表、かけ算九九の披露など、日常の教育活動が児童の主体的な学びへとつなげることができた。写真は、実際に訪問に行けた令和元年度コロナ前の活動の様子である。



新型コロナウイルス感染症の拡大は、対面での活動を不可能にした。ここ4年間は、児童と白寿園のお年寄りが会う機会を奪われてしまった。それでも、白寿園との交流がなくなってしまわないように、クリスマスプレゼントを贈ったり、プランターの寄せ植えを送ったりと、活動を細々と継続している。いつかまた、一緒に誕生会を祝えるようにと願っている。

その他にも本校では、福祉にかかわる活動を教育課程に位置付け、様々な活動を展開している。下の資料は、1年間の活動をまとめたものである。



【資料3 令和4年度福祉教育実践のまとめ】

(4) 障がい者理解を目指しての実践

この活動は、福祉教育の地域指定を受けた小学校3校、中高等学校2校が、障がい者福祉への理解を深めるために令和5年度に共通体験として実施した活動である。
① 「あすチャレ」ジュニアアカデミー(日本財団パラ

(L) 「あすチャレ」シュニアアカテミー (日本財団パラ スポーツサポートセンター主催) への参加 本校児童は車いすを利用 する人に関わったり、間近 で見たりする経験をほとん どもたない。障がいがある 人はどんなことが困るの



か、どんなことを望んでいるのか、障がいとは何か、こ れまで学ぶ機会はあまり多くはなかった。そこで、障が い者福祉への理解を深め、共生社会を学ぶ機会をもち たいという願いから千葉県教育委員会が推進する「心 のバリアフリー教育」の一環として、5・6 年生を対象 にワークショップ型授業「あすチャレ!ジュニアアカ デミー」(日本財団パラスポーツサポートセンター主催) を実施した。現役パラアイスホッケー選手でバンクー バー2010 冬季パラリンピックの銀メダリスト、そして パラ・パワーリフティング選手でもある「馬島誠さん (まこっちゃん)」を講師に迎えてこの授業を行った。 まず、馬島さんの生い立ちや障がいの経緯、パラスポー ツとの出会いを伺った。馬島講師は、学生のときにアル バイト中の事故で電流が体に流れ、九死に一生を得て 今があるそうです。馬島講師の話を聞いて、「できない」 を「できる」に変える工夫をたくさん教わり、遊びを通 して「みんなが楽しめるルール」を工夫していくことの 必要性、相手や仲間を大切にすることを学ぶことがで きた。まさに、共生社会への第一歩を踏み出す活動とな った。また、自分自身を見つめ「挑戦する」「顔晴る(が んばる)」「感謝する」「他喜力」の大切さや必要性を感 じる素晴らしい体験学習となった。

これは、児童の感想の一部である。



馬島さんが新しい競技に挑戦していてすごいと思った。最初は全然できなかったけど、あきらめずに努力していてかっこいいと思った。皆が公平に楽しめるのが一番いいと思った。大切な人を笑顔にするように願晴ることや人に感謝することが前向きに考えられて、夢がかなえられると知った。他喜力は自分のためになると知った。(6年男子)

あきらめないという気持ちがすごく伝わりました。 あきらめずにしっかり努力していきたいと思いました。車いすや障害をもっている人はふつうの人とは 少し違うけど、いろいろ工夫したらできることもいっぱいあることがわかりました。 (5年女子)

V 活動の振り返り(中間)

これまでの実践を振り返るために、5・6年児童を対象に自作のアンケート調査を実施した。対人・自立・規範意識・言語力・自主性にかかわる質問を4項目ずつ設定し、児童(自己評価)と教師(他者評価)が実施した。回答項目は4できる、3少しずつできるようになってきた、2苦手・できない、1よくわからない の4つである。

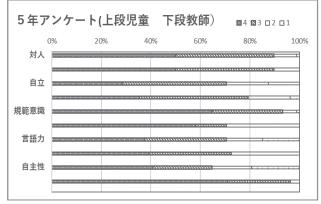
【アンケート項目】(自作)

L /	
対人	・誘われたり、誘ったりして友達と一緒に遊べる。・学校に来た人(お客様に)自分からあいさつできる。・みんなの前(学級・全校)に出て活動できる。・やってはいけないことを注意する、励ますなど、友達のために行動できる。
立立	・やりたいことを自分で決めて、自分から取り組む。 ・自分の考えと違っても相手の考えや要求を受け入れる。 ・生活のリズムが整っている。 ・困難なことに直面しても気持ちを立て直してもう1度取り組める。
規範意識	・自分がされて嫌なことは人にしない。 ・乱暴な言葉を使わずに相手に言葉で伝えられる。 ・順番やルール、学校のきまりを守れる。 ・勝手にものを借りたり、使ったりしない。
言語力	・話の内容に合わせて表情を変えたり反応したり、質問したりできる。・自分の困っていることを友達・親・先生に言葉で伝えられる。・教師や友達の話を聞いて理解できる。・教師や友達の話を聞いて相手の気持ちがわかる。
自主性	・自分の長所、短所がわかる。・自分には友達に自慢できること (ところ) がある。・自分は学級で必要とされている。・目標に向かって努力を続けることができる。

昨年度より福祉教育を学び、様々な活動に取り組んでいる6年生は、自主性の項目でやや評価が低いものの、概ね肯定的な意見が高い結果が出た。自己評価と他者評価にも大きな違いは出ていない。最高学年という立場であることも大きいが、福祉教育を通して人と



かかわることでそれぞれのよさを理解し、そして、活動を通して自分を理解し、活動に前向きに取り組めるようになりつつあるようだ。



5年生は自立、言語力、自主性にかかわる自己評価が低いという結果が出た。特に、「4 わからない」と回答する児童が複数見られた。自主性においては、教師による評価と大きな違いも出た。自己理解ができてない、自分に自信が持てない、自己有用感が低いことが読み取れた。様々な経験や体験を通して視野を広げ、多様な価値観、見方考え方を学ぶ体験や場面を多く取り入れていく必要を感じた。

6年と5年のアンケート結果の比較からは、福祉教育を通してたくさんの人とかかわり、様々な体験を積み、 視野を広げていくことは児童の主体性を育み、自ら表現しようとする児童の育成に有効性をみとることができた。

VI 終わりに

本校の福祉教育の取組はまだ、道半ばである。今後、令和5年11月には小・中学校の児童生徒、地元福祉協議会の約120名が集合し、地域指定の共通体験事業としてパラスポーツ体験「フライング・ディスク」を実施する予定である。障がい者スポーツへの理解を深めると同時に、多くの人とかかわりながら主体性をはぐくむ機会としたい。また、秋以降は、千葉県立旭農業高等学校の高校生が育てた花をもとに、小中学生が「花いっぱい運動」を各学校で展開する予定である。こうした体験や活動はすべて地元の方々に支えられて活動が展開できるものである。

これからも、福祉教育を学校経営の中核に据えなが ら、自ら考え、表現しようとする育成に取り組んでいき たいと考える。「福祉」とはしあわせを意味する言葉で ある。みんなの幸せを考えるこの教育は、「ウェル・ビ ーイング」への近道となるかもしれない。

学力向上プラン「松ケ尊塾」の推進

~心豊かで意欲的に学び、心身ともにたくましい生徒の育成を目指して~

千葉市立松ケ丘中学校 校長 伊藤 芳仁

I はじめに

本校は千葉市15番目の中学校として開校し、創立から60年以上の歴史と伝統をもつ中学校である。また、 平成25年3月に校舎改修工事が完了し、現在では、千葉市内で最も新しい校舎を有している。

令和5年度は、学級数が通常学級12学級、特別支援 学級2学級、生徒数が392名在籍しており中規模の学 校である。学区には大森小学校、仁戸名小学校、松ケ 丘小学校があり、3つの小学校の生徒が集まっている。 通称「松中(まっちゅう)」と呼ばれ、卒業生や地域の 方々から親しまれている学校である。

以前から地域の方々が本校の教育活動に関わってくださったり、地域の行事などに生徒が参加したりする姿が多く見られた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で、近年ではこれらの関りが途絶えてしまっているものもあるので、本研究を通して、地域と学校とのつながりを再び強めたいという思いを抱いている。

Ⅱ 研究の概要

1 本校および生徒の実態

本校の学校教育目標は、「心豊かで意欲的に学び、心身ともにたくましい生徒の育成」である。また、この目標の副題として「みんなちがって みんないい」「人のために役立つ人間になろう」が加えられている。これらの実現のために日々の教育活動にあたっており、本研究もその1つとして実践されたものである。

本校生徒は、素直で気持ちの穏やかな生徒が多く、仲間と協力して落ち着いた学校生活を送っている。また、体育祭や合唱コンクールなどの行事や部活動に意欲的に取り組む生徒も多い。一方で学習面に関しては、小学校の既習事項が習得できていない、家庭学習の習慣が身に付いていない、学習する環境が整っていない家庭があるなど、様々な課題を抱えた生徒が見受けられる。定期テストや学力状況調査などの結果を見ると、学力の二極化が激しく、学年が上がるにつれてその差が顕著になっている。そのため、学習についての課題

を抱えた生徒が少しでも意欲的・主体的に学習に取り 組み、基本的な学力の定着が求められている。

2 主題(松ケ尊塾)について

吉田松陰の「松下村塾」に着想を得て、学力向上プランを「松ケ尊塾」(読みは「しょうかそんじゅく」)と銘打ち、これまでに実践してきた教育活動を生かしながら、生徒の学力向上ならびに学校教育目標の実現に向けて取り組むこととした。また、「松ケ尊塾」と命名したことにより、生徒、職員ともに親近感をもって学力向上プランを実践することにつなげられるだろうと考えた。

「松ケ尊塾」では、大きく分けて2つの柱を軸としている。1つ目の柱は、「一人一台端末(ギガタブ)の活用」である。江戸時代の寺子屋が「読み・書き・そろばん」を教授していたことに倣い、松ケ尊塾ではこれを「読み・書き・ギガタブ」とし、読み・書きに加えてICTを活用する能力を育むことを目指した。また、ギガタブがシャープペンシルなどの文房具と同じように生徒にとって身近なものになることで、これを入り口として意欲的・主体的に学習に臨むことができるのではないかと考えた。

2つ目の柱は、「地域連携を取り入れた学力向上プランの実施」である。本校はこれまでも地域人材を生かした教育活動を行ってきたが、生徒の学力向上および学校生活の充実のために、より一層の人材活用を図るべきだと考えた。ここでいう地域とは、PTAや育成委員会の方々だけではなく、本校及び校長・職員との関りの深い方も含んでおり、近隣の教育機関などに働きかけるなど、生徒の成長のために必要であると思われることを積極的に教育活動の中に取り入れることとした。また、地域の人材を活用し、地域との関りを意識させることで、地域に根差した、地域に貢献できる生徒を育てることにも期待できると考えた。

3 研究のねらい

生徒の学力向上、学校生活の充実などを実現するた めのギガタブの有効的な活用法、地域人材の効果的な 配置や運用方法を探る。

Ⅲ 実践内容(松ケ尊塾の取組)

1 一人一台端末(ギガタブ)の活用

①全校読み聞かせ

本校の朝活動(毎朝10分間)は、新聞記事などを正 しい姿勢、綺麗な文字で書き写す「視写」と「読書」 で構成されている。この読書の時間の中で、図書館指 導員がギガタブに向かって読み聞かせを行い、それを 全ての学級に配信し、全校一斉に同じ本の内容に耳を 傾ける時間を設けた。目の前に指導員がいないためり アリティに欠ける点は否めないが、本の挿絵が大型テ レビに映し出されるので見やすいという利点もあった。 また、全校生徒が同じ本の内容を共有でき、読み聞か せ後の話題とする様子も見られた。





(2)オンライン授業

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、通常より も長い期間欠席を余儀なくされる生徒がいた。健康状 態が回復したのにも関わらず自宅待機しなければなら ない生徒に対し、オンライン授業を実施した。生徒の 自宅ヘギガタブを届けさえすれば、これを介して配信 可能な授業や時間を容易に連絡することができ、生徒 は板書を中心に視聴して、リアルタイムで授業を受け ることが可能となった。また、集会などの様子をギガ タブで撮影することにより、教室に入ることが難しい 生徒がこれを視聴して教師や仲間の話を聞くことがで きる利点もあった。



※写真中の〇の位置にギガタブを配置して配信を行った。

③行事の中での活用

令和4年度では、依然として全校生徒が一堂に会さ ずに行事が行われることがあった。そのため、行事の 各所で工夫が凝らされ、ギガタブが大いに活用された。

下の写真は生徒総会の様子である。生徒総会では会 の成立のため定足数の確認が行われるが、この集計を ギガタブで行った。各クラスの学級委員が集計したデ ータが総会会場に集約され、瞬時に画面に映し出され るため、参加生徒にとってわかりやすいものとなった。





行事運営についてはこの他に、生徒会選挙の候補者 ポスター作成、新入生説明会や生徒集会でのプレゼン 資料作成などにも用いられた。これらは生徒のアイデ ア、作業によって作成されたことから、ギガタブが身 近な学習ツールとなっていることの事例として挙げら れると考える。

④新聞・報告書の作成

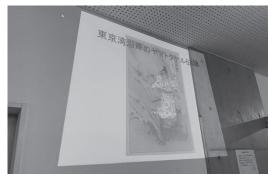
ギガタブで新聞・報告書を作成するメリットは、第 一に提出者の把握が容易であることが挙げられる。次 に、ギガタブ内に写真データがあれば、生徒自身が選 んで新聞・報告書に貼り付けることができることが挙 げられる。1年生の校外学習では、代表生徒がギガタ ブを持参して撮影し、職場体験活動では職員が事業所 を回る際にギガタブを持参し、活動の様子を撮影する ことでギガタブ内のフォルダに写真データを集めた。 さらに、生徒が作成したものを教員が加筆・修正する ことが容易い点もギガタブを用いるメリットと言える。 デメリットとしては、生徒に校外で撮影をさせる際 には「撮影時のルール」を指導する必要があることや、 ギガタブの機能的な問題もあり、作成時に用紙にうま





⑤壁面ビジョンによる学習

向かいの壁をスクリーンとし、校長室からプロジェクターで映像を映し出し、廊下を通行する生徒の興味・関心を惹きつけた。映像の内容は多岐に渡り、地域の歴史や学校行事写真など様々である。図書委員会では、担当者を決め、ギガタブで図書紹介を作成し、このスクリーンに映し出した。人通りの多い廊下なので、日々たくさんの生徒がこれらを目にしていた。



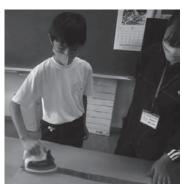
2 地域連携を取り入れた学力向上プランの実施 ①淑徳大学学生ボランティアによる支援

本校から程近いところに淑徳大学がある。以前から 交流はあったが、松ケ尊塾の推進にあたり学生ボラン ティアを募り、令和4年度は約20名の協力を得ること ができた。中学校の教育活動の中に彼らを配置し、本 校職員とともに生徒の学力向上、学校生活の充実に向 けて以下のような場面で活躍した。

i 特別支援学級での活動支援

令和4年度、特別支援学級(通称つばさ学級)には7名の生徒が在籍していた。支援の必要度合いが生徒によって大きく異なるため、人手があることによって個々に寄り添った支援を実施することができた。作業の際には怪我などが無いように、学習の際には教師の指示をかみ砕いて教えるなどの支援を行った。





生徒に寄り添い、適切な支援を行う学生ボランティア

ii 通常学級の授業における支援

令和4年度はおもに数学の授業に参加した。数学では特に問題演習の際に、何を、どうしたらよいのかわからなくなってしまう生徒が多いため、支援できる人が1人でも多いとありがたい、と教科担当からの意見を得た。生徒も教員と同じように感じているようで、自ら積極的に支援を求め、わかったときには嬉しそうな顔を見せていた。



iii 部活動指導支援

学生ボランティア自身の経験を生かし、おもにバスケットボール部の指導を行った。生徒指導や教育相談、さまざまな会議などで、顧問による部活動指導が難しいときに大いに助かった。特に生徒の怪我や事故防止の観点から、学生ボランティアが近くにいることのメリットは大きいように感じた。また、生徒にとっては、経験にもとづいた指導を受けられるため、技術向上の一助となっていた。



②その他の地域人材を活用した支援、地域との関り

i 部活動外部指導員の活用

本校卓球部では外部指導員を迎え、体育館練習の際の指導にあたっている。指導を受けた部員は力を伸ばし、県大会出場や地区大会優勝などの成績を納めた。

ii 職業講話

職業講話の実施に際し、地域の方に講師の招集を依

頼した。生徒が興味・関心をもって話を聞けるよう、 様々な職種の人材を集めてもらうことができ、充実し た内容となった。

iii 伊藤校長による地域学習会

地域の方からの要望に応え、「土気往還」という道を中心に、地域の歴史などについての学習会を実施した。土気往還については、1の⑤の壁面スクリーンに映し出したり、学校だよりに掲載したりしたので、目にしている生徒も多い。このような活動を通し、地域との関係性を深め、今後の教育活動への協力を得るきっかけとしたい。

見直そう郷土の歴史「ふるさとの街道土気往遠」 第一話

現在の千葉市登戸周辺から九十九里まで続く古代からの道を「土気往遷」と呼びます。今回は松 ケ丘中学校創立60周年記念に際し、学区(トップマートと中学校の間を通る土気往遷の名所を巡 る旅をシリーズでお届けします。

室町時代の千葉の様子を伝える「千学集抄」には「結城浦」という湊の名で残されています。結 城浦は「源平闘諍録」の説話『結城浜の戦い』があった場所でもあります。下総国の市場(現在の 中央区市場町付近)と都川でむすばれ、「千葉の湊」としての役割を果たしていたと考えられてい ます。土気往還は登戸浦と土気、九十九里を結び、江戸築地に荷揚場(にあげば)を持ち、年貢米 や海産物を房総半島から江戸に海上輸送する拠点となりました。土気は九十九里方面から運ばれた 物資を江戸へと運ぶ重要な道です。普段、何気なく通っている道も調べてみるとこんな歴史が隠れ ています。冒頭で紹介した登戸浦は浮世絵師葛飾北斎の『富嶽三十六景』の「登戸浦」でも描かれ ています。

iv 木村悠方子さん (歌手・俳優 木村拓哉さん母) による講演会の開催

心身ともにたくましい生徒の育成の一環として、伊藤校長と古くから親交のある木村悠方子さんによる講演会を開催した。『夢をもって生きる』をテーマに、言葉の力や大切さ、日々の心がけなどについて熱く語っていただいた。生徒たちは、自分が大事だと思った内容をメモに取りながら、真剣な眼差しで話を聞いた。



生徒に向けて熱心にご講演くださった木村悠方子さん

木村さんの教育講演を聞いて(※一部抜粋)

【1学年生徒】

これから先のことはよくわからないけれど、今この時間をどう

生きるかを自分で考えることは大事だと知れたので、大切にしていきたい。どんなことにも感謝と笑顔を忘れないで、大丈夫と思えるように生活していきたい。

【2学年生徒】

今回の講演を聞いて、「ありがとう」という言葉はすごく大切な んだと思いました。今日のことはこれからの生活にすごく生か せると思うので、忘れずに覚えておきたいなと思います。これ からの生活で不安なことがあったけど、木村さんのお話を聞い て、こうすればいいんだとわかった良い機会になりました。

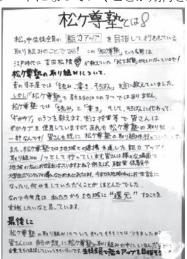
IV 成果と課題

1 成果

松ケ尊塾を推進する中で、最も成果があがったと考えられるのは、生徒とってギガタブがより一層身近なものになったということである。委員会や行事などの活動の際に、ギガタブを1つのツールとして捉えてアイデアを出したり、主体的に掲示物の作成にあたったりする姿が多く見られるようになった。松ケ尊塾の取組以外にも、日々の授業の中で頻繁にギガタブを使っていることも大きな要因であると考えられる。

次に、多くの地域の方々の協力を得られたことにより、生徒に地域との関りを意識させ、感謝の気持ちを持たせることができたことが挙げられる。今までも地域から協力を得ていたが、「松ケ尊塾」と銘打ったことによりそのかかわりが明確になり、地域をより強く感じることができるようになった。

また、生徒の間に「松ケ尊塾」という言葉が定着してきており、生徒会活動の一環として松ケ尊塾をPRするポスターを作成したいと、生徒側から提案があった。松ケ尊塾の取組が特別なものではなく、松ケ丘中のスタンダードになっていくことが期待される。



生徒作成のポスター。松ケ尊塾についての説明が書かれている。

2 課題

松ケ尊塾を推進することにより、生徒が今までよりも意欲的・主体的に学習に取り組む姿が見られるようになったが、これらが定期テストや学力状況調査などの得点アップや、基礎学力の定着につながっていない現状がある。学習に取り組む姿勢の向上、入り口としての役割は果たしていると考えられるので、今後は私たち教員が教育活動内容の見直しや改善を図ることが求められる。また、最大限の効果を発揮するためには多くの人の協力が不可欠である。そのため、一定数の学生ボランティアが確保できるような工夫も必要である。

ここまでの学校と地域との関りを考えると、地域から学校への働きかけがほとんどであった。受け身であることが多かったものを、地域と学校が相互に連携する形にすることで、地域に根差した、地域に貢献できる生徒を育てることできると考えられる。よって、学校が地域に対してどのように貢献できるか、地域に還元することができるかを思案する必要がある。

V 今後の研究について

松ケ尊塾の取組の強化・拡大を図り、朝活動の視写や全校読み聞かせの継続、ギガタブを活用した生徒の学習活動の充実を図る。学力向上が目に見える形になるような方策として、夏季休業中の学習会や学習相談の在り方を見直し、学生ボランティアをはじめとした地域人材の効果的な配置や運用を工夫する。さらに、「何ができるようになるか」だけでなく「どのように学ぶか」の視点を取り入れ、各教科の授業改善に努めたい。

地域人材の活用について、令和5年度も教育講演会を実施する。今年度は、WBC日本代表・福岡ソフトバンクホークス近藤健介選手の父、近藤義男さんに講演を依頼し、本校の学校教育目標の副題である「みんなちがって みんないい」「人のために役立つ人間になろう」について、自己肯定感や自己有用感を得るために必要なことや困難に直面した際の対処法などを講演していただく予定である。

本校は令和4年度から5年度にかけて、千葉市教育委員会の研究指定を受けており、「カリキュラムマネジメントの推進」についての研究を進めている。これまで述べた松ケ尊塾の取組もその一環であるのだが、その内容は教育課程外のものが多かった。松ケ尊塾を教

育課程の中に組み込めるように、各教科で「地域」を 意識した授業を実践できるよう工夫・改善を図り、総 合的な学習の時間の年間及び全体計画をもとに、教科 横断的な指導ができるようにする。保健体育、技術・ 家庭科については、重点教科と位置付け、保健体育で 千葉おどり、技術科で下駄づくり、家庭科で浴衣の着 付けの実施を予定している。

松ケ尊塾がより一層生徒・職員・地域に根付いたものとなり、生徒の学力向上、学校生活の充実につながるよう研究を継続して推進していきたい。

(執筆責任者 教諭 山﨑 大輔)

地域のよさや課題に気づき、よりよい未来を創り出していける児童の育成

~ 「市民が楽しめる鎌ケ谷スタジアム」を計画・提案する実践を通して~

鎌ケ谷市立北部小学校 教諭 本 宮 淳 平

1 研究主題設定の理由

「やがて故郷に変わる街」

鎌ケ谷市のHPを開くと、このようなキャッチコピーを見ることができる。子供たちはそれぞれの地域に住み、地域に見守られ、成長していく。大人になって故郷を離れたとしても、また新しい地域で生活を続けていく。

しかし、今自分たちが住んでいる場所について「特徴」を説明したり、よりよくしようと何か行動を起こそうとしたりする子供はほとんどいないのが現状である。そこで勤務校では、子供たちが住む地域について多面的に知り、そのことでよさや課題に気づき、よりよい未来を創り出していける児童を育てたいと考えた。

令和2年度から4年度まで鎌ケ谷市教育委員会の指定を受け(実際に校内研究がスタートしたのは令和元年度から)、生活科及び総合的な学習の時間で「地域学」を中心に年間計画を作成していった。その際、勤務校独自に進めていく「地域学」を「鎌ケ谷学」と名付け、1年生から6年生までが自分たちの地域に関する学習に親しみをもてるようにした。「鎌ケ谷市民の鎌ケ谷市民による鎌ケ谷市民のための学び」であることを念頭に単元を構成し、それぞれの学年で学習したことを次年度に活かせるようにした。

以下が各学団の具体的な児童像である。

低学団:地域の自然や人とかかわり、新たな発見をすることで、子供の興味・関心が深まり、学区に親しみをもった児童を育成する。

中学団:地域の特徴や歴史を知り、興味・関心を広げ 深めることで、地域に親しみをもった児童を 育成する。

高学団:地域の実態と市民の願いを我が事と捉え、自 分の意見を再構築することで社会に参画して いける児童を育成する。

低学年の生活科の学習から「地域」をキーワードと

して、地域への親しみをもてるような「学習材」(児童 が学ぶための材料)を各単元に盛り込んでいった。

単元は通常の単元(ロング単元)に加え、「ショート単元」というものを学校独自に設定している。ショート単元の特徴は、以下の通りである。

【ショート単元とは…】

- ○1~3時間で完結する。
- ○ロング単元で活用する「思考スキル」や「表現スキル」の活用の仕方を学び、実際に使ってみる。
- ○ロング単元で学んだことをさらに発展させてみる。
- ○教科発展型の学習として。かつ「思考スキル」や 「表現スキル」を育成するもの。

本論文は、令和4年度に私が公開研究会で5年生に 授業を行ったショート単元の実践である。

当時ロング単元では、鎌ケ谷市の特産品である「梨」ではなく「梨以外の鎌ケ谷の農作物」に注目して、どのように魅力を発信していくかという学習を行っていた。多くの農家さんの力によって、梨以外にも様々な農作物が作られていることを知るところからスタートした。そして、それらの農作物を市民にどうアピールすればより多くの方々に知ってもらえるか、直接農家さんたちにプレゼンをするという計画であった。

そこで、ショート単元では「魅力を発信」「プレゼン」 という2つのキーワードをもとに、北海道日本ハムファイターズの2軍の本拠地である「ファイターズ鎌ケ谷スタジアム」を学習材として単元を設定した。また、本ショート単元は、国語の「提案文を書こう」(教育出版)の発展型の学習でもある。

野球に興味がない、試合を観戦したことのない児童に「こういう野球場なら遊びに行きたい!!」という想いを表現させる方法を学ばせたいと考え設定した。鎌ケ谷スタジアムに興味をもつと共に、6年生の「市民のくらしを叶える政治」(東京書籍)にもつながるような学習にしていくことを念頭に置いて計画した。

2 研究の目的

「鎌ケ谷学」の取組を通して、地域を学習材とした 授業づくりや、地域について学ぶ児童がどのような提 案をできるようになったのか考察する。

3 研究の実際

(1) 単元計画の経緯

2023年3月、北海道日本ハムファイターズの新球場「エスコンフィールドHOKKAIDO」が、北海道ボールパークFビレッジに開業した。北海道北広島市が半世紀以上前から構想を練ってきた壮大な「総合運動公園計画」と、日ハムの「新球場プロジェクト」という両者の思惑が一致したことで実現することとなった。

そこにはもちろん、たくさんの時間と労力と資金が使われている。プロ野球チーム1軍の本拠地であり、 広大な土地があったことも、実現可能となった要因の 一つであろう。

1軍が移転する北広島市と、2軍を有する鎌ケ谷市を比較してみた。

	鎌ケ谷市	北広島市
人口	約109,000人	約57,000人
面積	約 21. 08 km²	約118.5 km²

鎌ケ谷市の人口と比べると、北広島市はおよそ半分である。プロ野球の試合は、もちろん市外からも多数の観客が来場する。よって、市の人口だけでは比較できないが、少なくとも「ホームタウン」の人口は鎌ケ谷市の方が約2倍も多いのである。

1軍と2軍という違い、面積の違いなどはあるが、 鎌ケ谷市は北広島市に勝るとも劣らない市であると考える。そのことから、「ファイターズ鎌ケ谷スタジアム」 (通称:鎌スタ)の魅力を子供たちが知り提案することで、鎌ケ谷市をさらに発展させていく一助になると考えた。

(2)「ボールパーク」の視察

アメリカのメジャーリーグには、「ボールパーク文化」という考え方がある。野球をするための球場のみがあるのではなく、そこに行けば様々な「お楽しみ」が待っているのである。例えばプールや砂場、蒸気船の形をしたスタンド、試合がない日にピクニックができる場所もある。

この考え方を受けて、日本でも「北海道ボールパークFビレッジ」の開業以前にも仙台の「楽天生命パー

ク宮城」と広島の「MAZDA Zoom-Zoom スタジアム広島」も「ボールパーク」を謳っている。他にも「ボールパーク化構想」を掲げている球団もあり、今後増えていくことが予想される。

そこで、仙台の「楽天生命パーク宮城」を視察してきた。ここには2016年から球場横に遊園地「スマイルグリコパーク」を併設している。

6年生の「市民のくらしを叶える政治」(東京書籍)を指導した際に「自分が住んでいる市にどんなものがあったらいいか?」などと発問すると、多くの児童は「大きなプールがほしい」「大きな遊園地がほしい」などといった意見をたくさん出してくる。子供らしいと言えばそうなのだが、行政側がこういった意見を取り入れてくれることはほぼない。なぜなら、『総合基本計画』といったものが各市町村には存在し、それに基づいて5年後、10年後の市政を進めているからである。(この『総合基本計画』を学習材として活用して、市役所への提案を行ったこともある)

しかし、今回の「市民が楽しめる鎌ケ谷スタジアム」を計画・提案する学習では、そのような意見が出されたとしても「突拍子もない意見」ということにはならないのである。もちろん、できるかどうかは予算などの関係もあるが、子供たちの発想を広げることができると確信することができた。

また、「ファイターズ鎌ケ谷スタジアム」にも足を運んだ。現地では、試合を観戦していた観客30名ほどに声をかけ、「どうすればもっと遊びに行きたいと思えるか?」をインタビューしてきた。

以下は、その時の意見の一部である。

- ○カビーくん(マスコットキャラクター)を探せ (ディズニーの隠れミッキーのようなもの)
- ○選手とのふれあい
- |○縁日(夏祭り)
- ○「シャケダンス」を一緒に踊る
- ○走り方教室
- ○「交通の便」の改善
- ○バッティングセンター

幅広い世代に声をかけたことで、様々な意見を聞く ことができた。こちらの意見も、「野球観戦をしている 人たちの声」として、児童に紹介できる材料となった。

(3) 第5学年での実践(3時間の単元計画)

本単元は「ショート単元」であるため、3時間で完結するように計画した。令和4年度11月から12月にかけての実践である。

①鎌スタについて、テキストを用いて知る。



クラスには野球のこと自体よく知らない児童が多く 在籍していたこともあり、表紙も含めて6ページから なる「鎌スタテキスト」を独自で作成した。

第1時は、そのテキストを用いて学習を行った。



まず、プロ野球選手になるためにはどうしたらよいのか紹介した。しかし、高校生からプロになれる確率が約0.04%(1万人に4人)だと伝えると、プロの選

手になることがいかに狭き門であるか感じることができたようである。

次に、鎌スタの場所を地図で見つけ、学校からの行き方を伝えた。それから、施設について簡単に説明した。鎌ケ谷市では、3年生の「市内バス巡り」で鎌スタにも行くことが多い。しかし、昨年度の5年生は新型コロナウイルス感染対策の一環として、市内バス巡りが中止となってしまった。本来、その時に職員の方から詳しく話を伺うことができていたのだが、それができなかったのである。

さらに、鎌スタではどういったイベントをこれまで 行っていたのかを紹介した。5回裏の後のラジオ体操、 ファンが選手にヒーローインタビューをする、そして 夏にはプールも登場していたことを知ると、子供たち も少しは興味をもった様子であった。

そして最後に、「どんな野球場ならもっと遊びに行きたいか?」という問いに対するアイデアをメモさせて終了した。このメモを基にして、次時に自分の意見をまとめていった。

②「市民が楽しめる鎌スタ」とはどのようなものなの か考える。(公開研究会で授業)

第2時は、「市民が楽しめる鎌スタとは、どのようなものなのだろうか」という学習問題を立てて学習を進めていった。思考ツールを用いて、「イベント」「体験」「初心者」という3つの観点から身近なアトラクション施設と比較させることで、アイデアが出やすくなるようにワークシートを工夫した。

児童たちからは、次のような意見が出された。

- ○産業フェスティバル
- ○プロ野球選手に野球を教えてもらえる
- ○未経験者にバッティングを教える
- ○有名人を球場に呼ぶ
- ○ビンゴ大会を行い、ビンゴしたら球場内で食べられる料理の無料券がもらえる
- ○選手の誕生日に花火を打ち上げる
- ○鎌ケ谷野菜を試食できる
- ○選手へのインタビュー
- ○野球体験教室
- ○北部小学校に来てもらう

「産業フェスティバル」という意見を出した児童は、その理由として「農家さんの農作物も出品すれば、鎌

ケ谷産の農作物も売れるから」と、ロング単元での学習とも絡めて発表することができた。また、「鎌ケ谷野菜を試食できる」という意見の児童も、ロング単元での学習を活かし、鎌スタを「鎌ケ谷産農作物のアピールの場」と考えた。

その他の児童たちも、それぞれが「自分にはこういう想いがあるので、この意見を選んだ」と自分の言葉でまとめることができた。



③「こういう鎌スタなら遊びに行きたい」という提案 文書を作成し、動画に撮る。

第3時は、それぞれが考えた案をグループで絞って、 提案動画を作成した。動画では、代表者9名の提案を 理由と共に発表した。下の写真は、発表動画を撮影し た時の様子である。



本学年は2学級あり、どちらのクラスも同じショート単元を行った。2クラス分の動画と、5年生全員の提案文書をまとめたものを、私が鎌スタに持参し、職員の方に手渡した(動画は視聴後、データを返却していただいている)。もちろん、単元を計画する段階で職員の方にはご挨拶を済ませ、学習のまとめとして児童の提案を受け取ってほしい旨を伝えていた。

以下は、職員の方々からのコメントである。

私たちも、コロナ前は様々なイベントを考案し「地域密着型の野球場」をコンセプトとしていました。ただ、新しいアイデアがたくさんあるわけはないので、地元の小学生から提案してもらえたのは本当にありがたいことです。ぜひ、何かしらお返しをしたいです。

(4) 鎌スタへの提案の「その後」

鎌スタの職員の方々で相談をされた結果、「施設見学」のお誘いをいただいた。3年生で市内バス巡りができていなかったこともお伝えてしていたため、ぜひ一度来て施設を見てもらいたいとのことであった。

日程を調整し、1月下旬にバスに乗って鎌スタに見 学に行くことができた。

当日は残念ながら雨天であったことから、新人選手の自主トレの様子を見学することはできなかった(室内練習場で練習中であった)。しかし、その代わりに球場内を見学させていただいた。バックネット裏のアナウンス席、記者席、そしてVIP席も見学することができた。選手がグラウンドで自主トレを行っていた場合、こちらには入れなかったとのことであった。



その後、記者会見でも使用するという部屋に案内していただき、担当の方 (元プロ野球選手) と今回の取組や鎌スタの理念について話を伺うことができた。

日本ハムファイターズは、「水道・電気・ガス」のように「必ず必要なもの」ではありません。だからこそ、プロ野球選手のスピードある投球や、遠くまで飛ぶ打球などを見ていただき、「非日常」を楽しんでもらいたいと考えています。

この言葉に感銘を受けた児童が多かったようで、学校に帰って感想を聞いた時にこのことを話題にしていた児童が大多数であった。提案をした子供たちにとって、嬉しい「お返し」となった。

4 研究のまとめ



「鎌ケ谷」という地域素材を学習材とする「鎌ケ谷 学」のよさには、次のようなことが挙げられる。

- ○いつかふるさとを思い出すきっかけになる。
- ○他の地域に出た時に、「比較する」ことができる。(いいか悪いかということではなく、地域の特色を 比べることができるという意味で)
- ○ふるさとに誇りをもつ!

(できれば、いつかふるさとに帰ってきてほしい!)

このようなことを子供たちに教えることができるのは、「その地域」に赴任している教師だけなのである。 学校で学ばなければ、子供たちは学ぶ機会がない。そ ういう意味では、この地域学「鎌ケ谷学」は大変やり がいのある取組である。

教師が自分の足で学区を歩き、情報を収集し、単元を計画するというのは、教師自身もとても楽しいものである。それと同時に、子供たちも自分たちが住んでいる地域について知ることができるのは、嬉しい事なのだと考える。つまり、この学習は教師と子供たちにとってwin-winの学習と言えるであろう。本来、もっと行政側が率先して取り組んでもいいと思えるくらい「価値のある学習」であると考える。

以下は児童の感想の一部である。

- ○私は今まで野球に全く興味がなかったけれど、今回 の学習で少し興味をもつことができた。自分が考え たアイデアをやってもらえるか分からないけれど、 もしやってもらえるならぜひ試合を見に行ってみた い。自分のアイデアでなくても、友達のアイデアで も採用してもらえたらうれしい。
- ○せっかく自分たちが住んでいる市にプロ野球の野球場があるのだから、もっとたくさんの人に来てもらえるようにしたい。今回のことで終わりにせず、今後もどうしていったらよいのか考えてみたい。
- ○今年はこれまでに何度か「提案する」という授業をしてきた。最初はきんちょうして上手く話せなかったのだが、だんだんと慣れてきた。今回も、代表に立候補してカメラの前で話すことができた。自分たちが考えたことが実現するかもと考えると、やりがいのある勉強だなと思った。

また、年度の最初と最後に実態調査を行っているの

だが、「総合の授業は好きですか」「鎌ケ谷市の特色について、自慢できることは複数ありますか」という項目についてはいずれも肯定的な意見が9割を超えている。このことは、本学年だけではなく、他学年も同じ傾向がみられることから、生活科及び総合的な学習の時間で培ってきた「地域に対する自分たちの想い」や「自分たちがやってきた取組を発信するための方法」が児童に浸透してきている結果であると考える。

今回の取組では、自分たちが遊びに行きたくなる「鎌スタ」とはどのようなものか考える活動を通して、鎌スタが鎌ケ谷市のアピールポイントの1つであることに気づき、市民が楽しめる「鎌スタ」とはどのようなものか考え、自分たちの意見を提案することができた。

今回の取組以外でも、自分たちの意見を提案する学習を3度ほど設定し(農家への提案・縦割り活動に対する提案・給食センターへの提案)、年間を通して力をつけていくことができた。また、「ショート単元」を随所に活用して、ロング単元での学習を進めていくためのスキルを効果的に身につけさせたり、思考ツールの使い方を練習したりすることができた。これらのことがあって、2学期末にこのような実践を行うことができた。

「地域学」の学習は、「学習材(素材)」が身の回りにたくさん存在する。今回、私は仙台まで足を運んだが、本来そこまでせずとも、地域を知れば知るほど「子供たちに教えたい」「こんな切り口だったら、どんな反応を示すだろうか」と、教材研究をするのが楽しくなってくる。

私はこれまでに、SDGs (自分の立場でできること・ 市への提案)、キャリア教育 (特別支援学級での「興味 のある仕事」と「自分に向いている仕事」)の実践を「鎌ケ谷学」で行ってきた。自分の興味のあることでもあったことから、子供たちと一緒に楽しく学習を進めていくことができた。今後も、勤務する「地域」を学習材とした学習のあり方を模索していき、子供たちにとって価値のある実践を取り組んでいきたい。

【参考・引用文献】

- ○鎌ケ谷市立北部小学校令和2・3・4年度研究のあゆみ
- ○酒々井町教育委員会「酒々井学のすすめ」
- ○酒々井町教育委員会「いいね!酒々井」(酒々井学副 読本)

「主体的に学ぶ自立した学習者」を育てる理科教育へのアプローチ

~リスキリングを通して教師自身も「アクティブ・ラーナー」へ~

千葉市理科教育「アルテミスの会」 代表 千葉市立川戸小学校 校長 三 橋 勉

1 はじめに

アルテミスの会は自分たちで主体的に理科の授業研究 を行い、その成果を広く市内に還元していきたいという 思いをもった有志のメンバーが集まった研究グループで ある。全員が小学校に勤務し、千葉市初等理科教育研究 会の会員でもある。コロナ禍の3年間、母体である千葉市 初等理科教育研究会は活動中止となり、研究は停滞を余 儀なくされた。その間、学習指導要領が全面実施され「主 体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学び」(以下「個 別」)と「協働的な学び」(以下「協働」)という新たなキーワー ドが提唱されたが、それらについて思うように研究を進め ることができなかった。今年度、コロナ5類移行に合わせ、 今こそ「新しい理科教育」について学ぶべき時だと考え、 教師自身がリスキリングを通して「アクティブ・ラーナー」と なり、VUCA の時代を生きる子どもたちを「主体的に学ぶ 自立した学習者」を育成する研究を行い、その成果を市 内の理科教育発展につなげたいと考えた。

2 研究の目的

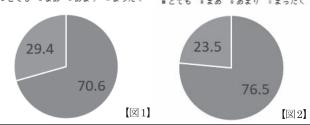
本研究は「主体的に学ぶ自立した学習者」である「アクティブ・ラーナー」を育てる理科教育へのアプローチについての課題究明を目的としている。そのために、まずは教師自身がリスキリングを行い「アクティブ・ラーナー」となることで研究を進め、自らの授業改善を通して、その研究成果を広く情報発信し、市内全体の理科教育の発展のために寄与することも併せてねらっている。

3 市内における「個別」「協働」の実態調査

まずは会員(17名)を対象にし、理科授業における「個別」と「協働」についての実態調査を行った。【図1~5】

「個別最適な学び」の理解度 「協働的な学び」の理解度

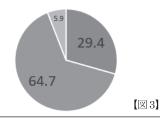
■とても || まぁ || ぁまり || まったく || とても || まぁ || ぁまり || まったく



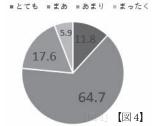
「個別は 70.6%「協働」は 76.5%が「まあ理解している」と回答し、ある程度の内容面の理解は進んでいることがわかった。

「個別最適な学び」の実践度

■とても ■まあ ■あまり =まったく

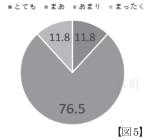


「協働的な学び」の実践度



「個別は「あまり」と「まったく」を合わせると 70.6% 協働」は「とても」と「まあ」を合わせると 76.5%であり、「個別に遅れが目立つ。

「個別最適」と「協働的」の一体的な充実



【図 5】の「個別と「協働」の一体的な充実の実施状況は大きく下がり、「あまり」と「まったく」を合わせると88.3%であり、まだまだ実践が進んでいない状況がわかる。

4 教師のリスキリング① 指導主事による研修会の実施

研究の指針を得るため千葉市教育センターから教育研究班の指導 主事を招聘し「主体的に学ぶ自立した学習



【写真1】指導主事による夜間の自主研修

者」に関する自主研修会を夜間に開催した。同センターでは「主体的に学ぶ自立した学習者」の要素を次の8つに定義づけしていることを学んだ。【写真1】

- ①自己の学習目標を設定する。(比べて問いを発見する)
- ②自己の学習計画を立てる。(学習の見通しを持つ)
- ③学習意欲をもって学習活動に粘り強く取り組む。
- ④自己の学習の様子をメタ認知(モニター)する。
- ⑤自己の学習を自己評価してより主体的に学ぼうとする
- ⑥学び方や学習環境を選ぶ。
- (7)学習に必要な情報や援助を求める。
- ⑧他者と議論し自分の意見と比較して良さを取り入れる。

上記の要素を理科の授業と関連付け「個別」と「協働」を一体的に充実させた取組について、自らの授業改善を通して会員相互に協力しながら研究を進めることとした。

5 8 つの要素を関連付けた授業実践

(1)実践1 川戸小学校6年「植物の成長と水の関わり」

①実践のねらい【主に取り入れた要素①②③⑤⑦】

本実践では「主体的に学ぶ自立した学習者」を育てるために「自由進度学習」を取り入れた単元構成とタブレット端末(以下端末)と一体化した授業を行った。授業に先立ちオープン学習の実践で有名な東浦町立緒川小学校【写真2】とICT教育の先進校である春日井市立高森台中学校【写真3】への学校視察に出かけ、ここで学んだことをもとに自校の実態に合わせて指導計画を立てた。



緒川小学校では一人ひと りの児童が自分のめあて をもって各自のペースで 自由進度学習に生き生き と取り組んでいた。

【写真2】緒川小学校の「個別」「協働」の自由進度学習の様子

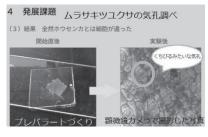


高森台中学校では日常的 に端末を文房具として活 用しており「個別」と「協 働」の学びのスタイルが確 実に定着していた。

②実践の内容

【写真3】高森台中学校の端末と一体化した授業の様子

単元の導入では自由進度学習のガイダンスを行い、まずは児童に単元全体の学習の見通しをもたせた。児童は単元の目標、時間、評価基準などについて、予め理解し、これから学ぶ内容や方法について教師と共通認識を持つことができた。授業では学習のベースとなる情報をすべてを学習用スライドにまとめ授業開始時に google クラスルームにて全員に配付した。ここに学習の成果(予想、理由、方法、結果、考察など)を書き込むようにさせた。全体ガイダンス後、児童は自分で学習計画を立て、各自のペースで主体的に学習に取り組んでいった。毎時間の終りには学習進度や感想などを振り返り、共同編集もできるスプレッドシートに記入し、相互参照できるようにした。また、予定した学習を終えた児童には、発展学習として自分で探究したいテーマを考え、実験・観察を行う時間



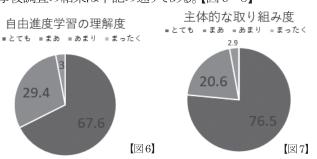
も設けた。これに より、単元を通して 学んだことをさらに 広げたり深めたり しようという意欲を 高めることにもつ

【写真4】児童が撮影し作成した学習スライド

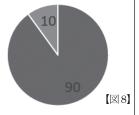
ながった。取組例として「青色染色液で染めたホウセンカの気孔は青色なのだろうか」「根や茎にも気孔はあるのだろうか」など、教科書には載っていないテーマについて、各自の興味・関心に合わせて意欲的に探究する姿が見られた。【写真4】

③成果と課題

自由進度学習は、教師が授業を主導する一斉型の授業とは異なり、児童自身が自ら学び進めていくことで「主体的に学ぶ自立した学習者」に近づけることができた。 事後調査の結果は下記の通りである。【図 6~8】



自由進度学習の希望度 ■とても ■まぁ ■あまり ■まったく



自由進度学習は一斉授業に比べ、全ての調査項目において肯定的な数値を示している。【図 6~8】「次の単元でも自由進度学習を希望するか」聞いたところ「とても」「まあ」を合わせて100%の児童が希望していた。

児童の感想からは「自分で計画を立てて調べられたのがよかった」「友達と協力してできたのがよかった」「自分が調べたいとことを調べられるのがよかった」など全体的に高評価であった。紙のノートではなく端末を活用したことについても「写真を取り込めるので便利」「手で書くより効率が良い」「自分でスライドを編集できるので楽しい」など自由進度学習との相性の良さも感じられた。

(2)実践2 緑町小学校 6年1もの燃え方と空気」 ①実践のねらい【主に取り入れた要素①②③⑤⑧】

本実践では単元の前半に「酸素、二酸化炭素、窒素といった気体が空気中に含まれていること」「それらの気体を一つだけ集めた瓶の中に火がついたろうそくを入れたときの様子から酸素には物を燃やす働きがあるが、二酸化炭素と窒素には物を燃やす働きがないこと」を学習する。そこから、物を燃やす前の空気と、物が燃えた後の空気の違いについて予想をし、石灰水や気体検知管で気体の増減について調べる実験を行う。実験終了後、瓶の中のろうそくの火が消えたことから児童は「瓶の中の酸

素が減ったから」という考えと、「瓶の中の二酸化炭素が増えたから」という考えの2つの考えに分かれ、火が消えた原因を酸素の減少と二酸化炭素の増加のどちらなのかを追究したいという願いを持った。自分たちで解決方法を考えさせたところ、瓶の中の酸素と二酸化炭素の割合を水上置換法で調整しながら実証していくこととなった。例えば「酸素と二酸化炭素に相反する性質がある」と考えた児童は、酸素と二酸化炭素を50%ずつ瓶に入れたり、「二酸化炭素の火を消す働きの強さを確かめたい」と考えた児童は、酸素を70%、二酸化炭素を30%入れたりするなど、児童の気体に性質に対する考えにあわせて「個別」になるように実験計画を立てた。授業では端末の有

効活用も図り、仮説や実験方法を確認した後にグループで動画撮影を行いながら実験し、後に大型テレビで結果を共有できるようにした。【写真5】



【写真5】端末で実験を撮影する様子

②実践の内容

学習問題 ろうそくの火が消えたのは、酸素が減ったことと二酸化炭素が増えたことのどちらが関係しているのだ ろうかについて予想を立てることで、まずは児童一人一人の立場を明確にした。同じ考えの児童同士で8つの実験のグループを構成し、自分たち考えを検証するための気体の割合を決定させた。実験時には、気体を集めた瓶の中に火がついたろうそくを入れるときの様子を端末で撮影しデータを提出させた。共有フォルダ内に提出された動画は、いつでも何度でも自由に再生することができるので、結果を整理し考察をする場面では、自分や他のグループの結果について繰り返し視聴することができた。

全体でのまとめの場面では、実験結果を大型テレビで映しながら酸素と二酸化炭素の性質に



灰 茶 の 性 質 に 【写真6】結果を大型テレビで共有する ついて全体で話し合いながら理解を深めた。【写真6】

③成果と課題

自分たちの考えを検証するための実験方法を考え、 検証することで主体的に学ぶ姿が見られた。また他グル ープの仮説を理解した上で動画を共有したことで、必要 感をもちなから動画を撮影、視聴するなど「協働」の姿も 見られた。主体的な学びを通して、気体の性質について の深い理解へとつながったと考えられる。だが、実験の動画を見た際に結果の判断において、曖昧さも見られたため、仮説を立てた際に結果の見通しをもたせることの重要性が感じられた。ろうそくの火が「燃えた」「消えた」とは、どのような状態を指すのか、どこで判断するのか、しっかりと共通認識を持たせることが必要であった。

(3)実践3 大森小学校5年16ののとけ方」

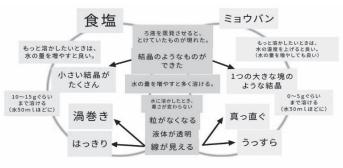
①実践のねらい【主に取り入れた要素①②③⑥⑦⑧】

本実践では、「主体的に学ぶ自立した学習者」を育てるために端末を利用し「ベン図」を効果的に用いる学習を行った。本学級の児童は、自ら問題を見いだし見通しをもって学習に取り組むことを苦手としている子が多い。そこで思考ツールである「ベン図」に学習内容を蓄積し、その内容をもとに問題を見い出したり予想や仮説を立てたりする際の根拠となるようにした。

②実践の内容

本単元では、「溶ける」という現象について追究していく中で、「物が水に溶ける量は水の温度や量に関係することや、溶ける物によっても違うこと」を理解させるこが学習指導要領に示されている。教科書では、「食塩」と「ミョウバン」を扱っており、これらの溶け方の違いについて、児童自らが問題を見いだし見通しをもって主体的に問題解決を行えるようにしたいと考えた。そこで今回は、「ベン図」にそれぞれの溶け方の共通点や差異点を整理しながら学習を進めることとし、書くことが苦手な児童でも、端末で「ベン図」を作成し、写真や動画を挿入することで容易にまとめられるようにした。【図9】

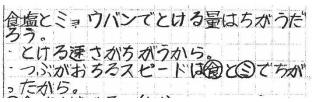
本単元の導入では、小麦粉・食塩・ミョウバンの3種類を 児童に提示し、かき混ぜたり数粒を水に入れたりしなが ら、溶けるかどうかを調べた。小麦粉は水の中に漂い残 るが、食塩やミョウバンは粒が目に見えなくなる。児童は、 これら3種類の共通点や差異点から、「溶ける」という現象 について捉えていった。さらに、食塩とミョウバンでも溶 け方に違いがあることに気付いた。ここで、児童に「ベン 図」を提示し、2つの共通点や差異点を整理しながら、溶



【図9】食塩とミョウバンをまとめた端末内の「ベン図」

け方の違いについて明らかにしたいという児童の目的意識を高めた。その後は、単元の学習が進むにつれて、「ベン図」には児童が学習した内容が、既習の知識として次々と蓄積されていった。

児童は「ベン図」により思考が整理しやすくなったため、 2つの溶け方の違いについて問題を見いだしたり、予想 や仮説の根拠としたりしながら、見通しをもって問題解決 に取り組む姿が見られた。以下に示す児童も、単元の導 入時の活動を根拠に、溶ける量の違いについて予想を 立てることができている。【図 10】



【図10】児童の思考の様子がわかるノート記述

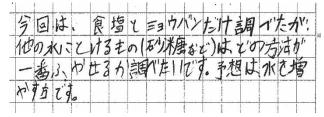
③成果と課題

端末内の「ベン図」を用いたことで、予想や結果を考察する際に役立ったと感じた児童が多くいた。【図 11】

「ベン図」を用いて学習したとき(人) 実験方法を考えるとき 実験結果を予想するとき 実験結果をもとに考察するとき 予想を立てるとき

【図11】学習後に児童を対象として行った調査の結果

ノートの記述を見ても、根拠を明確にして予想や仮説を発想できている児童が多かった。このことから、自ら問題を見いだし解決への見通しをもって学習を行えていることがわかる。それだけでなく、物によって溶ける量の違いが明らかになったことで、他の物の溶け方についても思考を広げる児童も多く見られた。【図 12】



【図12】児童の書いた振り返りノート

しかし、溶け方の違いに着目するあまり「溶ける」という 現象について理解が曖昧になっている児童もいたことも わかった。ろ液に溶質が残っているか確かめる方法を考 えた際に、誤答である「ろ液を顕微鏡で見る」と考えた児 童が、学級の3分の1もいたからである。溶け方の違いに ついては、授業のどの段階で指導し、正しい知識に修正 していくべきか、再度検討する必要がある。

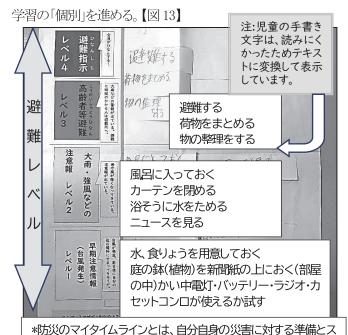
(4) 実践4 小谷小学校5年「台風と防災」

①実践のねらい【主に取り入れた要素①23678】

本実践で単元の前半に台風の動きや、台風によってもたらされる被害について学習し、後半では防災の方法について学んでいく。防災では*「マイタイムライン」(以下ライン)を児童一人一人が作成することで、「個別」を行った。その後、様々な家族構成や住居環境を設定し、そこに移り住んだときを想定した「ライン」の作成を班ごとに行い「協働」を取り入れた。このように「個別」と「協働」を単元計画の中に意図的に組み込むことで、「主体的に学ぶ自立した学習者」を育成しようと考えた。

②実践の内容

台風は発生から日本への接近、上陸まで時間があり、 しっかりと備えができる自然災害である。その特徴を踏ま え、事前に自分の避難行動を計画するラインを作成する。 ラインを作成するときには、家族構成や家族内で決めて いる災害時の避難場所、住んでいる場所に想定される災 害など、児童個人によって違う情報が必要になる。また、 台風の暴風に対する対策を講じる必要がある家庭、河川 の氾濫に備える必要がある家庭、家族構成により早めの 避難が必要な家庭など、作成されるラインも個人によっ て大きく異なる。このようにラインを個々で作成することで

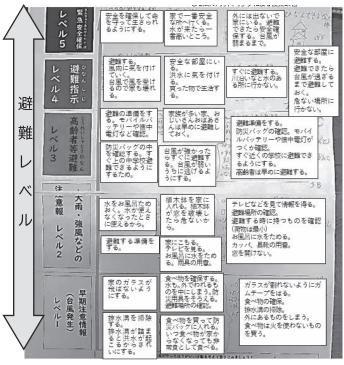


【図13】児童が個人で作成したマイタイムラインの一部

ケジュールや順序などを示したもの

作成したラインを児童同士で見比べることで、「協働」 進め、自身のラインをより良いものへと改善し、自分の住 環境では心配のない災害への対策も知ることができた。

また、自身のラインを作成した後に、将来この土地に暮らし続ける児童ばかりではないことを想定し、沖縄県那覇市、東京都墨田区、静岡県熱海市からグループごとに1か所を選び、自宅とは別の場所を想定したラインを作成した。この学習を加えたことで、「協働」の必要性がさらに高まり、個人のラインを作成した既習経験と比較、検討することで活発な話し合いが行われた。【図 14】



【図14】グループごとに作成したマイタイムラインの一部

③成果と課題

個別にラインを作成した後にグループごとに新たな設定のラインを作成させたことで、学んだことを生かしつつ、「協働」を進めることができた。また、ここでは普段の授業では自らの意見を積極的に発言しない児童も、自らのラインを参考にすることで、積極的に発言することかできた。こうしたことから、「個別」と「協働」の場を交互に意図的に設定することは、児童が主体的に学ぶために有効だと考えられる。ただし「協働」の場面では、少数ではあるが自分の意見を言えずに他人任せになってしまった児童が見られたため、指導の個別化をさらに意識して、個に応じた指導、支援を行っていくことで改善を図りたい。

6 教師のリスキリング② 「実験・観察会」の自主開催

千葉市初等理科研究会に企画提案し、教員のリスキリングを図るるため市内小学校教員を対象に希望参加型の「実験・観察会」を夜間に開催した。この研修会は会員以外でも自由参加することができるオープン開催とし、とくに若年層教員など授業に自信をもてない先生方のりス

【写真7】活気溢れる「実験・観察会」の様子



キリングを図ることを 目的とした。当日は オンライン視聴を含 めて 35 名の参加者 があり、夜間にも関

わらず会場校の理科室は活気に溢れた。【写真 7】大変 好評だったため2回目の「実験・観察会」も実施し、のべ 70 名ほどの参加者があった。研修会では自作した教材・ 教具や安全に理科実験を行うための指導方法の解説、 プログラミング学習教材などの実演なども行い、すぐに 役立つ授業のアイディアが数多く紹介されたため、参加 者同士で共に学びあうことができた。

7 研究全体の成果と課題

(1) 成果

①教師のリスキリングによる授業改善

コロナ禍で一斉休校となった際に「主体的に学ぶ自立 した学習者」の育成はとても重要なことだと感じた。こうし た児童を育てるために、まずは教師自身がリスキリングを 通してアクティブ・ラーナーとなり、授業改善を図ることが 必要であり、その学びの成果が「主体的に学ぶ自立した 学習者」の育成につながっていく事がわかった。

②教師も「協働的に学ぶ」良さを再認識

児童だけではなく、教員同士も研究仲間と「協働的に 学び合う」ことで、互いに刺激しあい成長することができ た。この学びの成果は、研究が完成した達成感と共に、 「さらに学び続けたい」という意欲や「学ぶこと、成長する ことの喜び」を改めて感じさせてくれることにもなった。

(2) 課題

①8つの要素をさらに理科授業へつなげるには

8つの要素を授業に取り入れることで「主体的に学ぶ自立した学習者」の育成につなげられることは実感できたが、教師中心の一斉授業から学習者が主体となる授業への転換は容易ではないと感じることもあった。児童一人ひとりの丁寧な「見取り」や端末の有効活用、複線型の実験への対応などの課題をこれから解決していきたい。

②本市の理科教育の発展へとつなげるには

これからも成果を還元するため、自主的な研修会を実施したり、作成した研究紀要を市内小学校へ配付したりする予定である。今後も情報発信を続けることで、より多くの学校で「アクティブ・ラーナー」を育成していきたい。

8参考文献「アクティブラーニング実践の手引き」 「アクティブラーニング深い学び実践の手引き」 田中博之(教育開発研究所)

中学校での自閉症・情緒障害特別支援学級における「褒める」「認める」ことの有用性 ~「日本一褒めちぎる特別支援学級」を目指して~

柏市立田中中学校 教諭 池 永 周 平

1. はじめに

本研究は、中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級において、「褒める」「認める」ことの有用性を検証した実践記録である。子供の成長過程において他者から「褒められる」、「認められる」ということが自己有用感を高め、その結果、自分自身を認めることができる自己肯定感を高めることができる。他者評価から自己評価という順番の重要性を検証した。

2. 実践の背景(褒める・認めることの必要性) ①マズローの基本的欲求階層図の観点

マズローの基本的欲求階層図の中では、自己実現のためには「承認欲求」が必要だとされている。この「承認欲求」とは、所属する集団の中で高く評価され、自分の能力を認められたい、という欲求である。承認欲求には、他者から認められたいという「低位の承認欲求」から、自分で自分を承認できる「高位の承認欲求」へ向かう、段階の重要性も述べられている。(参考・引用文献1)

特に日本は、同調圧力が強い文化であり、他者からの視点の比重が大きい。そのため、私は何よりも第一段階として、他者からの承認が重要だと考える。

②発達障害児の自尊感情の観点

中塚ら(2014)の研究では、自尊感情の低下が二次 障害の原因となることから、以下のような支援者の 関わり方の重要性を訴えている。

「当事者の成功体験を増やし、それに対する他者からの前向きな評価により自分自身にプラスの評価を感じさせることが大切である。青年期においては、自分を理解してくれる存在が必要であり、特に大人が発達障害児に寄り添い、褒めたり勇気づけたりするような言葉かけが自尊感情形成に重要となる。」(参考・引用文献2)

③教員側の二次障害に対する意識

国立特別支援教育研究所「発達障害と情緒障害の 関連と教育的支援に関する研究」(2014)の調査結果 によると、子供の気になる状態として、二次障害の 視点を持って子供を支援している教員が少ないことを危惧している。この調査では、中学校においては、「受容的な態度」で接するよりも、望ましい行動を示す「指導的な態度」の対応をとる方が多かった。この調査結果は、私たち教員が率先して、子供に受容的な態度で接し、子供の自己肯定感を下げないことが重要であることを示唆していると捉えられる。 ④日本の文化的背景

日本は「謙遜」を美徳とする文化でもあり、大規 模調査では、他国と比べて若者の自己肯定感が低い ことが示唆されている。(参考・引用文献4)

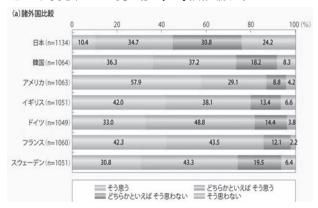


図1「自分自身に満足している」について

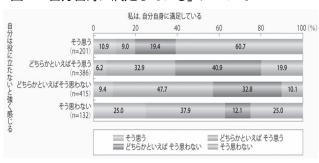


図2「自分自身への満足感とその他の自分自身へ のイメージとの関係」について

図1,2から,日本の若者(13歳~29歳)は、諸 外国に比べて、「自分自身に満足している」と回答す る割合が低かった。さらに「自分が役に立たない」 と強く感じている若者においては、「自分自身に満足 している」と感じている割合が低かった。このこと から、日本の若者の特徴として、自己有用感と自己 肯定感の間に何らかの関係があると考えられた。

3. 実践における仮説

- ①子供の自己肯定感を高めるためには、まずは他者 から褒められ、認められ、自己有用感を高めるこ とにより、挑戦してみようとする意欲に繋がる。
- ②挑戦から小さな成功体験を経て、自己肯定感が高まることに繋がる。

つまり、子供の情緒面への働きかけの順番として、 自己有用感を高める→自己肯定感が高まる、という点 に着目することで各々の力を高めることができる。ま た、褒め方・認め方を個々に応じて工夫することでよ り効果的に高めることができると考えた。

4. 実践方法と内容

(1) 実践のキーワード (褒める前の大前提)

①信頼関係が重要。

「褒めれば誰でも伸びる」わけではない。信頼できる大人から褒められ、認められるからこそ伸びるのであって、上辺だけで褒めても子供は素直には喜ばない。子供を褒めるためには、日ごろからの良好なコミュニケーションが欠かせない。ただ褒めるだけでなく、日ごろのコミュニケーションから信頼関係を築く努力をすることが重要である。

②褒め方は十人十色。子供の実態把握が重要。

子供の性格や特性に応じて、「褒め方」を工夫する ことが重要である。特に中学生においては、思春期 という視点も加味して、生徒の特性を考慮して褒め たり、認めたりする必要がある。

③『心理的変容』から『行動的変容』への着目。

例えば、子供たちにとって、登校後すぐの時間帯は反応が緩慢であることが多い。この時間には、朝学習の大切さを訴え続けるよりも、前向きな言葉で褒め続けた方が、結果として、自分の意志で学習に向かうことが多くなると考えている。

また、学校への行き渋りに関しては、登校させる 努力よりも、その背景に着目して、受容的な態度で 接し、子供の気持ちを尊重し、認め続けることで、 自分から学校に行ってみようかな、と自立に繋がる ことが多い。学校において、褒める・認める機会を 続けることで、子供同士においても、受容的な態度 が生まれ、助け合う機会が増えていくと考えている。

(2) 実践方法

①「褒める・認める」の工夫

文献などを参考にして私が実践してきた,褒め方・認め方の工夫を一部紹介する。

(a) I メッセージ

「あなたが○○をできるようになって私は嬉しい」というように、主語を「私」にする。自分が他人に与える影響を確認でき、自分の存在価値を確認できることを目的としている。

(b) チーム褒め

一人よりも二人、二人よりも三人、四人と同じ 言葉を言われていくと、徐々にその気持ちに向かっていってしまうという、人間の特性があると考える。つまり一人だけが褒め続けるのではなく、教員がチームとなって、同じ言葉で褒めることで、子供に勇気を与えることができると考える。

(c) 第三者褒め→認める

「○○先生も、こんな風に言っていたよ」という、心理学の「ウィンザー効果」を応用した褒め方。本人から褒められるより、第三者から褒められる方が信憑性を感じられる。噂話のほうがより真実味を感じてしまうように、第三者の意見をプラスして子供のできている部分を認める。

(d) すぐ褒め

行動分析学では、人はある行動をしてから「60 秒以内」に褒められると再びその行動を繰り返す 確率が高まると論じている。(参考・引用文献5) 子供の行動の変化があった場合には間を空けずに、 すかさず声をかけ、行動を褒め、認めるように努めた。

(e) 比較褒め→認める

子供自身の「過去の自分」と比べて、良くなった・成長した部分を、具体的に褒め、認める。その際は大げさにせず、客観的な事実を伝えるように心がけた。

(f) つぶやき褒め→認める

あえて抑えた言い方で相手に伝える。聞こえる か否かという声量で「すごいなぁ」などとつぶや く。驚きに思わず漏れた言葉により、真実味を持 たせることができると考える。

<u>(g) リフレー</u>ミング→認める

子供のネガティブな部分でも、ポジティブな言葉で言い換えて、新たな視点を探し、ポジティブな部分を認める。例えば登校の行き渋りがあっても、「自分の気持ちを話すことができたね」などと

できている部分で認めていく。

(h) 2回褒め

「うん,書いてる書いてる」「おっ,読んでる読んでる」など,行動をそのまま2回続けて伝えると,子供の行動を承認する言葉に変わる。現在,遂行できている行動を「実況中継」することにより,子供の行動をポジティブにフィードバックできると考える。

(i) 時間差褒め

帰りの会の振り返りの時など、時間を空けても う一度褒めることで、行動を強化する。特に、先述 のすぐ褒めを継続すると、子供は褒められることに すぐに慣れてしまうが、だんだんと褒めるまでの時 間を空けることにより、その効果を維持するねらい がある。

②自分を相手を「認める」自立活動

年間で12回程度、「人の多様性を認める」というテーマの自立活動を取り入れ、「ありのままで素敵」というメッセージを伝え続けてきた。NHK for schoolの『ふつうってなんだろう』という動画素材などを活用し、様々な発達障害、困り感、マイノリティについて触れた。「こんなことに困っている人がいる」、「自分にも当てはまることがある」、「気持ちがわかる」、「こんな風に接してあげたら良い」と、多様性を考えるだけでなく、受け入れ方や自分自身についても考える時間を作った。さらに、日常生活とも繋がるように、「こんな時はどうしたら良い」と具体的な場面も想像できるような工夫を行ってきた。

この自立活動を展開することで、日常の授業の際 にも「行き渋ったって、字が書けなくたって、あり のままで大丈夫。」という子供同士の受容的な態度を 一貫することができた。

【自立活動で取り上げてきたテーマ】

LD, ADHD, 聴覚過敏, 感覚過敏, 自閉症スペクト ラム, ディスレクシア, HSP, LGBTQ

(3) 具体的実践内容

生徒の特性に応じた,褒め方・認め方の例を一部 紹介する。

生徒Aさんのケース

①実態

不安が強く、一つ不安なことを思い出すと、次か

ら次へと不安が連鎖する。特に登校時には、家を出る前に不安なことを思い出すと登校までに時間がかかる。

②実践内容【登校、交流クラスへの行き渋り】

(a) Iメッセージ

心理的に安定していない中でも、教員に対して 話ができるようになった時は、「話してくれて良かった、先生は安心したよ。」と伝える。

(b) リフレーミング褒め

不安になって身動きが取れないことに焦点化するのではなく、「正直に自分の気持ちを話せて素晴らしいね」と、行きたくない気持ちを誰かに話せたことを認める。

(c) 比較褒め

子供のメタ認知を高めるため、「気持ちレベル」を10段階で表出するように促している。レベルが言えた際に、「前回は、レベル〇だったけど、ちゃんと今の自分の状態を考えて、レベル△って答えられたね」、「前回はレベル8で行けなかったけど、今回はレベル8でも遅れていけたね」、などとポジティブなフィードバックをする。

(d) 時間差褒め

帰りの会の準備で連絡帳を書いているときなどに、ふと思い出したように、「そういえば、今日は 遅刻しても学校に来られて良かったね。今、すご く良い表情しているよ」と、今日の出来事を振り 返って時間差で褒める。

生徒Bさんのケース

①実態

交流クラスで、みんなの輪の中になかなか入れない。発表など人前での自己表現は苦手である。 行事なども参加できないことが多い。

②実践内容【合唱コンクールに向けて】

(a) つぶやき褒め

帰りの準備で連絡帳を書いている際などに、 ぼそっと「今日も歌声練習行けたなぁ、嬉しい なぁ」と本人に聞こえるか聞こえないか程度の 声で褒める。

(b) 第三者褒め

「昨日の歌声交換会で歌っている姿がカッコ よかったって○○先生が言ってたよ。」と伝える。

(c) I メッセージ

「リハーサルの時のD君が立派な姿で歌ってるのを見て、先生は感動したよ。」と、Dくんが歌えていることが周りにも影響していることを伝える。

5. 成果・考察・課題

(1) 成果 (子供たちに見られた変容)

①朝学習への前向きな姿勢が見られた。

「朝,ちゃんと勉強しないと」,「学習は大切だから頑張って」という声のかけ方ではなく,「このクラスは毎日漢字テストができて良いね」,「今日も漢字テストできて良いスタートだったね」とポジティブな視点に変えたところ,子供たちの間に,「自ら取り組もうとする主体性」が生まれてきたと感じている。このことは、朝学習の大切さを教えていくよりも効果があったと考えている。

②意欲的に挑戦する姿が見られた。

小学校では、歌やリコーダーのテストなど、人前 での発表に関して苦手さを示していた子供が、昨年 度は歌のテスト、合唱コンクールと人前に立って発 表することができた。

また、不安が強く、新たな行動に移すことが苦手な子供が、総合学習の時間で交流クラスでの発表も挑戦でき、クラス代表に選ばれることもあった。その他の子供にも、苦手なことにも挑戦しようとする姿を見ることができた。

③別室で過ごす→集団へ参加することができた。

小学校の頃は教室に入ることが苦手だった子供が、 昨年度は交流学級での授業にも、参加するだけでな く、学級の係などもクラスの仲間と一緒に行うこと ができるようになってきた。周囲とのコミュニケー ションの量も増えた。

④自分の「苦手」を受け止める場面が見られた。

聞いて理解することが苦手な子供が、中学校に入り一斉授業の中での教師の話や、「聞き取りテスト」などの場面で学習内容を理解できず、落ち込むことがよくあった。そんな彼が、昨年度末「目で見て、覚えることができるから頑張りたい」という旨を手紙に書いてくれた。自分の苦手に対し、きちんと向き合い、さらに前向きな姿勢を見せてくれた。

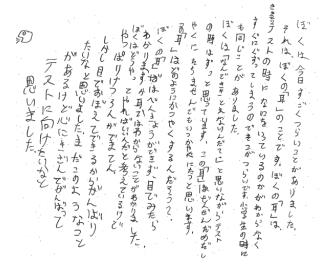


図3 自分の「苦手」を受け止めた生徒の手紙

(2) 考察

今回の実践を通して、「Iメッセージ」は子供と教員の信頼関係を作る上でも非常に効果的だと実感した。 子供を「褒め・認める」ことは、子供との信頼関係の 構築において重要だと実感することができた。

また今回の実践を振り返ると、改めて、思春期の子 供たちは「他人からの見え方」を気にし、周囲を意識 していることを感じた。学習に取り組みたがらないこ とも、登校・交流クラスへの行き渋りも、その前提に は、自分に自信が無く、他人の目を気にしていること が影響していると実感した。だからこそ第一に、他者 評価である「低位の承認欲求」が必要不可欠であると 実感することができた。私たち教員が子供を褒める・ 認めることは、子供の安心感や、自己有用感につなが ることを自覚し、実践の中でより意図的に取り入れて いく必要があると考えている。そして、そのことが結 果として、子供の挑戦する勇気となり、成功体験を増 やし、自己肯定感の回復や向上に繋がっていくのだろ う。それは、合唱コンクールや期末テスト、総合学習 での発表など、一つ一つをやり遂げた後の子供たちの 笑顔が何よりもの証拠である。実際に子供たちからも 「頑張って良かった」、「自分の成長を感じる」などと、 肯定的な自己評価をたくさん聞くことができた。

同調圧力が強く、他人の目を気にしやすい我が国の 文化の中で自己肯定感を高めるためには、「自己有用感 も必要である」、と実感している。つまり、「他者評価 →自己評価」への流れも重要だ、ということである。 本実践を振り返ることで、私たち教員が「褒める・認 める」ことを大切にする背景には、子供の動機付け、 という意味合いだけではなく、自己有用感の獲得や向上から、自己肯定感の回復や向上に繋がる、という自己有用感と自己肯定感の繋がりの存在を改めて認識しなおすことができた。

(3) 課題

①実践の効果評価

(a)「褒めた」ことだけの変化ではない。

子供の心理的・行動的変容については、教員や 子供同士の関わり、その日の体調など「環境要因」 も大きく影響する。今後は「環境要因」にも目を 向けて、実践を継続していきたい。

(b) 長期的な実証ができていない。

今回の実証では、主に中学1年生の変化、いわゆる「中1ギャップ」を埋めるための支援が中心となった。年齢が上がるにつれて褒め方も変わっていくことは当然であり、卒業に向けた子供の変化も、より詳細に把握する必要がある。「褒め方・認め方」の変化、生徒自身の変化を長期的な視点でも実践研究を続けていきたい。

②褒めることのデメリット

褒めることのデメリットは、時に「命令」になってまうということである。

「褒め方」の効果は、2種類に分かれることを実感した。それは「認める」褒め方と、「評価する」褒め方である。「評価する」褒め方は、時に、「それは良いね」が、「それでないと良くない」という意味をもってしまうことになりかねない。つまり、「こうしなければならない」というメッセージとなり、子供の選択の自由を奪う可能性があることに気づくことができた。私たちは「褒める」という行為がもつ、複数の側面を常に理解し、場面や状況に応じて使い分けていく必要がある。今回の実践で褒めることのメリットを大いに感じたが、デメリットついても着目していかなければならない。

6. おわりに

今回の実践を通して一番に思うことは、「褒めすぎる 心配は無い」ということである。もちろん、「褒める」 ことだけが教育ではない。褒めるだけでは通用しない 場面も多々あり、褒めても効果が無いこともある。し かし、「褒めすぎることのデメリット」ばかりに視点を 置くことなく、次世代の子供たちを支えるためにも、 ほめちぎるほどの他者評価を与えるべきだと考える。 最後に、坪田(2021)の著書、「『人に迷惑をかけるな』と言ってはいけない」によると、「褒める」には大きく分けて3種類あるとされている。①行った行為に対して褒める「doing 褒め」、②学級委員や委員長など、持っている地位を褒める「having 褒め」、③ありのままを褒める「being 褒め」である。子供たちが向かっていく社会においては「doing 褒め」と「having 褒め」がほとんどである。親ではない立場の人間から「being 褒め」を受ける最大のチャンスは学校である。「being 褒め」を軸とし、子供のありのままを受け入れ、ありのままの自分を好きになれるような子供を育てていけるような教員になりたい。

参考文献・引用文献

- 1) A. H. マズロー「人間性の心理学」1987 年産能大出版
- 2) 中塚, 片岡「青年期における発達障害児の自尊感情 回復に関する実践研究」2014年 鹿児島大学教育学 部教育実践研究紀要
- 3)国立特別支援教育研究所「発達障害と情緒障害の関連と教育的支援に関する研究~二次障害の予防を考えるために~」2012年 研究成果報告書
- 4) 内閣府 HP「令和元年版 子供・若者白書 特集 1 日本の若者意識の現状〜国際比較からみえ てくるもの〜」
- 5) 杉山尚子「行動分析入門」2005年 集英社
- 6) 文部科学省 IP「自己肯定感を高め、自らの手で未来 を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、 家庭、地域の教育力の向上」「諸外国と比べた我が 国の子供たちの自己肯定感」
- 7) 坪田信貴「才能の正体」2018年 幻冬舎
- 8) 坪田信貴「人に迷惑をかけるなと言ってはいけない」 2021 年 SB 新書
- 9) 鈴木義幸「コーチングのプロが教えるほめる技術」 2009 年 日本実業出版社:
- 10)加藤光一「ほめちぎる教習所のやる気の育て方」 2018 年 KADOKAWA
- 11) 平岩幹男「発達障害の子どもを伸ばす魔法の言葉かけ」 2013 年 講談社
- 12) 岡崎大輔「やり抜く子と投げ出す子の習慣」 2021 年 明日香出版社
- 13)川上康則「通常学級での特別支援教育」 光村図書 (web magazine)

(浦安市立入船中学校の) 生徒が自ら学び、自己肯定感・自己有用感を高める実践

~自尊感情が深まる指導の在り方~

浦安市立北部小学校 校長 西澤 健二

I はじめに

本校は昭和56年に浦安市4番目の学校として、9学級319名で開校した。学校近くの堤防の先は、かつて「べかぶね」の入船場や出船場で賑わっていたなど、歴史深い地域に存立する。3度の学校分離を経て、学区内の生徒数は減少したが、小規模学校選択制度の導入により学区外からの生徒を多く受け入れる学校となり、現在は市内各地域から生徒が集まっている。令和3年度は44%、令和4年度は47%の生徒が学区外から通学し、新たな出会いを経験する中で、人間関係を構築し、再スタートを切る大きな節目となっている。

経営の大目標を「生徒の未来への責任を果たす」と定め、授業改善をはじめ、コロナ禍においても「ピンチをチャンスに」の考えのもと、不易と流行・継続と刷新の視点から教育課程の在り方を精査及び工夫している。あらゆることを見極めながら焦点を絞って課題を追及し、深め、予測困難な未来に向けて、実態に応じた教育活動の展開を心がけている。

市内唯一、1小学校と1中学校の連携環境と、3つの 園における園小中の連携を一層重視し、特徴ある教育 活動を展開している。また、生徒スローガンに「入中魂」 「凡事徹底」「構え」の3点を掲げ、学校生活の指針と して位置付けている。

本校経営の特徴の一つとして、学校の成長と課題への継続的対応が挙げられる。歴代の校長の想いが具体的に引き継がれ、校長が変わるとともに運営が一転することがなく、常に連動した具体的な運営が続いている。これも伝統の深さと重みや教育の一体性を感じ取る一面である。

Ⅱ 研究の実際

1 生徒の実態

学校教育目標を「豊かな心 深い思考 逞しく向上」 ~夢を目標に変え、しなやかに生きる生徒~とし、予 測困難な未来を「しなやかに生きぬいていく力」の育 成を本校教育の柱としている。

令和4年度の全国学力・学習状況調査にある生徒質問紙(7)「自分には良いところがありますか」という問いに対して、令和4年度は全国平均より1.6ポイント低い結果となった。この結果は本年度に限ったことではなく、近年続いているものであり、最も好転させたい部分である。

本校は人間関係の構築に課題を抱えている生徒が少なくない。自らの夢を目標に変え、実現に向けて努力するための自己肯定感を高めさせ、有用感へと繋げ、いかにして挑戦の心を育んでいくかについて、重要課題となっている。また、全体的には人との関わりを中心とする教科学習への関心も下降の傾向にある。多岐にわたる日々の教育活動において、話し合い活動を核として、授業改善や特別活動の活性化に向けて、より積極的に臨む必要がある。教科に特化して見れば、国語への関心低下が見られる。国語科の指導方法と合わせて、分析・見直しを行うとともに、教育活動全般に必要な言語活動の充実を図らなければならない。

2 研究仮説

本校の学校教育目標「豊かな心・深い思考・逞しく向上~夢を実現に変え、しなやかに生きる生徒~」に基づき、生徒の実態から、主体的に自ら学ぶための意欲を喚起するとともに自治による取組を重視する必要がある。また、その過程を肯定的に評価することで自尊感情が芽生え、自己肯定感・自己有用感は高まり、夢を目標に変え、実現に向けて努力するのではないか」と考え、研究主題を設定した。

3 研究主題

自尊感情を深め、自己肯定感を高める指導方法 の工夫~生徒の主体的な学びを通して~

4 研究内容

(1) 教職員の意識改革と柱づくり、ベクトルの一体化・チーム入中の構築

- ① 教職員意識調査から SWOT 分析をもとに柱立て 教職員の想いと校長の想いの合致を図り、道標を見 出し、実践へと繋げる。
- ② 定期便りと説話、そして学年・学級における指導「校長室だより」と「校長の説話」を配付し、「教職員の意識改革と柱づくり、ベクトルの一体化」を図る。教育に必要な事項や校長の想い等の熱を伝えることで、教職員の自己肯定感を高め、それを生徒の自己肯定感の高まりに反映させる。
- ③ 定期テストの業者導入と指導時間の確保 「生徒の主体的な学びを通して、自尊感情を深め、 自己肯定感を高める」ためには、生徒の振り返り(自 己評価)と教師による適切な評価が不可欠であり、 単元ごとに適切な評価を行うことは欠かせない。た だ、それを実施するにあたっては、教師の仕事量も 考慮しながら推進していく必要がある。そこで、今 年度は、第1段階として、教科を特定し、定期テスト の業者導入を試みる。このことについては、様々な 時間の確保に留まらず、中学校における評価の二期 生や単元テストの導入及び定期テストの在り方の見 直しについても連動させ、既存の固定観念からの脱 却を図っていく。

第1段階:社会科の定期テストの業者導入 第2段階:社会科の定期テスト+単元テスト

2段階: 社会科の定期アスト+単元アスト

他教科の定期テストの業者導入 第3段階:他教科の定期テスト+単元テスト

(2) 生徒の自尊感情を深め、自己肯定感を高める教育 活動の推進

- ① 卒業論文の導入
- ア 未来に向かって夢を持たせ、卒業後の人生に展望 を持たせることで、自尊感情の深まりと、自己肯定 感及び自己有用感の意識向上を示唆する。
- イ 本校は、私学と公立の受験者は、ほぼ同数である。 高校入試の時期が異なり、全生徒が最後まで意欲的 に学校生活を過ごさせることも大きな目的である。
- ② 入船中学校応援歌(入中応援歌)の作成 自己肯定感形成へのカギの一つは「郷土愛や愛校 心」であると考える。また、変化の激しい予測困難 な世の中を生き抜く心的支えとして応援歌を生徒の 手で作り、苦しい時こそ成長する気概を持たせ、母 校愛が自身の成長の糧となる土台を作る。

5 研究実践

- (1) 教職員の参画意識改革と柱づくり、ベクトルの一体化
- ① SWOT分析の活用と参画意識の高揚
- ア アンケート調査(令和3年度)をもとにSWOT 分析を行い、分析結果にもとづいて、教職員小集団 【チーム会議】を編成し、各チームでファシリテーションの手法を用いた話し合い活動(協議)を行う。 その結果を今年度の経営方針に生かし、ともに創る 学校を意識させた。ただ、日々のコロナ対応における多忙化や感染防止の観点から、チーム会議を割愛して課題設定に向けた生徒の重点を絞り込んだ。

今回、本手法を活用して、全教職員の想いや考え を集結し、一人一人が経営参画意識を持ち、全ての 教育活動を自分事として捉え、それぞれが自らの正 しい判断で指導にあたれる素地を構築した。

イ 教職員アンケート調査による分析の結果

●生徒 ○教職員 □保護者 △その他 (内部環境)

強み(S)

- ●入船小学校と隣接している(連携しやすい)。
- ●学習意欲・理解力ともに、平均値以上の生徒は比較的多い。
- ●攻撃的な生徒は極少数で、全体的に温和である。
- ●リーダー層の潜在数は多く、物事を批判的な視点 から捉える生徒の割合は比較的少ない。
- ○同僚性が高く認め合う風土がある。
- ○仕事に意欲的で教育への情熱が強い教職員数の 割合は高い。全体的に協働的で活気がある。
- △不易と流行を見極める絶好の時期と捉える。

弱み (W)

- ●自己肯定感・自己有用感の低い生徒の割合が高い。 (県全体の傾向であるが本校の割合は比較的高い)
- ●自主性・主体性に乏しい。人間関係の構築を苦手 とする生徒数の割合が高い。
- ●集団としての満足感は中程度である。
- ●学力の2極化が進み、学習内容を理解できない生徒が多数通常級に所属している。
- □学校への要求が必要以上に高い保護者が一定数 存在する。

△コロナ禍で活動に制限がある。

(外部環境)

機会(O)

- ●44%の生徒が学区外から登校している。
- ●公共交通手段が充実し、学区外も通学しやすい。
- ○学区内の生徒は自宅と学校が近く、地域の危険箇 所等が少なく、人の目が届きやすい。
- ○学校が落ち着いた住宅地に囲まれている。
- △地域のポテンシャルは高く、外部講師等の地域と のつながりが期待できる。

脅威(T)

- ●44%の生徒が学区外から登校している。
- ●不審者対応等、不測事態への対応範囲が広い。
- ○保護者同士の繋がりや地域愛は中程度である。
- △歩道は整っているが幹線道路が近く、交通量が 多い。事故に注意する必要がある。
- △近隣の駅周辺が学区であり、夜間の人出が多い 日がある。近隣への外部流入も多い。

△自然が少ない。

以上の結果を受けて、経営理念の柱を「1 挑戦 2 凡 事徹底 3 構え 4 自治 5 経営参画」とし、教職員が生 徒の自尊感情が高まる指導に向けて、生徒自身による 課題解決の取組重点を次の通りに設定した。

ウ 課題解決に向けた生徒の活動重点

令和4年度 活動重点

(コロナ禍においても工夫して)

「課題を自分事とする」

- 1 生徒が自ら課題を見出し、解決のために話し 合い活動を活発にし、伝え合い、認め合い、 深め、高め合いながら自分の考えを再構築さ せ、集団の考えとして合意形成し、意思決定 に導く。
- 2 決定事項を目標に変え、自治的な活動を組織 的に活発に行い、具体的な取組で個と集団の 質を高める。

「PDCAサイクルの活用、協働体制の構築」

- 3 集団の中で自分を見出させ、思考力・判断力・ 表現力、そして意思決定力を育ませ、自己実 現につなげる。
- ◎1~3を通して生徒の自己肯定感・自己有用感を高め、夢を目標に変え、その実現に向けて、「しなやかな力を持って挑戦し努力を継続できる」ための土壌を培わせて卒業を迎えさせたい。
 - ➡「生徒の未来への責任」

工 取組方針

経営手段を平常時のボトムアップと緊急時等のトップダウンに分け、前者の経営参画については、学校教育目標の達成に向けて、学年経営や学級経営、組織の活性化やOJT、生徒会や学級学年の主体的な自治活動を主軸に取組を具現化し、本校生徒の課題解決と教職員のチーム意識の強化につなげている。

② 定期だよりの発行(全19号)

一番効果的だったのは、7月号で全職員に、感謝のメッセージを伝えたことだった。夏休み前に行うことにより、自己の振り返りと2学期の実践意欲、一人一人の存在感をお互いに意識し、協働体制の構築につながった。 (7月号から一部抜粋)

- *一人一人の困り感に寄り添う通級指導教室の丁寧な日々の運営に感謝(通級指導担当)
- *学校を綺麗な花で飾ってくれた。いつも清々しい環境をつくってくれて感謝(用務員)
- *適切な事務と素晴らしい学校の窓口に感謝(事 務室)
- *心を支えるカウンセリングに感謝 教員まで支えてくれて感謝(SLC,SC)
- *本場の英語でこどもの英語力と意欲を伸ばしてくれてThank you! (ALT)

③ 定期テストの業者導入と指導時間の確保

ア 定期試験作成に係る業者委託「社会科」の試行 学習指導要領には『我が国の国土と歴史、現代の政 治、経済、国際関係等に関して理解するとともに、調 査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技 能を身につけるようにする。』と書かれている。それは、 先の内容の解釈にとどまらず、社会科教員としての経 験から、「最低限の知識事項をインプットすることが考 えを深めていく土台になる」と理解している。次の段 階は、それを実際に使って考える機会をもつことが大 切になる。また、受検では一問一答形式の知識問題は 出題されたことはない。このことから、定期テストの 問題を作成するにあたっては、普段の授業や受検にあ わせた『社会的な見方・考え方』を意識した問題を作 成するべきであることがわかる。但し、この『社会的 な見方・考え方』を意識した問題を準備するにあたり、 資料の準備や問題作成にかなり労力と時間を必要とす るのが現実である。以上のことから、出題内容や観点 等の連携を適切に図れる業者委託を採用することが望 ましいと考え、試行に踏み切った。

事前に問題を精選できることや要望を伝え、試作問題を授業内容に合わせて調整することもできるが、昨年度の社会科教員が自作した定期試験問題と業者委託問題の内容は大きく変化していないことを確認した。そのため、生徒に動揺は見られず、授業内容や成績処理などについてもスムーズな運びとなっている。

イ 主なメリット

- ⑦ 資料活用能力を問いながら知識を聞く問題を無理 なく増やし、観点に適した出題をすることができた。
- ② 県立高校の受検を意識した出題傾向であった。
- の 教員の力量やスキルの違いに、無難に対応できた。
- ② 単元テストの実施と単元別評価の実現及び評価の 二期生の導入に向けて有効である。
- オ 業務削減により、働き方改革に寄与できた。
- ウ 主なデメリット (懸念される課題含む)
- ⑦ 問題数と出題レベルの調整が必要である。
- の 低学力を救える暗記系問題が少ない。
- ⑦ 複数校が導入する場合、出題漏れの可能性がある。
- 国 費用がかかる。(校納金で対応)
- ⑦ 教員の問題作成スキルの向上の妨げになる。
- ウ 次年度に向けての留意事項
- ⑦ 部分的に教科担任が問題を作成することや単元テストの実施により出題傾向を固定させず、スキルダウンの改善を図る。
- ① 試験後に問題用紙を回収し、一定期間保管することで他校等への情報漏洩を防止する。
- ② 3年生は習熟度確認テストと重複することを未然 に防ぐ必要がある。
- ⑦ 技能教科の問題作成については、業者依頼しない。
- ⑦ 複数の複数の業者が手がけているため、業者選定を厳正に行う必要がある。その際、対応可能な内容に差異がある場合は、より慎重な検討が必要である。

(2) 生徒の自尊感情を深め、自己肯定感を高める教育活動の推進

- ① 「卒業論文」の導入による自尊感情の育成
- ア目的
- ⑦ 特に、高校入試終了から卒業式までの期間を有効 に活用し、義務教育の修了の意義を考えさせること で人生の節目を自覚させる。

- ① 未来に向かって夢を持たせ、それを具体的な目標に変え、その実現に向けて努力する事を自分事として考えさせ、卒業後の人生に展望を持たせる。自己肯定感及び自己有用感の向上に係る指導の集大成とする。
- ⑤ ①②を通して、予測困難な未来社会においても、 しなやかに生き抜いていく力を育ませる。
- イ 3ケ年計画で取り組む 令和4年度~6年度

1年目	「試行~3学年の2学期から」
	背景と共に目標・目的を明記して臨む
	※目標・目的の理解=自分事の課題
2年目	「テーマ設定~2学年から」
	2年計画に具体性と実効性を持たせる
	※学習活動等と関連付け、テーマ設定を
	2学年の間に行う。PDCA サイクルの導入。
3年目	「1学年のオリエンテーションからの実
	践」※成果と課題から教育課程を独自編
	成する

ウ 今年度(令和4年度:実施1年目)の指導計画 9時間扱い(略)

1	9年間の義務教育を終えて、これから社会の
1 1	3年間の我伤欲目を於えて、これがり仕去り
	一員として何をするのか考えよう
2	今までの学校生活で、どんな場面でみんなの
	役に立つことができたか考えよう
	(自分の良さを見つけよう)
3	9年間の義務教育の中で、自分が成長できた
	と思うことは何か考えよう
4	これから社会で生きていく中で一番大切にし
	たいことは何か、どんな大人になりたいか
5	卒業後どのように生きていくか (下書き①)
6	卒業後どのように生きていくか (下書き②)
7	卒業後の生き方(本書き・発表準備)
8	卒業論文発表① *自己開示
9	卒業論文発表② *自己開示

- ※コロナウイルス感染症防止の観点から、発表は、班 ごととした。
- エ 実践上の留意点(生徒へ)
- ⑦ 今まで学びや経験を振り返り、これから社会の一 員として何をするのか、どのように生きていくのか を考えて論文を書く。
 - ○9年間の義務教育を終えて、これから社会の一員 として何をするのか考える。
 - ○みんなの役に立つことができたか考えよう、自分

の良さを見つける。

- ○9年間の義務教育の中で、自分が成長できたと思うことは何かを考える。
- ○これから社会で生きていく中で一番大切にしたい ことは何か、どんな大人になりたいか考える。
- ※中学校卒業後どのように生きていくかについて自分 の考えをまとめ、論文形式でまとめ上げる。
- ⑦ 原稿用紙1枚以上2枚以内(400字~800字)
- の タイトルは自由、作成はWordで行う。
- ② 発表はクラスごとに行い、自分の卒業論文を自信 をもって発表できるようにする。
- ⑦ 他者の発表を肯定的に受けとめ、応援の心を表す。○発表に向けて自己開示の大切さを指導し、お互いの夢を認め合い称え合う関係を築く。

② 入中応援歌及び掲示物「入中魂」の制作

令和4年度、学区外からの入学者は57%となった。 新たな出会いの中、困り感を抱えた生徒が多く、母校愛 に乏しい生徒も少なくない。そのような中、生徒会本部 主催で全校生徒にアンケートを取り、入中魂(自尊感情 を大切にする心的指針)の理念のもと、入中応援歌1番 を制作した。

<入中魂とは>

- ・正正堂堂、挑戦する ・最後まで力を出し切る
- ・困難な場面で、あきらめない
- ・(好結果でも) 威張らない謙虚な姿勢
- ・(悪結果でも) くさらない逞しさ 人生いろんなことがある

だから一時悩んだり、落ち込んでもいいでも振りかえれば、やるだけやった努力もしてきた

だから恥じることは何も無い 自分の弱さに負けないで、また立ち上がろう 苦しい時こそ、人は成長するチャンスだ、よし! 夢の実現に向かって、また一歩を踏み出そう! (各教室や廊下等に掲示)

<入中応援歌歌詞(1番)>

♪青空のもと出会った 仲間の笑顔、 日々を彩る 希望溢れる夢のために 挑戦しよう 迷わず進もう 努力し続けよう 僕らは一人じゃない 入中魂 絆を胸に 光輝け 入中生♪

(2番は令和5年度に作成予定)

Ⅲ おわりに

本研究を進めるにあたって、大切にしてきたことは、「『特別』という言葉をなくす支援共生教育」

「教職員の心身の健康が生徒一人一人への指導に生かせるための改革」であり、何より「お互いに支え合い高め合い、日々の教育実践を自分ごととして捉える教職員集団を実現し、生徒や保護者への好影響を意図的に導く」ことであった。すなわち、生徒を主語に教育活動を考えるとともに、教師自身の生活も豊かにしていくことである。

1 成果

- ① 教職員一人一人が教育改革の重要性に気づき、実感し、率先して考え、自分ごととして取り組む姿が 多方面で見られるようになった。
- ② 目標申告シートの活用に具体性が見られるようになり、達成に向けた手立てに工夫が見られ、日々の 実践に生かしながら、取り組むことができるように なった。
- ③ コロナ禍において生徒が新たな学びを経験することで、社会性の涵養と自尊感情の深まりが見られるようになった。特に卒業論文の導入を通して、生徒は夢や希望を掲げ、それを身近で具体的な目標に変え、達成に向けて一歩ずつ進むことの大切さを実感することができるようになった。何よりも、「可能性は無限」であることに気づき、自己肯定感と自己有用感の高まりが感じられた。

2 課題

- ① 本年度の研究は、3年計画の1年目である。成果に書いたとおり、学校評価アンケートでは総合的な観点からの肯定的な回答、また生徒や教職員の姿に変化が見られた。次年度は、本取組がどの程度有効であったのかを図る評価項目を設定し、評価していく必要がある。今後の学校経営は地域との歩みによるところが大きい中、コミュニティ・スクール化において、本取組の成果を共有し、さらに地域を巻き込んで推進する意味からも必要となる。
- ② 本研究の成果が今後どのような意味を持つのか注 視し、20年先を見据え、個別最適な学びと協働的 な学びの充実と絡めて取り組む必要がある。特に卒 業論文、評価の二期生に係る単元テストの導入と評 価、業者による一部定期テスト作成など、不易と流 行の視点を踏まえて再度整理し、持続可能な中学校 教育の体制と連動させて実践する必要がある。

佳 作

《佳作》

学校部門

千葉市立更科小学校	校長	三橋	めぐみ	小規模校の小中一貫教育におけるキャリア教育の実践
千葉市立北貝塚小学校	校長	大矢	郁乃	自ら考え、確かに学び合う児童の育成
成田市立成田小学校	校長	君塚	信宏	学校・家庭・地域が連携・協働しながら開かれた教育課程実現のための 「学びの地図」を作成するための方法の一考察
銚子市立飯沼小学校	校長	網中	昭仁	主体的に関わり、豊かな体験を通して深い学びを実現する地域連携の在り方
東金市立鴇嶺小学校	校長	中田	邦明	自ら考え、表現するたくましい文化人の育成
山武市立成東小学校	校長	鈴木	賢司	自分の考えを形成できる児童の育成
芝山町立芝山小学校	校長	根本	敦	自ら考え、表現することができる児童の育成
佐倉市立佐倉東中学校	校長	加藤	康男	地域との連携を活かした子どもの心を育てる学校経営

個人・グループ部門

認定ことも園 千葉敬愛短期大学附属幼稚園	教諭	菅 藤	拓也	心が動き感性を育む園庭環境を目指して
千葉県立松戸南高等学校	教諭	砂村	清史	運動に苦手意識をもつ生徒の割合を減少させる、体育の授業における 3つの工夫と実践例
千葉県立松戸国際高等学校	教諭	萩原	利幸	「部活動に関する一考察」
千葉市立蘇我小学校	教諭	三橋	昌平	戦争学習を自分事として捉える歴史認識の獲得を目指した教材開発
習志野市立鷺沼小学校	教諭	山口	順也	OPPAシートを活用し、児童と教師が単元の共有化を図り、探究する過程に つながる指導法の工夫
浦安市立東野小学校	教諭	則元	亮	「個別最適な学び」を開発する実践
柏市立富勢小学校	教諭	中島	佳子	ラウンドシステムを活用した授業の研究と実践
柏市立松葉第二小学校	教諭	堀越	嵐	授業内における自己指導能力の計画的な育成に向けて
四街道市立山梨小学校	教諭	戸田	大輔	GIGAスクール構想を生かした学校の活性化と働き方改革の推進
大網白里市立瑞穂小学校	教頭	藤枝	実	1人1台端末を活用した遠隔交流学習における教育的効果の研究
市原市立五井中学校	教諭	朝生	和成	ICT利活用による主体的・協働的で深い学びの実践
松戸市立小金中学校	教諭	小池	洋司	Microsoft Teamsを用いた『学び合い』

^{令和5年度募集} 教育実践研究論文集 - 第38号 -

令和6年1月 発行

発 行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部 千葉市中央区中央 4-13-10 (千葉県教育会館新館) 電話 (043) 224-8851